

天 竜 川 の 思 い 出

改修30周年にあたって

昭和32年11月

建設省中部地方建設局
磐田工事事務所

正 誤 表

	誤	正
まえがき 25行	当時	当時
P17. 20行	荒らいだ	薄らいだ
P73. 14行	上半を	大半を
" 18行	28年度の	28年度の
" 24行	昔々の	昔の
" 27行	(台)	(6 台)
P75. 16行終	ませんで	ませんでした
P77. 27行	すれば厘	すれば5厘
P81. 16行	を中心した	を中心とした
" 23行	聞く眺は	聞く眺はこぬ
P84. 27行	建設工事想す	建設を予想す
P86. 9行	飯田村地	飯田村他
" 13行	開拓されて	開始されて
P87. 17行	要望とも	要望をも
P89. 21行	東海道	東海道線
P90. 6行	二俣県橋	二俣県道橋

目 次

まえがき	渡辺 豊	
天竜川改修工事に思う	青山 士	
天竜川調査測量を偲ぶ	山内 壽平	1
天竜川改修工事の回顧	新井 桓二	3
30年の昔を私にこう眺める	藤井 蹟輔	7
30年前をふり返って天竜川改修工事に思う	佐藤正四郎	8
父と天竜川	金井 和子	9
天竜川改修の追憶	西尾 辰吉	10
天竜川改修工事従務当時を顧みて	相乗 忠	11
天竜川時代とテニス	橋本 規明	14
思い出の記	河合 敬介	15
思い出のままに	石野 正男	16
開設30周年にちなみ在校生を想う	石井三千恵	18
思い出	土屋 進	19
天竜川改修中ノ町の思い出	吉田 吉秋	20
思い出の記	村瀬 茂	22
ひげと天竜川	藤田 平司	25
20年の想出	松本七之助	26
3羽鳥	安永 正喜	29
観音竹	三好 次郎	31
思い出多い天竜川時代	柏原 太郎	32
思い出	畑谷 正実	33
天竜川を眺めて	寺崎 清幸	34
天竜川の回顧	本間 茂	36
思い出	立尾 友一	38
思い出るままに	仁科 太郎	39
天竜川を憶う	金子 收亨	41
30周年を迎えて	新村田 鶴子	42
天竜川改修30周年記念によせて	芦沢 英天	44
懐しき我が処女航路	鈴木 滋天	46

天竜川河口で遭難した木曾川丸の思い出の記	古郡 哲爾	49
とりとめのない思い出	飯沼 巻保	50
在任当時の思い出と感謝の言葉	武田 源一	52
機織とともに	松岡 信之進	53
取巻から定員法まで	脇 河	54
思い出すままに	早川 次	56
思い出あれこれ	谷崎 実	58
思い出の記	小栗 良知	60
天竜の思い出	早田 英夫	61
磐田工事時代の思い出	柿 徳市	62
中ノ町へ来た頃のこと	板橋 武雄	64
天竜の思い出	平 胤岳	66
天竜築堤工事に活躍した機織	山崎 章	68
わたくしと天竜川	石川 敏夫	72
遠慮や大いに語る		74
三十周年に寄せて	鈴木 正一	81
沿岸住民の一人として	河合 多三	83
天竜川締切のころ	鈴木 勇	86
附		
工事年表		89
勲章一覧		92

まえがき

リンドバーグが大西洋を横断した1927年にはじまる30年は、ソ聯の人工衛星の打ち上げによってむすばれた。

天竜川の改修工事も昭和28年7月1日に着工されてから、今年でちょうど30周年を迎えることになった。思えば永い歳月を重ねてきたものである。

その間、中ノ町の天竜川改修事務所も昭和25年8月29日には磐田へ移って、磐田工事事務所と名を変え、今では国道工事も含めて担当するようになっている。人も交代は移っても、30年をつらぬくものは直轄工事を愛し、それに身をささげた華い努力のあとであった。

われわれはこの機会に、30周年を記念してなにかをやりたいたと考え、そして天竜川の治水史や工法集の編集とともに、先輩諸兄にお願ひしてこの思い出集をまとめることを計画した。だが正直に言ってこの計画は実現するかどうか、はじめは自信がなかった。ところが原稿をお願ひすると、折返し返事があったのをはじめとして、着々とその数を増し、遂にこのように広い範囲から、多数の原稿をいただけたことをよろこんでいる。

この30年をふり返って見ても、工事は必ずしもひとすじに、順調にすすめられたわけではないようだ。着工されてからの最初の10年は花々しかつたけれども、次の10年間は戦争による影響をうけて、鉄波乱を至てきている。また戦後の混乱をぬけ出して、再び工事が軌道にのせられてからは、世の進歩におくれぬような努力も必要になってきた。

これらの長い歳月の間、好調につけ、波乱につけ、そのどの時期にも、またどの夜の一つのひだにも、先輩諸兄のひたひきな努力のあとがあり、苦しかったことも悲しかったことも、今ではみんな楽しい思い出として、ここに集ったことだと思われる。

私事にわたって恐縮であるが、私は昭和16年に大学を出るとすぐに天竜川へきた。当時はすでに工事の主力は袖浦の飛行場建設に移っていて、内務省の機織をすべてここに集めたことに科所長が誇っておられた時であり、直轄工事の威力をとんだ場違いのところで見せられて天竜川の工事の前途を心配したものである。そして昭和28年科所長のあとを引継いで、再び天竜川へ帰ってきたのであるが、ここで30周年を迎えこのくわだてを担当することができたことを、この上なくよろこんでいる。

この思い出集がこのように形をまとめたことを、ご寄稿下さった方々を

はじめとして、編集に協力された方々に厚くお礼を申し上げたい。なお地元にお住いの元技監青山士先生にとくに寄稿いただいたことは、ひとしお感慕を深めえたことと思う。

この集がいつまでも当社の思い出の種となり、昔語りのよすがともなれば幸である。

昭和32年7月

建設省磐田工事事務所長

渡 辺 豊

天竜川改修工事に思う

昭和2年(西暦1927年)に其工を始めて以来、昭和32年に至る30年間即ち4分の1世紀プラス5年の長きに亘りて工を進められている天竜川改修工事は、其間大東亞戦争の介入のため数ヶ年間殆んど工事中絶の時期があったとしても容易なる工事でない事といえると思います。まして此改修工事は其沿岸郷土の先覚者故金原明吾翁が明治初期より献身的に事業を推進せられて以来よりすれば特に一世紀に亘りての激しき戦であります。

「技ぶりの日に日に変る芙蓉哉」 (ばせを)

世の中は「人が空を飛び治むることから人工衛星を飛ばせ東海道の旅は徒歩、駄馬、人力車より蒸気車、電気車、自動車」と変わりつゝあるも未だに天竜川の水は諏訪湖より流れ下って掛塚に於て遠州灘に注いでいます。しかし其河の相は社会状態の変遷と共に変わりつゝあるのであります。既に諏訪湖河口に於ける調節水門、其他本流に於ける蒸阜、平岡、佐久間、秋葉等のダムの大造に因って其河相は急激に又非常に変わりつゝあります。従って其下流の平地部に於ける河状も変化するのは当然の理であり、従ってそれに対処する治水利水の方策も更に改めて研究考慮すべきは申す迄もありませんと今般に工法資材は人力堀削、人肩牛馬車土砂運搬より、機械堀削、機械運搬、コンクリート、鉄材料と変わりつゝある事も、所詮は天然と人との戦と妥協であると存じます。

しかして我等の祖先が天竜川の河原を変えて遠州の沃野となし、「祖父と親その子の庭や疍みかん」(ばせを)の地してくれた努力と労苦に対し、

尚茲に昭和2年より現時に至る30年間治水本工事に将又水防作業に多大なる犠牲を払われ又苦勞せられた従業員及び地元協力者各位の健闘功績に対し深甚なる敬意と感謝とを捧ぐるものであります。

30年の歲月長しというなかれ、其工事既に成れりといひ得ざる今日に於ては繕まず繕はず研究工夫を重ね、此土地を護り、此土地を益せしめ祖先の徳と其勞に報いたいと存じます。

是よ人の手の業は野の如し、然れども我等の中には野中兼山、熊沢壽山、石川丈山、角倉了以、河村瑞軒近くは古市公感、沖野忠雄及び金原明善等の諸先人先生の血の流れいることを自覚し、自らを慰め、自らを信じ、又先人の跡を遂うて奮勵以て災害を防除し治水を民生の福祉のために利用せんことを務められんことは、天竜の水に生を享け生を築み終には其処の上に帰せんとする泥生の切なる念願であります。

昭和32年11月3日

青山 士

天竜川調査測量を偲ぶ

山内 嘉平

私は大正5年静岡県に奉職して、昭和24年退職するまでの34年間の内ノムケ年を天竜川で暮したので、その思い出は多いが大正7年から9年にかけて、内務省土木部河川課で天竜川改修に対する調査測量を行った時、お手伝いした時が一瞥なつかしい思い出となっている。

この頃私は太田川水ノ期改修工事監督のため、元の御厨村に滞在していたが、天竜川調査へ参加の命令を受けた。22才の5月であった。実務について間もない時であったので、最高官庁のベテランに伍してついて行けるかどうか、土木屋ノ年生であった私は心算でならなかったが、この調査が終れば内務省に転属し天竜川改修工事に優先所属するなど、正に棚ボタものに同僚からは羨望の的にはなるし、自分より他人の方が喜んで激励してくれた。行くには行ったものの名にし負う大天竜の雄大な景観に吞まれて、こんな大河川の測量だなんて、一体どこから、どうして行くのかとしばし呆然としたものだったが、調査の終る頃にはもうこの大河川もさほどとは感じないものになってしまった。

調査は大正7年に始って9年に終り、この間若24年を暮した天竜川の測量は、内務技師安栗切という人の担当で、現場は内務技師内藤鼎二氏が主任で、助手に石原内務技師それに今は故人となった永山三右エ門君、それに奥から私が参加した。河口から二俣町鹿島まで6里半ほどが調査区域で、縦横断、平面測量、河口沖合の深淺測量、と洪水観測がその主な仕事で、主任は二俣町鹿島から、元豊田村永島と最後の年は掛塚に転じて指揮し、私と永山君は各所に移動していた。永山君とは年も同じであったし、お互に若かったので、頑張って天竜川も狭しとばかり活躍した。

河口から五右衛門及各輪中の要方に2町毎に丁杭を差入れ、縦断と各丁杭毎の河心横断から始められた。河口附近など1本の横断延長が4000米もあり、思わぬ障害などでなかなか苦勞をしたもので、大天竜の河心を6里半に亘って2町毎にジグザグ行進をするなど、おそらく我々以外にはないことであろう。

この調査は喜ばれもし、又嫌われもしたもので、この測量が終ると、工事が始まる上島や鷲見輪中は川になってしまう。池田は出張っているから臨時は余程後退する、掛塚も削られる。その代り掛塚港が復活する。川中の寄川

を取って汽船が中ノ町へ着く。山のような堤防が出来て馬路は10間位になるとか、いろいろな噂が出て、実際どうなるかと聞かれて困ったこともあった。平面測量で間口、奥行きにテープを引くといよいよこの家も川になってしまふのかと早合点して、泣いて手を合せる老婆があるかと思えば、どうにでもなれとタンカを切られるなど笑われぬ場面もあった。

河口沖合の深淺測量は、海岸6,000米に亘り沖合へ1,000米位までの深淺を測ったが、名にし負う遠州灘の荒波を小舟を使っての作業は全く想像の外で危険と見たこの作業に恋じてくれる船頭がなく、ようやく見付かったものの、乗り手が10分とたたぬうちに舟に酔って、作業が出来なくなってしまふ始末であったが、幸い私と市川という工夫が舟に酔わないでこの仕事を担当した。危険もあえて嫌わず、張切ってやったが、1日夏り波の出ることで魚師にも恐れられている河口沖合を測った時、危巖な船頭でさえ首をかしげる斜波を喰って、舟は波に乗り上げたまま、渦巻く河口めがけて、矢のように突入して行った。この時ばかりはさすがの船頭も色を失ったが、突入寸前裏波を受けたのが幸いして、奇蹟的の脱出が出来て助かったがあの時のことは、今でも目に思えて肌寒さを覚える。二俣町鹿島島羽山下に洪水観測所を設けて、出水毎に観測した。なかなか思うような記録がとれないで調査のうちでは一番苦労した作業であった。

こうしていろいろの思い出をのこして、調査は大正9年3月に終わったが、聞かされて来た調査終了後、私の本省転属が一向表面化されないで、内務省まで出掛けて行ったが、結局要領を得ないでしまった。長蛇を造して40年、階前の栞葉己に秋声、あれから天竜川にも幾度か春が訪れ秋が過ぎて行った。昭和2年改修事務所が中ノ町に設置され、沿岸民待望の改修工事は実現した。当時私は浜松土不出版所池田工^所主任として天竜川の維持管理に当たっていたので、修繕工事や河川管理上のことで打合せや、却指示を受けるため改修事務所へ行くことが多かった。その節度見聞するこの大工事は私には大きな魅力であった。調査当時聞かされた本省転属が出来ていたらこの工事に加わることも出来たであろうと残念におもわれてならなかった。30年の屋簷は夢のように流れて今や天竜川の改修工事は完成の域に達したという喜びに耐えない。直接この大工事に関係しなかったとはいえ、その調査に加ってお手伝いしたことが幾分でもお役に立っているかと思うといささか誇りを寛ると共に庶上の喜びとしている。

建設省今回の改修工事は、治山治水の先覚者金原明善翁の偉業と共に、大天竜治水の大業を完成した。ノアの洪水がその跡を絶ったように天竜川も洪

水惨事の跡を絶つてあるう。天竜平野には満々と水をたいた用水網が拡がった。美りの秋はいつまでも続くであろう。上流には巨大な仮入閘ダムが天竜川千古の激流をさえぎった。天竜下りの橋脚は昔の厚となったが治山治水の大業と共に大天竜は今や新しいオノの使命を持って生まれ変わったのである。天竜川は永^{とし}に平和の流れを続けるであろう。

== 天竜川改修工事の回顧 ==

新井恒二

昭和2年7月天竜川へ行き、戦時中2回他へ転じ21年9月退官するまで、天竜川には前後16ヶ年おりました。終始事務所工務において計画と施工に關係し、従ってその思い出も単なる報告に過ぎないようになりますから、特に記憶を添のたノ端を加えます。

東海道線鉄道橋下流は、中本川を拡張して東西西派川を締切る計画で、移動土量が多いからこゝから開始することに定め、先ず河輪村地先、ついで掛塚町地先および芳川村川中島に機械掘削工事を起して、新堤築造に利用し、一万河輪村地先掛塚橋石岸附近に工事用機械器具を修理製作するため、附属機械工場を建設した。中上流は河中砂利洲を点々掘削して両岸旧堤を拡張するから、人力掘削、人力または牛馬力運搬および人力掘削機関車運搬として、計画の上流終端中瀬村上島地先は、西派川を締切り、本流の河中を拡張するから機械掘削とし、新堤の進行するにともなって順次護岸水制、附帯工事など施工した。新堤部は東海道線鉄道橋下流と上流中瀬村上島で、中間部は川裏に旧堤を拡張し、川表は大体在来のままで手を付けない計画だから、護岸水制工事は殆んど上下の両方面に集中された。護岸は、下流部は緩流であるから玉石空積、根固は粗朶泥灰とし、上流部は急勾配で水位の変動多く、乾湿を繰返しているから玉石張、(後コンクリート玉石張に改めた) 根固は上層鉄筋コンクリートの改良木床を施行した。水制は上下流各々その根固に準じた構造である。中流部で水流の偏倚する所および上流部で水制頭部に水勢が激衝する所は、天竜で古い時代から用いられている養牛を施工し水勢を緩和せしめた。昭和3年河輪村地先に起工して7、8年頃には殆んど全川にわたって工事を施行するにいたったと思う。

東海道線鉄道橋下流の西派川締切は、本改修工事中はもっとも主要な工事であって、この計画線中に鉄道引込線、製材工場、舟溜などあり關係複雑しており、オノ案からオノ案まで比較研究されたが、地元民の恐望で攻究調査

の橋梁、川中島上流端から河中に新堤を築造し、国道橋にて旧堤に取付け、水門を設けて新旧堤間を水路となし、中ノ町村、和田村地先の堤防沿いに帯比している製材工場および上記の諸施設に変化なきよう計画されたが戦時に入り着手するにいたらなかったものである。

後、聞くところによれば、さらに計画を練り直して、大体当初計画に準じ川中島新堤の上流端から西派川を締切り、和田村、中ノ町村地先は旧堤を拡張して国道橋にいたる方針の下に施工中であって、戦時中水源地方の溢伐により洪水の急激なる上昇を招く危険があるから、こみ入っている諸施設を処理する苦勞はあるが、将来の安全策をとり、河中の計画河中に沿う新堤計画をやめ、旧堤拡張とし鉄道橋上下流の河中に余裕をもたせたものと思う。

昭和ノ三年六月末、引続いて又回襲った早朝洪水で、中瀬村上流地先の新堤は大被害を受けた。洪水時の工事状況は、西派川締切を含めそれ以下の新堤築造および旧堤除却は殆んど竣功し、新堤々脚護岸も大体竣功していたがたゞわずかに残っていたため、旧堤の上流附根除却跡、旧河岸を利用し既往水位を考へて充分余裕をもった高さの仮締切をして、残りを急ぎ施工していたところ、六月末としては稀有の洪水を数日中に二回も受け、仮締切を溢流突破された。石張の未竣切部は激流のため洗掘せられ、空覆なれば遂次崩壊し本堤を犯さるゝに至ったもので、壘橋から軍蔵の応援を受け、必死防水に努力したが、崩落相ついで起り、(数日高水位が続いたため堤体弛緩した)欠壊延長、堤防500m、護岸約700mに垂し裏小段を残し、手詰り破堤を免れた。被害の原因は、鹿島の新設鉄道橋々脚の影響により、主流右岸新堤に向い水勢特に強大なりしことおよび仮締切が旧堤除却跡の旧河岸と共に下向水制の作用をなし、その溢流水勢の向う下手に不幸にして前記僅かな石張木ア部分があったためと思われる。

この水防作業中、応援軍隊の献身的努力は忘れ得ない。振役に用いた立木は宅地附近あるいは山林にあるものを、非常の時であるから任意伐採し、兵士数人でかつぎ堤上に居る将校の合図に向って直路を迂回せず、田畑湿地帯水路などの無く直線コースを採り、徒歩で運搬したから早く所要箇所へ到達することが出来た。他班は立木の枝に砂利俵を取付け元口の方には八番線ニ子烈を結び付け、用意と同時にノ紐は線を引き張り、ノ紐は元口を川下にして河中に投入し、河中で半廻転して元口を川上とし、水際に引付け線の他端は堤内側に打込んだ杭に緊縛する。この振役工事は崩壊延長が長いから内務省側と分担して施行して貰った。またノ紐は堤内側に杭を打込みこれにマニラロープを緊縛し他班は浮胴衣をつけた兵士の胴に結び付け、激流逆まく崩

壊箇所の水際に降りて行って、鉄槌で杭打を行い積土俵して懸命に防止に努めた。堤上の将校は、この命綱を持ち極めて緊張して凝視命令し、いつ崩壊して激流中に埋没するかも知れないような危険作業を敢行された。この戦場のような混乱した水防作業中大した負傷者もなかったことは不幸中の幸であった。こゝはいわゆる天電の峡谷から広瀬な平野に出る所だから洪水は遠落しで物凄かった。水防の最中に水害視察にこられた土木局の人が、水勢の最も衝撃する崩壊箇所の前方に水制を投入して刃を殺ぐべきだと主張し、腕の達者な船頭と急流工事の鍛練な請負業者をもとのめたが、この渦まく奔流ではノあしも出ないうちに船は転覆してしまふと全く危するものは危かったがその大胆壮語には皆一驚された場面もあった。時期が出水期中であったから被害対策としての必急工事は、昼夜兼行で実に多忙を極めた。続いて復旧本工事はこの洪水の状況から考へて単に旧形に復するだけでなく、一層強固にするため、被害箇所は流勢激衝し築堤少しく河中に突出する傾向があるから、30m後退して曲線を緩和し、護岸は計画洪水位までコンクリート玉石張とし、根固改良木床の幅員を増し、水制は改良木床上にコンクリート大塊を打ち適当な距離に配置した。

下流右岸河崎村地先引堤工事は、新堤ならびに堤脚護岸竣功し前方の旧堤除却後数回の洪水を受けたが、もと旧堤の上流取付附近は甲央本川の主流が追っており、水勢の激激あるにかかわらず何卒異状なかったことは、下流方面工事担当の坂永山校士が旧堤必分に際しその下脚護岸と新堤護岸の取付を周到な注意のもとに施行し、下向水制の作用なからしめた結果であった。

余録 永年の河川工事で感じた事

- 河川法線を計画する場合、兩岸を規則正しくパラレルにするよりも少しは屈曲あるも成るべく旧堤を利用し俾べき所は利用すること。旧堤は永年固まっておって其の力が大きいからである。
- 洪水の場合堤防の浸透線が川裏法先に達せざるようにするため、裏小段は勿論必要であるが、川表小段も高める要がある。
- 引堤する場合、新堤竣功後2~3年で旧堤を除却するときは、危険の場合が多い。成るべく延ばすこと。但し諸種の事情で余り延ばす余裕がないときは、新堤に床固水制を施設してから旧堤除却にかゝることが肝要である。此の場合は未だ水を受けた経験がない新川敷に入れた水制であるから、流向予期の如くならずノ部水制が破壊されても水制なきたの受ける水理の多れを比較すれば遙かに少ないと思う。

- 下向水側は河岸に悪影響がある。同種の理により旧堰除却の場合上流部の附根除却には特に注意を要する。
- 風向其他流勢により水位上昇する所は、其の箇所の高さを高めること。
- 護岸を高水位まで施工する場合、上部は水圧が低い理であるから（天端附近では零となる）金をかけ過ぎないように注意し、むしろ下部根固に食分をかけることが肝要である。
- 種管の堤外水路の方向。用水は上向、排水は下向を可とする。堤直角は考慮を要する。
- 砂防堰堤下の捨石ブロップの形状はキューブか長方形が結果よく、巨石は勿論が落ち。
- 蛇行している中小河川の法線を計画する場合、洪水の際通を良好にするためショートカットを連続させると、次の困難に遭遇することがある。
流距を減らすため流速を増し、河床の荒廢により堤水路新設護岸が崩壊することがある。
渇水期、種管に用水取入れ不能のため屈曲部の深い水溜りで灌漑用水をポンプアップしている所がある場合、屈曲箇所を橋め過ぎると河中の水源地を失い、旱魃で流水杜絶したとき用水問題で農村の紛争を起すことがある。

以下は他川にわたる余談ですが、昭和42、3年頃利根川才3期改修計画（取手鉄直橋～鳥川合流点）のため測量にやられた。その頃は水だ学校出たての若君で広大な地域の実測量には随分苦勞した。当時群馬、埼玉の利根川には長大な下向水側があって流勢を対岸他堰に向け自分の渠を保護していた。そのため洪水の際相当被害を受けた地先もあって互に不平をいってあったが何も判らない若輩時代であったから、さして気にも止めなかったが後になって、大河は國で直轄施行しなければ救われないことがはつきり判った。

大正初年荒川放水路計画のための測量に行った。当時荒川放水路計画主任技師は本省におられ比田存一という非常にやかましい人で雷親爺といわれた。よく日誌に測量進行模様を見るため現地に来られたがいつもニコニコして夏など炎天下で汗を流して測量している我々を慰められたもので、とうに故人になられたが今でも雷の笑顔を思い出しいい人だと思っている。今の若い人は大河川の測量をやる機会が少なくなったと思うが同じく荒川の大三角測量で測量の見透線中及附近にある主な建造物とか気付いた箇所を野帳に記入しおき測量が終って図面にかきりペンシルワークがすんだ時大三角の見透線中を調べ前の記録と照して見ると線中にあるものが外されていたり外れていた

ものがかかっていたり其他オフセット班の間違いが発見され再測訂正するということがあった。平井の燈明寺という寺の本堂で出来上がった平面図に計画法線を入れられたのは比田さんであったが全然川もない市町村の平野に計画していくので法線のもって行きようで大工場がかりたり、外れたりすることもあるから図面は精確でなければならぬとつくづく感じた。比田さんは余り鉛筆を削らず尖端を太くして使用され巾杭を打つ場合地先の状況によって少しは融通がつくよう余裕を持たせた。巾杭打ち終ってから法線間距離を実測して計画河巾をチェックしておられた。

三十年の昔を私はこう眺める

藤井 顕 輔

偉大なる大天竜と取組まれてから30年、頃日現渡辺所長よりこころで1区切りして、「天竜の思出」有象無象の飾らざる当時の苦をとの事、喜んで平生も白髪をひねり憶ふこととします。走人の線香と掃き捨てぬ様に、今夏在床の息子の許への途半、怒にうつる天竜の流れその先を争わず、悠々大川の石を辱かしめずというわけですか、さて私から見ると中ノ町附近の戦材、砂利採取の諸工場施設のノ変と、どっしり構えて動かぬ両岸の巨堤、走脚の締切工事と、当時こんなことが果してと素人のなさけなさにそれでもおえら方の命を背後に、こつこつと冷汗を流してまごまごした気持はだれに訴える気持もありませんが、全然無駄（ゲッキュードロボー）ではなかった。いやそこのノ木ノ石が今日の幸を告げるように相手は無心でもこちらで感じました。こんなことから初まって河口持塚、河輪から上流二俣に至る完成されたであろう今日の両岸堤防。広大なその敷地下に永久に静かに眠っている多くの話題を繰り出して、慈喜交々私は終りを知りません。

このごろ手にして夏に敗服しました関東地運宮崎用地課長の至言の通り、用地屋商売の型に自然はまり込み、総ての事は腹の虫に云い聞かせて、この道なればこそ頂ける修養を、地下足袋、ゲートルで自慢じゃないが全区域に印象づけられ、天災ではないが忘れかけた頃「天竜の思出」如何との出題にやはり湧ぶのはこんなことです。

東、立川両御所すでに故人となられ、今度ば私かなと見当違のようだが、天竜と共に其頃の知友各位の郵辭などなつかしいものです。佐藤兄の提言そのまゝに導御堂と玄關前のわれわれ手稲松に初まる登足から、債取橋の往復爾来ノ有余年その後他に播磨、下駄、また復私最後に首で終幕、手稲の松

は今尚健在ですか？ / 昔勝のすわり長かった天竜時代、華かでもあった天竜時代、後生大争に今なおこの道でおられるも、天竜あったればこそと約外れ脱線「天竜の思い出」の記述令に色じて誰かに読んで貰いますようにのよろめく披露として。

30年前をふり返って 「天竜川改修工事」に想う

佐藤 正 四 郎

私が天竜川に来たのは昭和2年で、改修事務所開設当時でありますから、天竜川改修工事の草分け時代です。この私も当時は青雲の志を抱いた新卒早々の元気な若者だったので。太田川という地味にもないような小さい川から天竜川へ来た時、唯々「雄大」という感に打たれました。こんな大きい川を料理してゆくのかと思うと心奪み肉おどり、一種の誇さえ湧きあがって来た。

事務所は仮置の地で、雨降りごとに浮御堂となる。入口の小路から定工天さんに背負われたことを思い出す。中ノ町という処は天竜川の洲より低いと聞かされた時は驚きもしたが、何くそという川の暴威に対する反抗心さえ湧き出た。それから早くも30年過ぎて、自分は知らぬ間に白髪の老人となっているが天竜川はあの蛇の様にウネウネした昔ながらの長いあぶなつかしい横取木橋が堂々たるコンクリートの横取らぬ橋と変わり、頑丈な堤防と新式な水耐護岸で立派な壮年期を迎えて、悠々と流れている。沿岸民の怒と国のすぐれた技術の華の粋をあつめた直轄工事で完成を怠っている。そして上流には、日本一を誇る佐久間ダムが発電を開始し、近い将来秋葉ダムも出来る。

暮れまわった大天竜の水は今や沿岸農地をうるおし、遠くは大浜松市民に貴重な飲料水を与えつつ黙々と流れている。そしてかつて私を驚かした中ノ町より、高いあの中洲もその姿を滴す寸前である。科学が勝つか、自然が勝つか軽々とはいえないが、一応は治水事業は大きな功績をおさめ、人類に多大の利益をもたらしたことは確かである。

天竜川直轄工事草分け当時を顧みて感無量である。

長い長い30年の夢は正夢となって静かに覚めた、事務所屋の私でもいささか誇を覚ゆる次男である。途中澁滞して数年の空白時代があったとはいえ、因縁、建設省と2代に任せ、ほとんど一生涯を直轄河川工事に捧げ得たこ

とを無上の喜びといたします。

父と天竜川

金井 和 子

諏訪湖に涙を流し、遠州海に注ぐ天竜川は過ぎし日々思い出を清流にたくし、沿岸の人々に愛され親しまれながら静かに流れています。しかしその静かな流れの陰には昼夜兼行風雨にくじけず改修工事に全精力を集中し、人々を災害より守り、地域産業の発展につくした工事関係者の功績が天竜川改修30周年を迎えた今日ひときわ脳裏に湧んでまいります。この意義ある機会に天竜川と父の思い出といわれて親子2代、始めと完成に近い天竜川改修工事に勤務出来た事を幸福に思います。思い出と申しましても父が在取しましたのは昭和3年より11年、ふた昔前の事で、その当時幼なかつた私には天竜川の様子など知る由もありませんが、ちようど昭和9年の懐中日記が手許に残っていますので当時を少しでも憶んで戴きましたら二の上もありません。

その頃俸給月額85円、賞与年額255円、親子6人贅沢しなければ結構のんびり暮せたようです。

「一月一日午前十時ヨリ事務所ニテ新年宴会ヲ行フ。午後一同ト夫ニ主任宅へ年始ニ麻雀ヤリテ夜明ス」 麻雀も今と変わらず主任のお宅の興隆さぞ迷惑な事でしょう。「四月二日、本日賞与ノ降令アリ入割ナリ」 その頃は4月に賞与が出たようです。また出水はこの年には少なかつたようで「六月二十日出水アリ機關車運転、仮橋ヲ破壊ス、高園ニテ破壊セントス」「九月九日、二百十日平穩ナリ」「九月二十一日、暴風雨大阪方面ヒドシ出勤流最観測ヲナス」 暴風雨の中子供心にも夜出勤する父の俊姿が忘れられず今になっても夜中大雨が降ると堤防はと時々妙な錯覚をおこします。その頃も野球は盛んだつたようで、シーズンともなれば日曜日ごと、中の町、望西小学校々更にて地元青年団、女子商業の先生を相手に時には菊川、矢作川まで野球、野球の遠征試合にいったようで、ロマンスグレーならともかく、ふる、女オのあごひげをはやして野球帽をかぶった姿は目立った事と思います。その不精な中国の老人のようなく白髪ならともかく、ひげの出来は「伸ばされぬだろう」が「否、伸ばしてみせる」の意地であの始末で、写真も何枚ありますが鐘撞機気どりですましています。しかし親の病氣には勝てなかつたともみえて、そのひげを嫌っていた祖父の危篤の電報(金伏しでしたが)

に遂に刺ってしまい、その方に苦笑しながら兜を脱いだ事でしょう。10月に入れど鮎釣りも盛んで処々「鮎釣りナスモツレズ」があり「十月十日池田上流七蕨新田ニテ鮎掛ヲ行フ雷雨アリ少シモ釣レズ、濡レテ午後八時頃カヘル」又土曜、日曜にかけて2、3人の方と「明朝マデ鮎掛ヲ行フ取高二十尾」その日の午後「十更地先ヲ冊ニテ下ル、トレズ午後十時頃カヘル」とあり恐らく母に「夕食のお菜は仕度せずに持っていた」位は皮肉られ、時には遅くなって川魚を料理する若かった母の姿が目に見えこのような最も良き時代に勤務出来た父の面影が時代のへんせんと共に一層しのばれます。20年前汽笛を鳴しながら心機関車がのんびり走った頃とは、うって違ってガンブトラップ、ドラブショベル等が活躍する機械化された工事現場、ラジオはテレビとなり、人工衛星など夢にも想わなかった父に、今一度建設機種の発達の様態らしさを、そしてその上流に日本一の科学の粋を築いた佐久間、秋葉ダムを見せつけてやれたらと思います。改修完備された立派な堤防、今は昔の面影など見受けられませんが、流れる水だけは相も変わらず数10年采の数々の工事、災害、それに伴う人々の辛苦を無言の内に永スに語り伝えて行く事でしょう。そして今後も愛され親しまれてゆく天竜川の流れをみつめる時何かしら暖かいものを感じ、その中に父の面影を見出します。

天竜川改修の追憶

西尾辰吉

天竜川の改修工事は内務省石古屋土木出張所が再開されたと同年の大正12年度より着手されたが、関東大震災の影響等により2箇年程は諸般の準備に終り、最初は太田川改修事務所主任技師松波秀一氏が担当されたが間もなく同氏筑後川へ転任され、後任の故匹田政夫氏により昭和2年7月浜名郡中ノ町村に改修事務所が開設され、初代の主任を兼務されたが、昭和4年5月同氏新潟土木出張所へ転任されるに至り小室天竜川改修事務所主任技師を命ぜられ、昭和13年7月まで在任し官界生活29年の3分の1を過ごしたのであるから、最も思い出の深い所である。

就任当時一号国道橋梁たる天竜橋は、貧弱なる木造の貨取橋でありその上流池田村に木橋が架設されてあったが、其後静岡県にて現在の橋梁に架け変え、池田橋は撤去されたのである。更に上流鹿島橋は昭和12年現在の橋梁に架け変えられ、ただ下流舟塚橋のみが木橋で洪水の度毎に災害を受けていた。

当初の計画においては、旧池田橋附近河巾が最も狭隘であったが、其後これを拡張することになり旧池田橋上流子巻の森より国道橋に至る区間の右岸堤防を引堤することに決定した。次に国道橋より下流兼海道鉄道橋に至る区間右岸中ノ町村地先には、上流より狭にて流下された木材を引揚げて製材工場跡比しこれらが営業に支障を与えざる様堤防拡張を施行することを要望し、又鉄道橋より下流は三川に分派しているのを中流の河道を拡張して適当な河巾を与え、兼西浜川はこれを締切る計画であるが、西浜川は低水流量相当ありこれを完全に締切る時は、季節に変化を与え筏の流着に支障を及ぼす懼れあれば、締切方法について考究されたが在任中は決定に至らなかった。

最も思い出多きは昭和13年6月下旬梅雨季の連日の降雨にて天竜川としては珍らしく相当の洪水水位が続き容易に減水せず当時中瀬村上島地先の新堤法先にて玉石張護岸工事を施行していたのが崩れ出し、新堤法面まで崩壊し始めたが偶々二俣町に架橋演習のため屯営していた要橋工兵隊及び浜松飛行隊、高村砲隊の応援を得て3日3晩不眠不休の水防により漸く堤防決壊を防ぎ得たことである。もしこれを決壊させたらその災禍は遠く浜松市附近まで及んだかも知れないのでほっとした次第である。

此洪水の後を顧みれば、3立方メートル積土運車には土砂を積載してあったが、転覆されて車輪が上になり20心機関車は砂礫に埋没されて一時行方不明になった様な状況であった。

天竜川改修工事関係を除いて最早20年、其間戦争戦後の社会状況の急激な変化により共に工事に従った人々の中に故人になられた方々もかなりあることを思うと感慨無量である。

天竜川改修工事従務当時を顧みて

相 葉 忠

私が天竜川改修事務所へ採用されたのは、昭和4年8月で(22才)事務所は中ノ町村にありました。製材工場の機械の騒音の中に囲まれた環境の中に選っている事務所ではありませんでしたが、それとは対称的な平和で、愉快な雰囲気の仕事所でした。当時は乾私雑の時代で「大学は出たけれど」という映画まで出た頃でありましたが、天竜川改修事務所随所に伴って、特に技術屋3名を採用される事となり、岩城克雄氏が本局勤務、荒金春夫氏が茅川村先間の現場勤務、私が事務所勤務として採用されました。私の初任給が月給50円に月額旅費12円計62円也の月収、下宿代が月12円で二階6畳の間

と3食付光熱費共でした。今過ぎた日を回顧すれば恐らく一箇生活の楽な時代であったと思われま。人夫賃が男70匁、地下足袋ノ足の値段位としたものでした。女は35匁から40匁、今では匁位の貨幣もないので、今の若い人には当時の貨幣価値が想像出来ないと恐います。洋服は中泉の大石洋服店が出入商人で冬服ノ着黒サージで35円位、毎月5円月賦を払う人はまず優秀な方でした。

当時の取員録を今開いて見ますと

内務省名古屋土木出張所	長技師 2等3級従4級3	辰馬錦蔵
天竜川改修事務所	静岡県浜名郡中ノ町	電話 中ノ町5ノ番
主任技師	3等4級従5	西尾辰吉
技手	1級従8	新井桓二
同	5級	高橋真一
書記	月75円	鈴木英雄
工手	月120円	橋本規明
同	月90円	永山三右衛門
主任技師(前務)	3級	西尾辰吉
技手	3級	立川 勇
書記	月79円	藤井頼輔

掛塚築堤現場勤務	工手	月90円	佐藤正四郎
事務所勤務	〃	月86円	藤田兼吉
河輪村機械工場勤務	〃	月82円	金井弥七
事務所勤務	〃	月65円	青田政一
事務所勤務	〃	月50円	相兼 忠
事務所勤務	〃	日155円	江田亨之助
事務所勤務	〃	日130円	荒金春夫
臨時雇	日138円	井野口甚太郎	
臨時雇	日115円	斎藤 栄	
工手	月100円	島崎道雄	
雇	日155円	高坂忠夫	
臨時雇	日130円	長谷川忠一	

同じ建物の一室に天竜川土地収用事務所があり当時の取員は
私が入所したお前は当時本局は属中休暇期間として毎日半ドン、事務所は3時迄勤務で昼休みは囲碁、大弓をやったもので、3時から中ノ町村に田というテニスコートがあり、ほとんど毎日のように新井、立川、佐藤、斎藤の諸氏と共に通ったものです。下宿生活をはじめた私のつれづれを慰めてくれる唯一の楽しみであり、入所まで一茂もキューを握った事なかった私は怒を上げて指導を受けたものです。確か一球又幾位だったと思ひます。しかし私の入所早々テニスコートをつくってもらえる事となり、私はレベルをかけて一生懸命にコート作りの弊に当たったものです。逐次取員の趣味はテニスに転

向、ベテラン橋本規明氏のコートを受けたものです。翌年8月に本局の大会に橋本規明氏前衛、私が後衛でベストセブンの中に入賞して、其の年の全国大会当巻横浜土木出張所の大会に出場権を得個人賞3等でテニス用シャツとズボンを賞品に貰って来ました。その後逐次、三好次郎、村瀬茂、安永正喜、畑中次雄、藤田平司(当時小池)、成田真氏等の取員が増え野球部を結成、キャプテンとして投手を承りローカルチームの大会で優勝旗を獲得した事もありました。一箇私達のチームとしてマーフしていたチームは浜松の関眼堂でした。丹々ノ回飲心会として荒金春夫氏と2人で独身会なるものを結成、50匁会費で浜松のたこ松へ自転車で行方走ったものです。御丁子ノ本7匁なので結構いゝ気持ちになる迄飲み、帰りに夜更けを告げるチャルメラを聞きながら、支那そばを屋台店で食べて下宿へ帰ったものです。年を重ねるにつれ独身会のメンバーも増えノ人位になった時が最高でした。ところがお互に結婚して資格を失う者が増え、遂にはゼロという事となりましたが、結婚者にはコーヒーセットをお祝いに贈るのを慣例としていました。その後マージャンも盛んになり、毎年正月の互例会のすんだ後西尾主任宅へ流れ込み御馳走をよばれながら大会をやり賞品を出してもらい事を年中行事の楽しみノ一つとしていたものです。私の入所当時の取員一同の写真を取らせて思い出の1頁を飾りたいと思ひます。〈写真略〉

最後に家族の現況を下記致し、前此独身会華やかなりし日の思い出の対紙とさせて載せます。現住所は本年4月に終戦の20年7月に戦災に遭った本籍桑名の土地を諦め23年以来住み馴れた当地(旧称草井村)に雨降ればバケツを持って家のあちこちを走らなければならない様な雨漏りのする古家を購入永住の地と決めました。一宮から、犬山行のバスに乗って約40分にて木曾川左岸堤上小沢停留所下車徒歩約7分、停留所の菓子屋で聞いて載ければ解ります。

家 族 (昭和32年10月6日現在)

- 相兼 忠(49才) 昨午恩給年限に達し本年8月31日退官、9月1日より名古屋市中村区則武町一丁目25番地株不建設株式会社名古屋営業所に入社
- 妻 〃 か寿(43才) 愛知県教育課より、丹羽郡、桑原郡、江南市地区の婦人指導員を任命、勤務中、週1日半位出勤を要す。浜松市茅川岡野出身。
- 長女 婿 貞一(23才) 本年4月下記長女の婿として当時木曾川上流

工事々務所佐藤史所長の仲人にて養子縁組。木曾川上流
工事々務所庶務課勤務。旧姓早川同居。

- 長女、あけみ(23才)木曾川才ノ出張所に勤務。同居。
- 次女、ひろみ(20才)慶応大学経済学部1年生。東京都に下宿。
- 三女、あをい(14才)江戸市早川中學校3年生。同居。

天竜川時代とテニス

橋本規明

天竜川時代のことを思うと夢のように楽しかった。なつかしい思い出は数限りない。何しろ自分としても内務省に勤めてから始めての現場であり、青春時代のことでもあるから、よけいに印象が深いのであろう。たくさんの思い出の中から、天竜川といえはいつも真先に頭に浮かぶのは、なんといってもテニスのことである。

私が内務省土木局から天竜川にまわされたのは、昭和5年の正月であった。それから昭和7年7月木曾川上流に行くまで、約2ヶ年半天竜川でお世話になったわけであるが、当時の事務所主任は西尾辰吉さん、工務の主任が新井植二さん、庶務の主任が佐藤正四郎さん、土地収用の主任が立川勇さんという陣容で、そのほか皆よい人達であった。

それに、その頃は今のようにはせち辛い世の中ではない。一般の気分が全然ちがう。生活苦など片影すらなく突にのびのびとしたものであった。自分の青春が二度と帰らないと全様に、あの頃のような取場の気分が懐ける時代は建設局でも再びやって来そうに思えない。今の若い人達は気の毒だとも思う。

さて、天竜川に赴任してまず最初は榑塚の現場に配属され、当時母と一緒にあったので、榑塚町の天竜河口にはほど近いあたりの、さる離れ座敷を借りて落ちついた。離れ座敷といっても、台所などもつき三部屋ぐらいある立派な家で、それがなんと家賃3円也。いかに貨幣価値のちがう時代とはいえ、当時私の月給が130円、それに現場手当として20円ぐらいつく。東京では30円あまりの家賃を払っていたのに、現場に来て急に3円となったのには驚ろいた。当時としても田舎生活がいかにゆとりのあるものであったかが、これでも憶えよう。

仕事の方は榑塚の現場にいても10年1日のごとく20噸汽関車で堤防づくりをやっているだけであるから、突にのんびりしたものである。暖かさあれ

ば、各所の現場から2里や3里の道は遠しとせず、皆で自転車を退ね、テニスをやり中ノ町の事務所に戻ったものである。事務所主任の西尾さんは太田川と庶務であったから、天竜に出勤されるのはだいたい隔日であった。西尾さんの留守日をねらってテニスを始めるわけである。勤務時間中も何もあつたものではない。ところが、テニスで夢中になっていると、何かの拍子で太田川から西尾さんが自動車で急に廻って来られることもある。ちゃんと自動車の運転手は予め買収し、そんなときは、少し遠くから警笛を鳴らせと話してあるので、先の方で警笛が鳴りだすと、さあ大変、大急ぎでネットを片付け、皆が蜘蛛の子を散らしたように我れ先きにと部屋にとびこもうとするあわてた。今でもありありと目に浮かぶ。時には、片付けが間に合わず狼狽中、自動車が事務所に戻りかけたときのバツの悪さ、そんなことが数度あつたけれど、それでもテニスはやめられない。スリルを味わいながら、いつまでもテニスは盛んになるばかりであった。

「天竜川時代とテニス」私にとって忘れぬ楽しい思い出の一つであるばかりでなく、これはその頃勤務していた人達ほとんど全員のなつかしい思い出であると思う。

思い出の記

河合敬介

人生のほとんどを天竜川で暮らした私には、忘れがたい思い出となることはなかなか多い。その思い出も多きは職業人としてのことであつて、それらのことは、おなじようなことをいろいろの面から、語られることもあると思う。そこには何か共通なものがあつて、さほど興味を感ぜられないかも知れぬ。だから私の思い出の記は、皆さんと少々趣をかえた。1私人としてのことを多く語ってみたい。

私がまだ物心つかない少年の頃、寒い冬の夕食後のひとときを、火鉢に手をかざしながら、祖父は、いつものくせのように、天竜川改修の苦心、洪水に悩まされた生家の様子などを語るのだった。もっとも私の生家は今の浜北町の中瀬で、川の堤防とは目と鼻の先といった場所であつたらしい。被害をこうむつた年代は、今日から想像して明治維新前のように思える。その頃は今日のような完全に近い堤防は築かれず、わずかな出水にも破堤したようだった。たびたびの水害で、家の土台は石積にして高くし、消極的な方法で水害による生命の危険を防ごうとしたらしい。あるときの出水で、附近の民家

は流失、難をさけるために私の家に異ったが、刻々に増水するので畳を積み上げ、上に上にさけるが遂には、身のおきどころもなく、前にかがめば口元、後にすれば耳に水が入るといふところまでのこともあったということでした。そのために田畑は荒廃、山林は流され、生命に危険がせまることも屢々あったので、安全地帯をもとめて居を移すこと3度、私は3度目の家で産声をあげたのだが、水防についての構造などは幼年にして浜松へ転居したから知らない。

明治に入ってから郷土の偉人金原明善翁と内務省を訪れて改修陳情をしたり、岩河協力社を興すなど、荒川をしずめるにはなかなか苦心したらしい。

またあるとき、破壊寸前に、村民には難をさげさせたが、自分は進んで難におもむかなければならない。村民として面子、恥責、二度と村民は務めるものではないと、笑いながら語るのだが、祖父の脳裏からはいつまでも去らないと同じように、食後のひとときの物語は、川への憤りを滲かたせ、今日取業人として改修事業につくさせていたがいたのも何かの引合せと思う。父もまた岩河協力社に投ずるなど、3代にわたっての天竜川と取組む苦心談は祖伝の思い出としていつまでも忘れ去ることはないだろう。

さて私達年代の人達には、中川屋と中瀬の災害は忘れがたい。いつも笑顔でむかえ、わがまゝをきいてくれ、遠方に転任しても往復の途中、立寄る人さもある。また中瀬の災害からは事件が進展して、意外な方面にまで関係して本当に綾味の悪いことまで味った人達もあった。夏の行軍のノッ五島浜の魚取りも、終日網を引き、泳ぎ、天幕の下で、のみ、食い、疲れ果て、重い船を引いて帰途につくとき、夕陽西に傾いて、空は紅に染まり、「自然は美しいなあ」と誰かが、かんたんした言葉はいつまでも耳に残っている。当時は天竜川の最盛期で、二俣町下流は両岸施工していて、今日に至ってほぼ改修の目的は達せられたようですが、私もその一員で20余年事業にたずさわらせていただいただけで、何の事蹟も残さず、はずかしい次男です。

思い出のまゝに

石野正男

お優しい皆様、誠に御無沙汰いたしました。失礼ながら誌上で御挨拶申し上げますと共にこの機会をあたえていただきましたことを、心より感謝いたします。

私が現在不摩川下流事務所に勤務されております岩城さんの御尽力で本局

より天竜川改修事務所へ勤務する事になりましたのは昭和7年6月1日で、再び本局へ戻りました昭和15年4月1日まで、この間約8年というものは私のもっとも思い出多い期間であり、終生忘れる事の出来ない期間でありましょう。まず責任と全時に驚いたのは、名古屋と比較して甲の町の余りにも淋しい事でした。軽便軌道にゆられてとどろついた事務所々在地の印象がこれです。そのためかしばらくするといささかホームシック気味となり、名古屋が恋しくなまってまいりました。これを緩和していただいたのが、食事をしていただいていた中川屋の管様、とくにお祖母さんの家族的な温かい心づかいで、今も忘れる事が出来ません。当分の独身者は多かれ少かれ、中川屋の御世話になったものです。昭和10年前後の天竜川改修事務所は最盛期で職員も多く、このため独身者多く、われわれ若い者が時々無軌道的行為をしますので、責任者の西尾所長もさぞかし心労であったと思いますが、反面仕事も張切ってやったと思います。良く遊び、良くやるといったところでしょう。麻雀という遊びを頼まれて教えたのはこの私であり、このような悪い遊び(通用次男で悪いとはいませんが)を導入、遊びに明け暮れた時代もありました。事務所生活約1年で、改修工事最上流の中瀬工場へ従務管之になりました。現場の仕事は始めてであり、何がなんだかかわからずに上司(鈴木米太郎氏)の御指導で仕事をやりましたが、今から思うとムテッポウにゾーッとします。下宿をした二俣の町は人情味豊かな面白い町でした。その当時の良さというのは、その後鉄道の開通や交通が便利になるにしたがい差らいだようですが、私の第一印象です。家内の里だからほめるわけではありません。鮎らしい鮎を始めて食べたのもこの二俣です。

当時の俸給生活者は、今の若い人に話してもうそだと思われるほど良い時代でした。なつかしいですね。あの月額旅費、年末賞与で100円札をもらい二俣の町で両替出来ないのも、浜松で両替した事がありました。

悠々流れる天竜川。この流れを前にして、若い者がやるせない気持ち?で「酒は浜か溜息か」を歌ったこと、鹿島や天王の花火、池田の祿、天竜河口のレフリエイション、皆懐かしい思い出ばかりですが、たゞ一つ悪い思い出は昭和13年の洪水に次ぐ事件です。しかし、この事件も良い教訓となりました。

天竜川改修工事従務者職員名鑑を拝見して御逝去の方が多いのにも驚きました。これら御逝去された方々に対し、衷心より御冥福を祈る次男です。

磐田工事の皆様、私はたとえわずかの間でも天竜川の改修工事に従事出来た事を無上の喜びと存じております。どうかこの大天竜川を立派に仕上げ

下さい。と全時を頼を合せて話しが出来た天竜会を閉催いただくよう御取計
い願って私の思い出を終わります。

開設30周年にちなみ 在任中を思う

石井三千恵

私が天竜川へ来たのは、昭和7年の春でした。才ノ天竜川の大きいには
驚いたものです。同郷出身である機械工場の鈴木さんの誘いで入り、河輪工
場、広瀬工場及び中瀬工場と足かけ7年も勤めさせていただきました。

当時の河川工事は築堤、掘削或は築岸などで、しかも継続工事であったか
ら、一設計工事の竣功を見るまでは数年かゝる程の暢気さでした。従って進
捗状況も機動力を使用する今日とは比較にならなかった。つまり失業者を救
済するのが主目的のような時代であったから、極力労力を使用するように計
画立案され実施せられたものであった。又事務所の規模も小さく人員も只今
の約5分の1位であった。けれども労務者の指導監督にあたる定工夫さんの
技術はもとより、目識も高く評価された所以も当然と思われた。

自分が在任中経験したことは現場でつおさに護岸工事や掘削工事に直接従
事して労務者としての労苦を味わったことである。

「科学が勝つか、自然が勝つか」の文字どおり、粒々辛苦した盛土も刻々
の増水による流失を防ぎ得ざることもあり、又防禦に成功し得た事実はあつ
た。なかでも破堤を契機として発生した。所謂「天竜事件」では10日間も
被験者として取扱いを受けたことは実に忌むべきことであつた。現場内では
空気がこぶる屈突相和し、春秋恒例の泊旅行といひ、夏の「レフリエー
ション」ともいふべき海浜での網曳きの如きは最も楽しかった思い出として忘
れることの出来ないものである。

「遙かに来ました天竜を越えて、花の縁の浜松へ……」と唄の文句では
ないが、工場の街浜松を離れ、史蹟に驚み、盃州の空々風も身にしむ思いで
あるが、四季折々の無聊を慰めるに十分な環境にありながら、何の功績もな
かったことは慚愧に耐えないものがあります。

天竜川から菊川、戦時中河輪工事へと青年時代は夢と過ぎ去つたが、徒ら
に醉生夢死も出来ないものと、最後の努力を傾けて奮闘する覚悟であります。



想 出 土 屋 進

天竜川改修30周年に因んでの思い出を一つ二つ記憶をたどってみましょ
う。10年一昔というが全くその通りで、いつしか年の過ぎ行くのも忘れて
川に育つて20枚屋箱、私が天竜川改修事務所へ転任したのが昭和7年2月、
当時の天竜橋は木橋で橋脚を取っておいた頃でした。非常にお粗末な橋で、
たえず補修をしておいたのでした。よくここを同僚と夕方の散歩に出れば池
田橋を遡って帰った事も記憶に残っております。この頃現在の天竜橋は着工
になって、渠から監督員が5、6名常駐しておいたのでした。私は当時毎朝
ここを散歩してから事務所へ出勤することにしていたのでした。事務所の工
務課に1年いて掛塚町事務所に移る際に西尾所長から命令を受けたのでした。

掛塚は樋町の施行中なので、それから引続いて掛塚沖又築堤、十束築堤と
よく土に座し水と闘って十束築堤締切前まで7年間を川に育つたのでした。
仕事としては旧堤を掘削して新堤に土運搬することと、護岸工事であります
が、冬期はこの地方は非常に風が強く、砂塵がものすごく吹立てるのでほと
んど対岸は見えず、工事場の見通しもきかず、測量など全然出来ない数日か
続いて困った事もあったのでした。秘された事としては洪水を思い出しま
すが、掛塚町上流の十束築堤は丁度本川と東派川の分岐点にあたるのであつ
て、一旦洪水ともなれば流量の少ない東派川も濁流は濁流きものすごい勢い
で工事中の築堤につきあたり、築堤は崩壊されそのたびごとに仮護岸を施工
して水防用として土石を法面に敷設して置くこと数回におよんだことも記憶
のついであります。また中瀬地内の洪水時の記憶にも出掛けたのでしたが、
この年は入梅の雨がかなり長く降り続いたあげく、豪雨の襲来で車軸を流す
ような雨が水深の山肌をたいき、山は崩れて土砂は押し流され、伐木は流材
となつてものすごく、濁流に消えて行く。水面を見れば目が廻るかと思われ
る様な流速であります。昨夜徹夜して警戒したが減水の模様さらになく、今
夜も徹夜かと思つと心身共に疲労を感じて来てどうしようもなく、崩れ行く
土砂の音を聞きつゝ、堤防枕に寝た頃は何ともいえない不気味な感じでした。
堤防の馬踏の半分が一度にドッと崩れて濁流にのまれて行く「もう駄目だ」
村人の悲痛な叫びが声があちこちに聞えて来ます。附近の人家はどこのもかしこ
も家財の引越しを完了して空家となっております。それから工兵隊の新銃が
来たんで来てくれたのは喜ばしいのでした。内務省、工兵隊、消防団と分担をさの

てよく防禦に当たったのでした。部長、所長、課長も不眠不休で指揮を取られ、これで防禦陣は完璧です。大天竜中瀬堤防は三分の二を浸蝕されて食止め得たのです。闘いはまさに勝ったのです。自然を征服し得た一瞬の愉快たとうるにもものなくお互いが顔見合せて呵々大笑。

過去の記憶をたどっての拙文の一節にお笑い下さい。

天竜川改修

中ノ町の思い出

吉田 吉 秋

昭和8年度採用試験にどうやらパスして3月卒業と同時に初めて社会に出たのが、内務省名古屋土木出張所天竜川改修工事々務所で、天竜川と聞いて天下の天竜、改修々務所は行けばわかると採用電報を懐に束定を出発、着任したのが、今の浜松市中ノ町、奥に私にとっては育てられた親であり懐しいところです。

本年は天竜川改修工事々務所開設30周年と聞きまして、天竜川もさぞ立派な成人になったことと慶びにたえません。

任勤中の思い出をとわざわざご連絡をいただいて早速、書こうとしたところ懐しいことばかりで疋馬燈の如く心にうつりなかなかつきませんが、特に大戦前後の中野町で思い出を拾ってみます。

東海の暴れ川といわれる天竜川と昭和8年以来洪水はたびたびあったものの大災害もなく、出水と流量観測、これが出水の度毎に自動的に私等を行動させたものです。

ところが昭和13年6月30日水と記憶していますが朝の4時頃中瀬村上島地先新堤の缺潰の知らせを受け西尾主任と共に現地に急行、缺潰していく堤上に立って主任は応急対策樹立に一睡もさげず努力された姿は今日でもまぶたに浮びます。

数十年采掘に見る豪雨とあって被害は拡大して軍艦の応機と官民一致死力をつくして防水して、かろうじて延長500米の内、裏小段のみを残したものが約150米、裏小段有まで達したものが約20米で破堤をまぬがれたのですが、当時の軍跡、消防団の活躍による水防と続いて災害応急工事、災害復旧工事と昼夜操業で、応機隊は益々比陸にまで及んで約5ヶ月余にして応機対策をとり、災害応急、災害復旧の工事も一段落し工事整理に入り私の任務であった災害復旧工事整理の終わったのが、昭和14年7月末水と思われま

す。

このノケ年は全く寝食を忘れて若き日の土木屋の思い出で、これがよい経験になろうとは思わなかったのが、大東亜戦の志召で戦地にかり出されました。私費も少なく整理も遅れ勝の時これを終了してからの志召は幸でした。

復員して再び天竜川改修工事々務所へといわれました時、奥は戦地8年間に天竜川改修は完成しているだろう。或は二侯より上流の改修が追加されているのかと想像し、下流部の完成した天竜川はどんな姿になったことだろう。中野町地先の特殊地域はどんなに変わったことかと戦前の計画と実施された姿を心にえがいて着任したのでしたか、私の8年間の空白は天竜川にも空白であったようで、戦前よりも淋しく感じられたのです。

終戦後の内地の姿は、大戦中の内地を知らなかった私には尚更悲惨に感じられ、野戦にあって敗戦の苦しみを味うよりもつらいものでした。

食だけの問題でさうさうする毎日で、青年の希望に満ちた若々しさはあったにしても何か、ものたりなさは見られるのでした。

或る青年は、紙の配給制に書物も少なく活字にうえた。心のよりどころもないと私に話したこともあります。又仕事の面から見てもなかなか軌道に乗らない時で苦しんでいるので益々渾沌としていたのです。この時労働組合が活版に働きかけていたので、私等も取組組合として取組を明るく、愉快に、仕事に励みを見出し行こうと努力したものです。しかし組合活動も活版化するにつれて、外部労働組合団体の影響もあって、自分の取組、自分の務を忘却したような行動、或は堂活動にまで及び引いては所場の長を相手として斗争的行動をとるようになり全く混乱状態というには余りになさけない時があったのです。同じ所場で仕事をしているものが冷い眼で1日中いる理いやなものはありません。取組の融和はむしろ労働組合の主眼であるのに、私もこの点にはなやまされたものです。

昭和23年より29年に亘っては事務所長は任務の仕事とは全く隔離されてしまい、私も途方にくれた時です。いよいよ工事々務所のあり方についてまで苦しんでいた折大臣官房の小林文雪課長が戻って疾速にこられ、突然警察電話の呼び出しで来いとのこと私は警察の自転車をかきつけて坂に行くしついで、公共事業のあり方について注意を受け、今後の方針も解り、私としてとるべき途も突ははっきりしたのです。それまでは所謂ニュースはほとんど組合側による外なく、或は省のニュースは解らず、毎日取組で働くものお互に対立してはと心をくばっていた私もかえって取組にすまない気持ち一杯で、事務所長と共に早朝の5時頃と記憶していますが、局長を訪ね取組の前

途を考えて如何にすべきかと伺ったものです。

天竜川改修工事の空白時代ということになりそうですが、これがかえって取場の試練となって、むしろプラスになって今日東海の範となっているのではないのでしょうか。

天竜川改修工事々務所にも昭和25年東海道整備事業として国道1号線改修が突如起り全取員一丸となって努力されたことで証明されています。

30周年を迎えた天竜川改修の成果は甚大なものがあります。約12,000トンのコンクリートに及び大浜松市を初め水害地の人々の窮乏は、近く災現されることと恐われます。

取員皆様の健斗を祈ります。纏りのないことを述べましたが思い出の一端を記した次です。

思い出の記

村 瀬 茂

此の度浅井所長の御督折に依り天竜川改修工事々務所開設30周年記念事業として「思い出の記」を旧新従務経歴者から広く応募される事になりました。誠に意義深い行事で喜しく参加させていただいた一員であります。

丁度私が天竜川改修工事に従事させていただいたのは昭和6年から14年までで現在の戻務課に勤務させていただきました。事務所は浜名郡中ノ町村(東京=京都の中間)でした。木材の集散地で製材工場の中に挟まれ凹地の埋立地に建てられた事務所は、いつも製材工場のモーターの動力の響きと、廻転錐の雑音でいつも地震と神経的な狂音に漬かされつゝ勤務いたしました。当時の所長は西尾辰吉氏で、誠に温厚な学者肌の紳士で、私等の尊敬する人でした。

当時は現在と違い内務省の役人として地方の人々より尊敬され、経済的にも非常に恵まれ、大変豊しよい世の中でした。私は赴任当初中ノ町村の親切な素人屋の8畳(立派な部屋)一間を借りました。電灯付で3円でした(風呂は毎日一番風呂に入れて頂いて)食事は中ノ町村で有名な親切屋で我々若い者の面倒をよく見てくれる。中川屋という仕出屋で朝昼総3食で1ヶ月12円でした。(中々御馳走が茨山あった)私の収入は月給40円で月額旅費(現在の月額旅費に相当する)12円計52円。部屋代、食事代を差引いて37円残るといふ勘定です。その残金のなにかしを持ってその当時浜松から中ノ町村まで通ずるモーターカーと救済の子供の玩具の疎な古自動車を改造

した古物が10駐軌条の上を爆音を立て、走る異物がありました。それを利用して浜松市内へ出掛け繁華街をぶらつき適当に遊んだものです。算盤勘定あつて金足らずという時代にて面白く遊んだ世の中でした。遠州平野を貫流する大天竜川工事の仕事の面は他人に譲る事にいたしまして、私の勤務中不可解な火事、我々の最も恐れる破堤等惨事が相次ぎ取員一同大恐慌を感した実態を記し稿を終ろうと思います。

現在でもはっきり記憶しておりますが、私が天竜川改修工事に従務ノケ辛位経過後と思えます。寒い風の強い夜中之時頃突然中ノ町村消防団の半鐘が(スリバン)響き渡り初めは何処かの製材工場の小火かと思つて外へ出ず、床の上で起きておりました。突然近所の人が両戸を破れる様に叩き、内務省の倉庫が焼けているとの報告です。しまった……倉庫といえば一昨日多量に油脂類を入庫したばかりで、これは大変な事になった。取る物もとりあえず事務所へかけつけた。時すでに遅し倉庫一面は火の海と化し、黒煙滾々天を覆い中ノ町村もこれで全滅かと思つた位阿鼻叫喚の巻と化しました。我々は勇敢にも事務所へ飛び入り非常持出箱や貴重品とおぼしき物を手取り次外へ投げ出し、全く手のつけ様がない状態でした。各地方消防団の応援を得て倉庫ノ棟で食い止めたのは全く消防団各位の努力の賜と感謝致しました。丁度倉庫火事2時間位前に浜松市に町住みの西尾所長宅炊事場近くに小火有り事前に早く発見され大事に致らず放火説が有力で警察当局は必死になって犯人を捜査された様でしたが、デマが乱れ飛び確実な原因も分らずそのまゝになったのは返す返すも残念な事でした。その後中ノ町村は各所に火災が多く、一時は神経衰弱気味になったから家族を引連れ浜松市天神町へ引越しました。

昭和13年7月頃の記憶ですが、会計検査院の検査が有る通知を受け、毎日毎晩夜遅くまで残業して検査に備えておりました。偶々台風季節にて現在の様に適確な報道もなく、また嵐が来るそうだという程度にて心配しておりました。黒雲が頭上を這う様に通り過ぎ蒸し暑い風が何処からとなく大粒の雨を呼びポツポツと降り初めました。初めの内は大した事はないだろうと席をくくっておいたが愈々本降りとなり何時止むとも予想は立たず今日/日大粒の雨が降り続いた。天竜川は増水し警戒水位を突破し愈々川は増水する一方にて危険水位に突入した。未だ今日も昨日に引続きどしや降りの雨……。なんという事だ、明日は会計検査院が来るというのに、立派に整理した帳前を見て貰おうと張切っていたのに雨は相変わらず止まない、止む気も益々大降りになる、もうすぐ堤防を溢流する。万事休す。雨は尚降り続き愈々最悪の日が来た。突然上流中瀬工場管四一部堤防破堤の報に一同愕然としました。

事務所全員必死の命に一同勇躍任務に付きました。私の仕事は材料係、空袋、残袋、二子縄、鉄線、丸太類等々何処の中小河川も増水にて各々材料係が累積に悪命ですから思う様に品物が来らない。夜中のノ特々時頃までかゝって集めて来る。道路は川のように水が溢れ、何処も故障する。雨に濡れたが口腹は冷たく夜明けの寒さが身にしみてこたえる。我々の努力と本局からの運送で空袋又万袋位水防現場に積み上げたのは翌々日の昼頃でした。雨は多少小降になったが川は増水の一の方である。半鐘の響は断絶なく退避の知らせである。堤堰から沓堤に浸透水で腰まで浸し村人達はリヤカー荷車で家財道具を安全地へ安全地へと退避して通ぶ。堤防は今にも切れそうである。所長初め我々一同生きた心持は有りません。その内何処からともなく軍靴高らかに手に手にスコップを担いで隊長危難に馬上悠然と豊橋工兵隊の必死が100名位来てくれました。直ちに作業開始、班長さんが堤防上で命綱を15.6本握り各々兵隊さんはフンドシーツで濁流へ飛び込み杭打作業、フリ投げ作業、切り投作業等々全く目ざましい活躍振りでした。やれ助かった。全く兵隊さんのお陰でした。雨は段々と小降になり減水の兆が見え初めました。雲間の切れ目から太陽が顔を出し、蒸陽がさす様になりました。全く助かった。一同ほっと胸を撫でおろしました。振りがえって見れば各々其の持場持場でよく頑張ったもんだと我ながら感心しました。私は材料係として昼夜を分たず必要材料を出しつゝ空袋又万袋の上で着のみ着のまゝでゴム長靴を履き放しにてノ週間寝ました。恐らくこの様な事は初めて降りであってほしいと思います。一応水防も終りこれから復旧緊急工事にかゝる段取りとなり、一同張切って復興に掛りました。何処からとなく(イマワシイ)ニュースが飛び初めました。この事件は余り触れたくないと思いましたが話のついでにごく簡単に記したいと思えます。大局的に申し上げますと三人の不心得者がおりまして、全員に迷惑を掛けた。警察が余りにも事件を大きく取り上げ、二俣、見付、浜松と警察署管内であったからお互に功名争いを演じ、内務省が迷惑した。事務上の整理が非常に悪かった事で私等が実際に見た目は泰山鳴動嵐又匹三匹という処でしょう。私はお陰で何等事件に関係なく幸であった事を家族と喜び合いました。色々の事件のため半数が勤務管になり、私は土屋進吾、高田春雄君と共に豊川改修事務所へ従務を命ぜられました。私の罪も變する天竜川よ。いつも温和で清く美しい清流を遠州灘に流し込んでくれ。

三ひげも天竜川三

藤田平司

関東の山だしがこの天竜川に来たのが昭和8年4月7日であった。6日は浜松に泊り早朝バスで来たところが中ノ町村中川屋前であった。私の行く内務省天竜川改修事務所がわからない。全時におりたひげをはやした紳士にたずねたらいっしょに来いといわれ、同行して連れられたところが天竜川改修事務所であった。(この紳士が新井さんであった。)

待つことしばらくしてひげをはやした西尾所長に会いさつしたら君は下流河輪工場に行けといわれ、永山技手(この人もちよびひげであった。)と同行して旧掛塚橋のたもとにあった河輪工場勤務となった。ときに年令満えさ才。

工場には永山さんと岩城さんがおり、工場管内芳川派出所に相葉さん、石井さん、掛塚派出所に土屋進さん、山口さんがおった。河輪工場改修工事は河輪護岸工事と芳川機城掘削工事であった。

先輩はよく指導してくれた。土運搬の段取り施工、護岸施工の注意、測量の要点等々何事もこまかく教えられた。いま思い出すたびに感謝感激でほかに言葉がでない。

ある日の河輪工場主任内務技手永山三右エ門、池田工場主任内務技手金井弥七両氏の会話が記憶によみがえった。永「やいシチーおまえのあごひげはぶしょうだからそってしまえよ」金「なにーサンコー、てめえのちよびひげこそ見苦しいぞ、早くそってしまえよ」なんとうちとけた会話ではなかるうか。この又人の活躍はいない。誠に残念である。

そして幾年又しく天竜川の流は昔とかわらず流れているが、年は進み改修工事は竣工以来30周年を迎えることになった。

私も勤務以来24ヶ年を過ぎた。その間軍飛行場建設のため2ヶ年ほど他の事務所から応召され約1ヶ年半を軍隊生活をやり終戦となって復員し、天竜川勤務を希望したが貸入れられず、他の事務所勤務となったのでやけをおこして辞職したが、百姓も性に合わず先輩のおかげでまた天竜川にもどったのである。

戦後西濃川締切工事、掛塚堤防延長工事に加わりめでたく完成されたことは、私にとって恩無量である。若い時先輩と共に何度か足をはこんで測量をやったことが思い出され、ある時は昔の手帖が役に立ちその役目をはたすことができて、先輩政人もさぞや満足されておることと思う。

私も倅あって天竜川下流沿岸の住民となり、天竜川に20余年勤務したが、最近ばかりも家に天竜川に関する古書が発見されて、先祖が徳川初期からこの川辺に住みつき代々川と斗ってきたことがわかり(天竜史編纂の参考となる。)川に生きる私も心を新しくしたわけである。

天竜の清き流れに幸あれと

恐川家

20年の想出

松本七之助

私が天竜川のお世話になったのは、昭和8年2月から、28年の4月までの満20年と2ヶ月の永い期間で、いわば人生の大半を遠州の地に過ごしたことになります。荒川上流から独身で赴任し、その間に現地で結婚、5人の父親となり長子は高校1年という子供達は生粋の遠州児として育ってしまいました。

北島さんと2人で名古屋の本所から天竜川駅へ、石野さんの御出迎えを待ってガタゴトンとレールカーに乗って事務所へ着いた。事務主任は西尾さん、工務主任は新井さん、辰跡は佐藤さん、私は池田工場勤めとなり、工場主任の牛原さんに案内されてガタガタ音のする長い長い木橋を渡って十束の派出所へ行っただけ。これが有名な貫取橋で内務省の人は無料だった。

当時天竜川は工事の全盛期に向うときで、4月には畑中さん、吉田さん、後藤さん、藤田さん、安永さん、前島さんなど新しく採用になって、若い人が多く楽しい雰囲気でした。月々催された独身会は思い出の種である。そうして、とうとう20年の思い出は多い、順を追って主なことのみ綴ってみたい。

—— 中瀬火害工事 ——

昭和13年4月から7月にかけて稀有の長雨は、遂に大平川締切堤を決壊した。軍隊の出動、地元民を合せ1000人以上の水防活動となり、ようやく襲小段を残し破堤はまぬかれたのであった。現場は西尾主任が直接指揮にあたり他の事務所からも続々と応援の人が集められた。千田、三池、橋本、伊吹の名技師始め多数、昼夜兼行で応急工事はすいめられ、私は夜勤となった。ところがこの最中に例の中瀬事件が起き、工場主任の鈴木さん始め天竜の現場の取員、労務取員は櫛の歯を抜くが如く毎日次々と警察に引張られてしまった。私が毎日今日か明日かといやいな気持ちでつとめておったがとうとう最後まで取り残された。現場では永山さんと私だけだったと思う。当時は現場の雑費的な支出を出面を整理しておったのが禍の因であった。べつだんヤマシ

イ争がなかった人達が新聞と警察に完全に罪人扱いにされ、本人はもちろん家族の人達がどんないやな思いをしたことか。しかしまたある意味においては良き教訓ともなったと思う。こんな悪条件下に災害の復旧工事は立派に竣功した。随分色々な筆舌にもつくせぬ思いを秘めた堤防である。

—— 天竜飛行場 ——

昭和15年5月17日に科所長から下流のある一部を5万の凶面を起ぎ拡大するよう命じられた。袖浦に飛行場が出来ることになった。やがて測量が始り、河輪工場の人達が主力で、工務室におった私もあることになった。朝は6時半から夜は野帳整理と急がされ、そのうち他の事務所から応援者が集められ、一番乗りは現在岡崎工事の平さんでした。ちよんと新しく入った芦沢さんと私はやがて現地に仮事務所も出来る頃手を引かされ、正式に飛行場勤務となったのは主脳部だけで、大部分は他の事務所から集ってしまった。当時私達の月給は15円、飛行場は測量月給で60円、私達天竜の者は指をくわえてロアングリ、開いた口がふさがらないとはこの争であった。

—— 東湊川締切工事 ——

昭和16年末大東戦争もいよいよはげしくなり、国内食糧の増産は焦眉の急となった。予備金支出で、東湊川を締切ることになり、他の現場は大部分閉鎖して全力が注がれ、私も中ノ町の負担を閉めて加った。昔から東湊川の締切は同時施工するように両岸の人達の諒解があるのだと聞いておったがすでにある至上命令の前には文句の出ることも許されなかったようだ。

永く病床にあった私の家内が病勢が進み、19年の1月21日3人の子供を残してとうとう逝ってしまった。看護寂れと、前途の方策と悲嘆にシバシバに暮れた。しかし世はすでにそんな感傷は許されない時局となっていた。その頃発和県の出部郡に中部軍の飛行場が出来ることになって科所長が工事長として永山さんも行くことになった。そして数人の取員も人送られ技術やでは私に白羽の矢が立ってしまった。まだ家内の49日にもならず故郷への納骨もしてない状態なので極力断ったが永山さんがウンといわなかった。そして命令だからといった。永山さんも3人の子供を持って奥さんに先立たれた人である。私の胸中をどのようにくんだことであつたらうか。赤紙をもらったつもりで清洲飛行場へ一番乗りしたのである。

それから1年8ヶ月私は科所長の下で寺崎さんと軍工事にいそがしく明け暮れた。

—— 河輪火害 ——

昭和20年10月ものすごい豪雨にとうとう天竜の計画高水流量になんか

んとする大洪水となった。終戦でのんびり三方原の事務所ですごしておいた私達に天意危しと応援の命令が出た。道路という道路一面の水、しかも篠つく川である。ジャブジャブ水の中を道らしいところをたどって中の町へ急いだ。街中はたゞならぬ緊迫さで、雨の中、家財道具の待避をしておるらしい姿も見える。堤防に上ってまず驚き、何時も静かなあの川面がとうとうと濁流は渦巻き、すでに堤防は濁水、波浪は天端を洗っているのである。まさにその名が示す如く天翔ける竜の姿を思わせる凄絶さである。地元の人達は必死で土俵積みをしていた。

やがて下流の匝湫川の旧堤が切れて、増水は急に止り減水さえて中ノ町の堤防の危機は脱したのである。しかし破堤箇所では一瞬にして数戸の家屋と驚く人命が失われる大きな犠牲がはらわれたのであった。

その後河輪地先の新堤が秋水によって堤脚に決壊を生じ応急、復旧と芋沢さんが段々で施工された。私も現場に出ることとなり、そのところに新しく入って来たのが北大出の駒さん、後に、組合の有名な指導者になった名倉君であった。

工事は労力不足で半島労務者をたくさん使った。終戦で急に開放され、かえって日本人より優越感を持った彼等の監督は非常に難しかった。

しばしば名倉君が身体を張って彼等を説得した。ある早朝たまたま現場に出た芋沢さんが積込の盛りの思いのこたえを注意したことからいきり立ち、見張へ大勢で押しかけられるような危い出来事もあった。涙で堰を作っても、魚を少しとって、1日の賃金の何倍かになるような悪条件下に芋沢さんの意気と取組の努力によって工事は成功したのである。

— 組 合 運 動 —

終戦によって与えられた労務組合は急激に発達し、官公庁の取組も例外ではなく、浜松工事々務所も芋沢さん、寺崎さんが先頭に立って組合が結成された。

開放しの組合活動はようやく棒を越えて、争突上の取組管理に近かった。とくに建設省の組合の中で浜松は最左翼であった。当時堀中所長は病床にあり、菊川の金子所長が兼務された。金子さんも病後の身体なので組合との団体交渉にも何か痛々しさを感じた。24年の2月に会計検査があって随分御苦勞な事と思う。ちょうど組合は177号斗争といって政令に触れる事務は一切停止するよう指令されておった。所長、工務、庶務主任は徹夜で事務整理をやったようだが組合の斗争方針でしばられておる担当者あまり協力出来なかった。私は飯田出張所において何んとか検査だけは受けるよう

出来るだけ要領よくまとめることに努力した。

出張所長の芋沢さんも随分心配されたが残業も休日作業もせずにちよつと之度務めにいられた藤田さんに協力してもらって大変助かったのです。

いよいよ検査当日現場は飯田出張所だけしか見せることが出来なかった。倉庫も埃一つ止めずに片付けどうやら無事にすんだ。しかしそれで私の上司の人達に対する気持の一端は累せたのであった。金子さんによって奥田さんが専任で赴任して見えた。いわゆるレッドパーズで一番御苦勞されたのである。思想団体の指導もあってか組合は厩知れず左へ走った。ついに政府も強力な方針で共産分子の追放となった。

浜松支部は10人以上の整理通告を受けた。全員の地選で一益の大量だったろう。主として恩恵団体に属している人選でした。支部長の私を除き組合の役員は全部である。当時は党員でなければ人にあらずの如き嵐嵐きでシンプに至っては大半が参加しておる状態であって、自己の信念に従って言動することは、なかなか至難な事であった。整理通告に組合は沸き立った。早速徹夜で風交、他労組、団体の応援もあって一時は陰鬱となった。しかしすでに、どうにもならない段階に来ておった。時の流れに従って整理局も取組を去り、一敗幕を待って私は組合役員を辞した。奥田所長始め官倒の方は随分御苦勞された事と思う。私も数日は食がとれなかった。良く身体が耐えたと思う。

× × ×

匝湫川の締切工事もようやく緒につかんとするとき見返り資金による道路工事が緊急施工されることとなり私は長い現場生活から工務室に入り、事務所も只今の風情へ移転した。として本島の企画部長に栄転された奥田さんの後、早田、柿と二代の所長の御世諾になり岡崎工事々務所へ転任になった。思えば永いとして随分思い出多い歳月でした。

最後に天意の1日も早い立派な成功を祈念して筆をおさめさせていただきます。

— 三 羽 鳥 —
安 永 正 喜

私が天竜川に務めるようになったのは、昭和8年4月であるから、24年余り昔のことである。その間12年11月より18年9月まで支那争突のため必召と戦時務務のため不在であったが、ずっと天竜川にいたので天竜川は

私にとって水元の故郷ともいえる。さて思い出となるとこれといって何もないが、それらしきものを拾って見ると、よく飲んだことである。当時天竜川は全線に亘って工事をやっていたので取員も多く(多いといっても35名前後で現在とは比較にならない)従って若い人も多かったのでよく飲んだ。上流部の独身者でチョンガ会を作った。これは飲む会である。例月は月1回、会費は1円であった。当時私の月給は36円位だったと思う。その他に月額が1.2円あった。これで下宿代は充分間にあっていたので飲めた試で、今の人達によく飲んだ話をすると不思議に思う位である。

当時のチョンガ会のメンバーは、石野正男、高田春男(故人)、鈴木信吉、石井三千恵、大登峯雄、前島正司(故人)、それに私位だったと記憶している。幹事役は石野さんだったと思うがなかなか盛大でしばらく続いたが、次第に妻帯者がふえ、会より脱落していったのでいつの間にか自然解散となった。その中で一番若かった大登、前島、私と3人は、これとは別によく飲んだ。1.2年の始め頃と思うが前島君が満洲国へ行くことになり浜松駅へ見送りに行った時面尾主任より上流の3羽鳥がみ羽になったなあ……といわれ私達のよく飲んだことを知っておられるのに驚いたが前島君も故人となってしまった。

その頃野球熱が盛んでよくやったものである。故人となった永山さんが監督、主戦投手は相乗さんでなかなか強かった。矢作川まで遠征したこともあり写真もあるが結果は記憶がない。中ノ町附近ではどこをやっても勝っていた。軟式野球の全国大会浜松地区予選には度々出たが、何時も決勝戦で曙明堂とやり勝ったことはなかった。こんなことをいうと昔は飲んだり遊んだりばかりしていたようであるが、仕事の方もなかなか張切っていた。今と違って週休制ではなく月2回の公休日も殆んど休んだこともなく毎日ゲートルを巻いて現場をどぎまぎしたものである。

大東亜戦争となってからは軍の飛行場建設に取員と機械が移動し、天竜川は殆んど留守登程度となった。19年12月7日の地震により被害を受け、この後旧に人は不足し機械はなく全くてんやわんやであった。徹夜射撃は受けるし空襲はあるし、今になって考えるとよくやったと思われる。食糧不足のために荒地を耕してサツマ芋を作ったのも語草となった。

それから終戦、水害、そして戦後の混乱時代、労働争議と終戦前後数年間の出来事は私の人生にとって、一番苦勞はしたが忘れられぬ思い出の一つとなった。この頃のことについては外に書いておられる人もあると思いますから、飲んだことを少し書いてみました。

観音竹

三好次郎

天竜川の改修事務所が誕生してから30年になるようで、私も建設省に勤めるようになって去年は30年になります。

こちらで一つピリオドを打つべきでしょう。まあそのような意図で30年思い出の発刊になったことと思います。

私のいたのは昭和9年から16年までと26年から30年までの前後通じて11年で、思い出の記は前の7年についてです。

今でもそうであるように台風が来るといえば、居残り、徹夜は常識でありました。あるとき上流からの雨量電報によれば、とほうもない増水を見る計算になるので、徹夜警戒して今か今かと待っていたが、ついに増水を見ずに済んだことがありました。

ところが二侯の破堤さわぎの時は、天竜川にとって非常時であったが、私にとっても一大危機でありました。というのは機械のあと片付けのため、毎日二侯へ通いましたが、暑いので水をのんだり、アイスキャンデーをたべたりしているうちに腸チブスにかかって、高熱にしんぎんする身になりました。1日、市の自動車かきて部屋の中を大消毒して、タンスなど、見るもむざんな姿になりました。患者運搬車で浜松市の陸病院へほうりこまれ、校日は生死の境をさまよいました。やっと退院しても出勤するまでだいぶ休んだので、年末の手当は大きくげん、まことに非常時でした。

取員全員で相当遠くまで旅行しました。その中で一番印象に深いのは、大島旅行です。こんな機会でもなければなかなか行けない処です。帰航の海上から見た熱海の夜景も忘れぬ景色でした。野球の対外試合もよくやりましたが、ある日の試合に当所が敗けていたのが、当方の攻勢になったとき急に暗くなってきて、ボールがみえず、フォアボール続出でついに勝ったのは痛快な思い出です。

野球のマネージャーが永山投手でしたが、ある日彼氏が原務の部屋に現れ、観音竹があるがみなで共同で買わないか、子がふえてうんともうかると。そのことで、皆とびついてしまったわけですが、しばらくたってあれば枯れてしまったとのことで、そのご、それを預託といろいろ交渉したが、ほとんど回収できず、それからのち棕櫚竹や観音竹をみると、にがい思い出にせめられたものです。このことも、もう時効にかかった頃ですから発表します。

誼いも盛んでした。誠心女学校の軟縫室で長谷川先生から熱心な教えを受けたものです。西尾主任の御宅で、よく議会がありました。議よりも、附帯の麻雀の方が人気があったようです。荒瀬も同氏の湘和のしょうしゃなお宅にお伺いして、天竜川を語って、夜のおけるを知らず『熊野』を一番誼って池田の藤をしのみました。

思い出多い天竜川時代

柏原太郎

昭和9年暮平田より中の町へ出た。来た当時は、西尾主任を中心に工務所があり新井、佐藤の両主任、工務に吉田、庶務に井野口、三好、村瀬、斎藤、河合の諸氏がおられたように記憶する。河輪に機械工場があり、藤田、鈴木さんが取組を督励して機関車のお釜をこそくったり、煙突機のバスケットの修理やら土運車の製造を盛大にやって繁盛しておった。少し離れた所に河輪工場のお屋があり、中瀬から河輪まで毎日10里の道を往復する天狗のような永山三右エ門さんという侍が大將で平さんこと小池平司さん後に河輪へ入婿して藤田平司となるがおられて河輪の機械補鑿、河輪築堤というような設計と記憶する。天竜目堰の所謂機械にて補鑿築堤する工事を施行しておった。新橋の城、掛塚見張には一方の持たる土屋進氏が左岸の固めをしておった。芳川の見張には当代の名投手相葉悠氏がた間碓のセメント細工に一生懸命であった。池田工場並面見張には荒さん、呑まなければ荒さんではない荒金春夫さん(満洲にて死亡)が並面築堤を、竜池築堤は竜池見張(中瀬工場所)の江田さんがそれぞれ担当。中瀬には鈴木工場主任が少し東北なまりで左岸の並面工場主任を兼ね、のっぽの安さん(安永氏)、背の短い前島、長屋さんという若人を従え中瀬締切の予備工事に専念、野部には高田さん、岩田に石野さんとそれぞれ地名の築堤工事をやっており、池田工場には御大將七さん(比島にて戦死)金井さんが至極元気で村の祭、池田の藤等の物目には一腕を引連れ自慢の美聲を風になびかせ中川屋へ出向く様はさながら侍の出征の時の様で自転車は騎馬の如く堂々としておった。私も吉田さんと帰る途中行列に入れられたものだった。

当時中瀬災害までが天竜の全盛期であり、思い出の多い時代で、野球もテニスも麻雀も盛んだったが、私は麻雀は全然駄目、野球もテニスも大した腕前ではなく邪廢位なもので、麻雀の折は電話番位のもので、時には管が困って硝子窓から靴を持って逃げ出す風暴もみうけられた。

これらの行事があると上流からも下流からも水の流れの様に工場から見張へ見張から事務所へと少人数ではあるが人の流れが相つどい相つどい事務所へ集って来る見争さは今日では見ることの出来ないなつかしさを思い出多い集りだった。

== 思 == い == 出 ==

畑谷正実

私が天竜川改修事務所勤務したのは昭和13年5月から昭和14年5月までとその右飛行場の建設にまわりましたが、あれから今まで既に20年の歳月が経たわけ。日頃は多忙な毎日の生活に追われて当時の事など思い出すこともほとんどありませんが、このような思い出の記刊行の御案内やら任職した人達の名簿等を載せ、当時の日記を久し振りに引き出してみますと今更ながら随分古い昔の語りぐさになってしまいましたが、それはそれは色々の思い出があって、ほんとうになつかしく感じます。当時は支那争いが始まり世の中が大分さわわわらわらしてきた頃でしたが、それでも今から考えますと、まだまだのんびりした生活が充分楽しめた時代で、食べ物でも沢山のかわ料理や美味なトンカツ、焼鳥の味など今だに忘れられません。

丁度赴任して2月程たった6月の下旬から7月上旬にかけて東海道一帯に起った梅雨災害で天竜川も大出水となり、中瀬堤防が破堤寸前の欠壊があった。当時二俣に駐屯していた工兵隊が出動し、やっと氾濫を防ぐことが出来たという事故が生じ、それからは全く不眠不休の復旧工事が始まりその年中はほんとうに夢中になって勤務生活をしました。多忙な事は勿論のこと、それと別な様々の事件が生じ身心共に苦勞をしましたが、これらのことが現在までの私の役人生活の基となり勉強となった事は幸でもあり、ほんとうに得難い有意義な経験であったと思っています。

私の赴任した当時の天竜川改修事務所は西尾主任でその右短羽閣でしたが塚本主任となり、次いで千田主任となりましたが当時涙に下宿し西尾主任の御宅と近かったので時々御訪ねして御夫妻の立派な御人格に接し、種々御教示を聞きながら尊敬致しておりました事を思い出します。昭和14年1月26日の日記を見ますと「夕五時より千歳附つたやにて新井、佐藤、相葉、井野口、村瀬、柏原さんと会食」とあります。おそらくは正月でもあり一杯やろうということになったことと思いますが、ピンポンをするときの新井さん、柏原さんの動作、電話をかけるときの佐藤さんの姿、万能選手の相葉さん、

独特な書体の村瀬さん等思い出しますと皆なつかしい人達ばかりです。機会があったらもう一度集って思い出話にふけてみたいものですね。相葉さんも仲々筆まめな人だから相葉さんの日記帳にも当時の模様色々と記されているのではないのでしょうか。

なつかしい思い出は尽きませんが……

天竜川を眺めて

寺 崎 清 吉

昭和13年7月天竜川上島の堤防が切れるというので、可美村にあった名静国道事務所から雨の降る中をトラックで人夫をつれて応援に出かけました。現場へ行ってみると、地元水防団、消防団やら工兵隊など数千人の人がごったかえして、土俵を作る者、運ぶ者、ふりなげの木を切る者、運ぶ者などまるで戦場でした。夜になっても寝る所もなければ寝る暇もない有様でした。

その後約1ヶ月ばかり二俣の宿舎から復旧工事の現場へ通ったのが天竜川に関係した始末です。当時の現場主任永山さんも金井さんも今は故人になられ、元気のよかった小金丸さん、岡本さんは今どうなされている事か。

当時応援にこられた稻村今吉さんもなかなか元気がよくて若い係員が稻村と呼びずてにしたといっておこつたり(其頃河川工事では係員は現場監督以下を姓を呼ぶだけで君とかさんをつけないし、現場監督は係員をだんなと呼んだ)、また人夫が大勢で中に悪いのがいて受付をすませてよそへ行って遊んで夕方手帳を取りにくるのを見つけてしかりつけたりしたので、人夫からにらまれたが「おまえらに1つやふつなぐられるのが恐くてこの商売が出来るか」という具合であった。何でも若い堤築港工事で大勢の潜水夫を使って潜水夫が海の底でみるねをしているのではないかといつて、一生懸命潜水を習って海の底まで監督にいったという程の人でした。

昭和18年に天竜川改修事務所と名静国道改良事務所が合併となり続いて19年3月に科新長以下永山さん山田さんについて大勢の取員が清洲の飛行場へ行きました。私も其の中の1人です。間もなく天竜川の堤防から軌道が軍隊の車で運ばれ始めました。再清洲を出発した車は夕方天竜川へ着いて、レールを積み、明朝出発して夕方清洲へ着いたものです。大休止、小休止をしながら。

戦争がすんで浜松工事へ帰った私は北田町の浜松工場にいましたが、24年に国道の予算がなくて、甲ノ町の天竜橋のたもとにあった見張りに行って護

岸工事をやったがあの当時は現場の人夫組合の盛んな時で解雇するのが悪いといつて人夫にかこまれたり、浜松基準監督署へ訴えられたりして呼び出された事もありました。

25年に戻返で新居国道の工事がすむと天竜川の岩田堤防へ参りました。岩田堤防は大分以前から何回も工事にかゝったがいつも途中から中止になって出来ていなかったもので、川の中を掃き運搬以外に工取はないと聞いていました。

26年度単年度工事で土量7万粒という事で、新居にいて仮橋の設計にかかりました。仮橋では流されたらあと工事は出来ないので、洪水位以上に架ける事、4台機関車を通す事、単線にする事として図面を作りました。工務室で設計書を造って本局へ持って行った所、土工費に対して準備工の費用が高すぎるといって大分おこられたそうですがあの橋/本が生命線と今まで何回始めても出来なかつた事を説明して承認してもらったという事でした。

10月によく仮橋が出来て土運搬にかゝりました。1ヶ月に1万5千粒位出さねばならないし、運搬路は假橋/本しかないのので、この假橋の上には必ず上りか下りの機関車が走っている様に考えて土取に20台掃き機と人力の2組として積み込みました。1列車12輦で1日最高80回を出した頃は堤防の上で眺めていると川中から假橋へ1台の機関車が入って真中頃まで行くとまた1台後から入ってきて、2台の列車が堤防へ吸いこまれると今度は堤防から空車が入っていく有様を見ていて楽しいものでした。おかげで堤防は見る見るうちに高くなって、田畑畑で仕事をしていた人たちも目の前の堤防が急に高くなって行くのにびっくりして機械の力はたいしたものだと感心したものです。

あの仮橋は地元では松下げてもらって対岸まで継ぎ足して笠井まで通行出来るようにしたいと意気こんでいたものですが、とうとう実現しませんでした。

天竜川の工事で庄巻は何といつても面漆川の隣切りでしょう。あの面漆川があれば程うまくあの様に早く隣切れるとは誰も考えていなかったでしょう。あれよあれよといっている間に隣切りが完成したのにはすべての人が驚きました。それにつけても芦天さんを始め飯田におられた方々のそれまでの準備苦心には只々敬服致しました。

29年頃から天竜川の様子も変わって参りました。昔のトロ押し4分積(1人押)6分積(2人押)も、5台機関車天竜号も、40台掃き機20台機関車も今はもう姿はなく、ドラッグショベルとダンプロックがいかにも軽快に

走りまわっているのを見ると、天竜川も変わったと思います。昔の天竜川改修事務所建物の建物は今はなく、その敷地にはスマートな中ノ町出張所が建っています。しかし藤の木だけは今も変わらず花を咲かせています。

天竜川の回顧

本 間 茂

堅い岩山を火薬でこわし、毎日川へ運ぶ川人足。人目忍んでトロッコにとび乗り、喜々として遊ぶ晚白小唄、大声でどなられてくもの子を散らすようにける小童たち——大天竜河畔に育った私が、天竜川改修工事を知ったオーストリアがこれです。

この改修工事は明治の終り頃、県営で始められたもので、今も残る水制は、郷家の岩山より切り出した石材で築かれたもので、当時はよもやこの川で一生の過半をすごそうとは夢想だにせず、無心に遊んだものです。

昭和6年水田川に勤務していたころ、立川技手より「天竜川が直管で初まるから敷地を見に行け」といわれ、河輪村、中ノ町村等を自転車で見に行きました。又、藤目の時掛塚橋際に機械工場を、中ノ町地先に事務所を設置するという事を知ったが、御土の偉人といわれる金原明善翁の努力した地元であるのに何と不便な選地帯ばかりだろうかと思われた。聞けば河底よりも低くその上堤防も低くせまいもので、雑竹が密生しているところが堤防だという有様。堤防に登って見れば真中に緋い道があり、自転車がようやく通れる程度、各所に松、柳等の雑木が不規則に育ち、狐狸も任むという。これが大天竜の下流部の有様かと驚いた。明治42、3年頃大天水のため破堤し、流水と共に流れ去る溺死体、嬰子を抱えて救助を懇叫しながら御木につかまり流れる悲惨な状況が思い起され、この下流部の改修が1日もすみやかならんことを念じた。

昭和13年上流部中郷村地先の災害に急流菊川工事より天竜川改修工事にたずさわることとなったが、中郷の災害、中ノ町地先の溢流、また中郷、掛塚、飯田等各天竜川の締切工事、その他異常な遊組攻勢、事務所および機械工場の移転等々忘れ得ぬ想出ばかりである。

終戦後機械器具類とくに建設機械の急進は着しいもので、いままでのボイラー専門の夢破れ、新しい機械が使われるような構図に移り、天竜川機械工場もボイラー修理専門から切換えねば時代に取りのこされる運命となるので、担当職員は新知識の吸収に努めるとともに機械の確保をせねばならなかった。

しかし当時の機械工場は掛塚橋際の堤防の狭長な土地にあり、新堤築造に支障を来たし、他に移転をせまられる状況であったので、機械整備費という支出費目が新設されるや移転計画並に機械工場の運営問題が積極的に検討されることとなったのである。

機械工場の将来はいままで通り天竜川のみ工場とするか近くの事務所協同管理とするか、本司管理のモータープールの形態とするか等の問題で種々研究されたが、結局本司が名古屋、東海、北陸の3ヶ所にモータープールを新設したい意向で、もしこれが実現すれば天竜の機械工場を東海のプールとするという話し合で便利な浜松市内に敷地を選定することとなった。ところが終戦後漸次土地価格の上昇気運をみ、ために適当な借地もなかったが、名塚町に売地として戦災鉄工場の4000坪余の敷地があり、交渉の結果公定価格の1/40万円位で購入決定し現在地に移転した次第です。

しかしながら、修理機械類の移転取付け、購入機械の設備に機械部品の購入費、労務資金等の工事費負担の増加ははなはだしいものであったが、予算の配賦はそれにとまわず機械工場の運営のあり方について再三議論をされた。当時工場従務員50名位、人件費400万、機械部品150万、修理外注200万円位要したと思う。このような状態なので工場の運営になやみ、時にはほとんど休止状況もやむをえない有様であった。

最大の欠陥は肉燃機関の修理加工が出来ない結果であったので、従務員は極力研究したが民間技術の進歩にはおおよぼ外注修理によるほかはなかった。見返資金による道路工事着手と共に、予算は急激に増加し、機械整備、製作作業が必然的に増加し、職員各位のたゆまぬ努力研究の結果現今のような立派な工作出張所となったのである。

見返資金による道路工事は乗り手すると共に主力を道路におくため磐田市見付の新築事務所へ元朽化した旧事務所より移転し、将来は中心地浜松市内へ移築移転する事も予定された。もちろん工作出張所の将来の見通しにかよっては名塚町への移転も考えられた事であった。

及転機、しかし天竜川の流と世の潮は、一瞬もたゆまず、かつての美少年も今は頭上に冠を戴き、貨取橋で有名な橋も立派な永久橋と化し、堤防も立派になり今や狐狸の姿なく、中州の思も絶えたが、素直な流れは今もなお流れ続けている。

巨大な国費を費し、近代技術の最高峰を誇る佐久間、秋葉両ダムと直轄技術の粋で天竜川改修工事は完成に近すきつ、あり、さしも暴れた天竜の水も万民の語り草となり、岩水、水道、灌漑、排水とふりふり沿岸民への福利を

もたらす科学の力は今や自然を征服せんとしつづあります。

大正12年以來遠州地方の直轄治水、造路事業に専念した30有余年をここに振り返り、天竜川の変化激しく波乱が多かっただけにより以上なつかしさを感ずる。一介にすぎない私ではあるが、郷土の水の護りに一生を捧げ得られた感謝の念と喜びを感じて止まないものがあります。

思 い 出

立 見 友

あれから足かけ20年といえ、私が矢作川改修事務所に勤務していた頃は昭和13年である。

7月下旬の全国的大雨のために、矢作川で初めて水防の苦勞を味わった。このとき天竜川でも被害を受け、其の復旧工事のため、翌月13日に天竜川改修事務所へ転勤を命ぜられたのである。

私が転勤したときは、すでに10年を経過しており、その後20年の間に事業は益々拡大せられ、造路事業を加え、事務所を磐田市に移転し、磐田工事々務所と改称し、南北に流れる天竜川と、東西に走る国道1号線と十字を成する事業区域を持つに至り、益々発展して30年を迎えるに至ったことは喜びにたえないとともに、この大事業に対して日極精進する関係取組の努力に対して敬意を表わすものである。

私が天竜川改修事務所で初めに勤務したところは、中瀬工場で、工事現場は上流の災害復旧工事で600人に余る労働者を使役する工事であった。その工事の竣功とともに、中ノ町の事務所へ勤務するに至ったのである。この時期の労働管理事務は現在の事務に比較すれば問題にならないほど簡単で1人でよく数百人の労働管理ができたのである。

中瀬工場勤務のときは、二俣町からトンネルを通過して通勤し、事務所勤務のときは池田村から天竜川橋を渡って通勤し、遠州名物のからっ風に悩まされた事を記憶している。中ノ町の事務所が磐田市に移転するとともに、その運物の一部の所長室は名古屋工事々務所の設立とともに、移転改造してその仮事務所となり、後に改造されて宿舎となり、3年余の間、私の居住するところとなったことも思い出の一つである。

天竜川の川の流れとともに長く事務所に勤務することを期待した私が河和工事々務所の設置に伴い、昭和16年12月8日の朝のあのラジオ放送のニュースを聞きながら、淋しく緊張した気持ちで天竜川改修事務所を去ったこと

は一生を通じての思い出である。

思 い 出 る ま ま に

仁 科 太 郎

前任事務所長の西尾さんの後任として、浜松駅頭に降り立ったのは、昭和14年の暮れ浜松にしては特別に寒い日であったのであろうか。たまたま女を身籠っていた妻や子供達が、大皮寒がっていた印象を今でもありありと憶えている。それが天竜川改修事務所としても、私個人としても、その彼のもっとも汝らに富んだ大激動期の6年を送ることになった、そもそものオノキであった。

それまでは、私場を関西にばかり持っていた私にとって、すべてに東京風である浜松は珍らしく、街並も連尺町をはじめ中小都市としては、他に例がない位綺麗であって、朝に夕に富士の雄姿を仰ぎ、洋々たる大天竜の流れを望み、時に兼務していた菊川、名静国道に世向いて、まことに平和な、気持ちのよい日々を送らせて貰っていたのであった。

翌15年、国際関係が益々緊張して来て、わが内務省でもそれに即応して協力体制がとられるようになり、そのオノキの仕事が陸軍航空本部の委託によって、天竜左岸油桶に飛行場を建設することを命ぜられるにいたったのであった。天竜川改修事務所を中心として、菊川、名静国道をはじめ、他の事務所からも、人と機械の応援をえて、遂に当時、日本一と称せられる大土木工事を展開したのであって、故10名の機関車、掘鑿機等を、フルに動員した壮観は、まことに目覚ましいものがあって日本国中から恩学者が殺到するという状況であった。なおこれに、さらにポンプ浚渫船木管丸を参加させることになり、砂丘を越えて現場に入れ出した苦勞は、言語に絶するものがあり、毎日夜海岸で焼芋を食って頑張ったのであって、現場一回はクソがワマルと称して、糞喰したものであったが、土木の目鼻がついて、木管丸を悪戦苦闘の末、再び太平洋に出したのも、激浪逆巻く正月元旦の早朝であって、心配しておられた名古屋の田村土不出版所長に電話で無事脱出報告をした後は、ガックリとしたものであった。

私は当時、浜松の元城町に住んでいたのであるが、ある日の早朝、筋向いに住んでおられた新中恒二氏が、「大変なことになりますなあ」と駆け込んで示された。それが太平洋戦争突入のオノキ報となったわけである。

それからは、例の国民服と戦闘帽の時代に入ったのであって、船瀬飛行場

完成に引続いて、名古屋近郊の清洲飛行場建設の命を受けほとんど全じ人的物的構成をもって、甚目寺に乗り込んだのであったが、今度は、訣の判らぬ中部軍経理部の管下に入ったものだから超激務に加うるに、中部軍経理部のもっともくだらない形式主義に日夜悩まされ、お話にならぬ超粗食をしいられ、全く疲労困憊の極に達し、私員の中にも健康を損ねる者が続出、私自身も栄養失調となり、これが原因してほとんどの歯を失うにいたったのであった。もっとも痛癢にたえぬことは、やはりこれが直接原因したと思うのであるが、ほどなく、私の片腕として終始私と行動をとりにした、得難き僚友水山三右エ門氏を失った事であった。

その後、清洲飛行場の目鼻がほぼついて、ほっと息をつく暇もなく、再度航空本部の委託による、三方原飛行場拡張工事を命ぜられたので大半の私員を引連れて浜松へ帰ったのが昭和19年、3月目の飛行場工事を始めたのであったが、いよいよ空襲が激しくなり、飛行場近くに設けた事務所も、一回の空襲で、爆弾の破片が構内に充満するという程激しくなってきたので、三方原航空廠を収容する地下工事を併せ施工するよう命令を受けたので、遂に積志村に事務所を移し、そこで終戦まで頑張った次オであった。

事務所も銃撃を受けた。近くに建っていた飯場も焼かれた。毎夜のように、浜松は空襲を受けて、真赤に炎上した。映画で見たローマの大火のように炎々天を焦して燃えた。積志村で新聞が読める程明るく燃え盛ったのであった。日本で一番酷い空襲を受けた浜松市よ、雄踏爆弾、艦砲射撃まで受けた。悔れむべき浜松市よ。私員の大多数は此の屈を焼かれてしまった。現場でもウカウカすると、艦砲機に狙われた。その真尺千にあつて、私員中に空襲による死者が出なかったことは、まことに奇蹟といわずして何であつたらうか。

事務所のラジオは壊れていたので、重々ニュースを隣りの震家に聴きに行った。終戦の訃報であった。どの顔にも涙が頬を流れていた。どこからともなく、低い嗚咽の音が聞えた。悪戦苦闘、遂に敗れ去つたのであった。

それからは、元をとり直して、人と器材を本来の内務省直轄工事に収容し、多数使っていたオ3国人をも、河川、道路工事のかに転換して、何等のトラブルをも引き起さなかった事は、不幸中の幸であつたと思つているし、終戦と全船にとつた軍の見苦しい態度に引換え、内務省私員一同の一致乱れぬ秩序立った行動を、私はいつまでも有難いと思ひ、誇りに思つている。私はその年の暮になって、感慨多い浜松と、苦楽をもともにした多数私員とに別れて大阪府に転動する命令を受けた。

悪戦苦闘の6年間よ。この間飛行場工事に従事した人々は勿論、留守居後

として各事務所に残って、遺留工事を休みなく続けて下さった人々の御苦勞も、また筆舌につくせぬものがあったのである。なお私の傘下から送抜されて、フィリピンに派遣された人々も、多数彼の地でなくなっている。今回送って頂いた名簿を見ても、私と一しょに歩いて下さった人々の中で、すでに10指に余る人が幽明境を異にしておられる。その1人1人のお姿が目の前に浮んで来て、走馬燈のように、往りし日のことどもを思いださせて下さる。4人の子供の内2人まで浜松で生まれ未だ若く元気でもあつた亡妻のことをもあわせ憶ふ時、私としては、まこと感無量なるものがある。相済まなかつたこと、悲しかったこと、楽しかつたこと等、一々憶い起せば限りがないが、どれもこれも、時代の大きな激流に押し流されたものといえようか。今はなき諸氏の御冥福を、衷心御祈り申上げるとともに今もなお健在なる方々の、この上なき御加餐御自愛の程を、心から御祈りしつゝ、拙き筆をおきます。

天竜川を憶う

金子 收 事

天竜川といえば、長い鉄橋と「ばかでかい河原」だ。ぐらいの知識しか持合せなかつた私が、その天竜川に、工場主任(出張所長)として、また事務所長として、戦前(昭和14年7月~昭和16年12月)、戦後(昭和23年10月~昭和24年3月)の2回にわたって、御厄介になつたのも、何かの因縁でありましょうか。

工場主任は学校出たての、かけだし時代、当時選案として残されていた西浜川締切りとこれにともなう中ノ町水門建設の使命をおび、畑谷さんの後を引き継いだものであります。時代が支那事変中の非常時局体制で直轄工事はすでに予算資材などの関係で制約を受け鉄筋コンクリート構造物は緊急なもの以外は突施困難な時代となり、せつかく気負つて作った設計も日の目を見ないで脾胃の嘆をかこつた始末です。そうした事柄で当時工事は極端な環境、水制の工程に限定され、建設機械はいまだ蒸気機関が巾をきかし、内燃機関は故障が多くて現場では敬遠されがらでした。最近の内燃機関万能の建設機械の活躍を思うにつけ隔世の感があります。

事務所長としては在任わずか4ヶ月でありましたが、とぎたまたま戦後の現況期に際会し、予算資材不足、物価の騰貴、労働攻勢など各種の困難が介在し、工事はさわめて低調であり、特に労働組合運動の行過ぎに、常に余る

ものがあり、事務所長の仕事の大半が、組合対策・組合交渉に明け暮れるありさまで、ときに事業の停止、事務所の閉鎖も避け難いというような緊急の事態もありましたが、幹部職員諸氏の献身的努力と、一部良識ある職員諸氏の自重協力によって、最悪事態が避けられたのは不幸中の幸でした。

こうして、私の関係した天竜川は、余り事業の発展を思ないままに経過しましたが、長い時代、関係各位の不断の努力は、創業以来30年ここにきて実を結んで、今日ここに、当初計画された事業は大部分完成され、東海道の一大河川として遠州平野を洪水の脅威から防いでいる磐石の橋は、まことに頼もしい限りです。今後さらに近代河川へ脱皮のため、常水路の固足、段堤の処理、河口改修が計画されているやに聞いておりますが、上流の洪水調節多目的ダム、発電ダム等の開発とともに、天竜川がさらに高度に開発利用され、近代産業発展の一翼を担ってくれることを祈念して止みません。

30周年を迎えて

新村田鶴子

昭和2年天竜川改修工事々務所が開設して、30周年を迎え永く此事務所だけに止まり勤務出来た私にとって一層の喜びと感激深いものがあります。

10年一昔と申しますが、私は又その一昔前の昭和13年の5月現在の中ノ町出張所、当時内務省名古屋土木出張所天竜川改修事務所に勤務して現在に至りました。此間兼事に勤務出来ました事は一重に皆様のお力添えと深く感謝致しております。永いと申しても過ぎ去って見れば色々な事がついでこの間の様にも思われてなりません。私の入所した当時は、事務所に庶務室工務室とがあり、14-5人の方が勤務しておりました。事務所のまわりには花壇がありきれいな花がたくさん咲いていて、近所は製材工場でしたがとても良質な所でした。

昭和12年学校を卒業して和歌の磐石に通っていた私は、内務省に勤めたくて毎日そんな事ばかり考え、磐石の方は少しも身がはいりません。それは私の家の前の中川屋に食事に行らっしゃる役所の方を知っていた事と、一つは狩田さわさんが袴をつけた和服姿で事務所へ通われるのを見て、当時10代の私は全く憧れてしまったのです。「動には出さない」といっていた両親の承諾を得て、役所の方にお頼いしてみました処、ちようど大橋繁子さんが返駈するからというので、早速履歴書を持って当時庶務係長の佐藤正四郎さんの処に伺い採用して頂く事になりました。「5月6日から来て下さい」と

いわれた時にはうれしくて今でも其時の喜びを忘れる事が出来ません。おさげ髪に袴の袴をつけ、私は胸を躍らせ通うようになったのであります。当時現在の事務所長の事を主任と申されましたが西尾辰吉主任でした。勤務2日目こんな事もありました。お昼の注文で中川屋に電話をかけなければならぬのですが、いままで一度も電話をかけた事のない私にとって、もう電話口に出る事だけで胸が一ぱいでした。番号ばかり気にしていたので、とうとう申込数は一つでしたのに電話番号の数字だけ注文してしまったのです。其時神原太郎さんが「初めてだからね」と笑いながら注文を訂正して下さいましたが、皆さんに笑われ机の隅で小さくなってしまった事を今でも思い出します。勤務して驚いた事は、現場の職員の方の言葉の荒い事でした。(すみません)色は黒いが土下の人には優しい心が何んとかと、宴会などするとよく歌った事を覚えておりますが、時には叱られているのかと悪い悲しくなった事もあります。仕事は茶接待と郵送、出帳帳、個所等の狭小消耗品の出入でしたが、皆さんの優しい指導のもとに毎日を楽しんで勤務出来た事を当時の方々に深く感謝致しております。その頃から遊球はとても盛んで、昼休みには毎日きまってテニスです。時々現場の方と試合を行いました。スマートな相乗さん(元木曾川上流出張所長)応援のお工手な石野さん(三重工事工務課長)その頃からもし私がテニスの練習をしていたら今頃は磐田工事遊球選手ナンバーワンだったかもしれませんが、惜しいかなテケットにボールが当たりません。昭和13年の7月、幾日も続いた雨に天竜川は増水し、上流中瀬の堤防が決壊するというので、水害防止に大騒ぎを致しました。現場の方は勿論事務所の人も徹夜で勤務に当り、やっど決壊を防ぐ事が出来ましたが、その時の皆さんの緊張したお顔が今でも思い出されます。支那事変に続いて大東亜戦争が始まり、役所の人や戦地に行かれる方が次々出て参りました。戦地にいる方へ皆で毎月慰問袋を送るのがとても楽しみでした。15年袖浦に飛行場の建設で天竜建築工事々務所が出来ましたので、多くの方がそちらへ移動になり、改修工事は全く少人数になってしまいました。(その当時と記憶致しておりますが、現在の現任所長が事務所へいらっしゃいました。)16年内務省の一部のオズ軍属として飛行場建設のためフィリピンに行く事になり、庶務課の金井和子さん、大橋ふさ子さんのお父さんも出掛けました。皆さん親切に出掛けましたのに、此の事務所から行かれた方では鈴木政吉さん只1人が帰って来られ、お気の毒にも負戦は多くの人を亡きものにしてしまいました。御一緒に行かれた山口鹿之助さんは私にワニ皮のハンドバックを土産に下さるなど、元気なお便りまで下さったのに、今はお好だった尺八もお聞

きする事は出来ません。激しかった空襲によく書類を抱えては防空壕に飛込んだ事や、天竜川の鉄道橋風道橋を爆撃された時など、事務所の中で役所の人達と生た心地がしなかった事など思い出は枚限りありません。戦争も終り時代の変化と共に取柄も大変変わって参りました。私は時偶若い方に役所の昔話をする事がありますが、女の方は真夏でも白足袋を履き袴をつけて畏っていた時代もあったのに、今ではとても我慢出来ません。25年9月見返資金で風道工事が始ると同時に事務所が現在の整田に移りました。私の入所した当時又工事々務所開設当初とは、人員、工事の規模等も随分変わりました。現在整田工事々務所は渡辺所長のもとに優秀なる機械設備と共に私達は国土の守りをしております。道路の良悪は其国の繁栄のシンボルともいい、又昔から水を治むるは國を治めるとか申しますが30年間改修工事に尽された方々の後を引継ぎを以って今後も道路を愛し河川を守り続けたいものです。

天竜川改修 30周年記念によせて

戸 沢 英 夫

このたび天竜川改修30周年の行幸として記念誌を発行することになったとの事ですが、天竜川改修の厂史のためにもこの上もない貴重な資料となろうかと信ずるもので、誠に有意義な快挙であることを心から祝福申し上げる次第です。

さて私も天竜川に永遠留した方の組ですから、この機会に是非一文寄稿したきものと考え、想を練った挙句が、「天竜河畔ノ2年」という題名までは定めたのですが、どうも運の悪いことには、丁度昨今は毎年のことながら防災課で最も忙しい災害査定期でしたので、とうとう筆をとる暇がなく、締切期日に間に合すことの出来なかったことを残念に思っております。以下簡単ながら戦時中の思い出の1つを。

私は昭和15年5月30日に内務省の人となりましたが、丁度この日は私が永久に忘れることの出来ない天竜川の住人となった日でもありました。

私はどんな因縁でか天竜川に12年も住みついでしまいましたが、考えて見れば誠に漫々的な事で、實のた若ではなさそうですが、これには宿命的な時代の巡り合せなどというものも大きく関係しているようです。

天竜川の改修工事は、今迄の事業を一応30周年で区切りをつけて見ますと、大体三つの期に分けることが出来ると思います。即ち昭和15年頃迄が

オノ期で、事業は全面的に最も盛んに行われた時であり、オノ期は昭和25年頃迄で天竜川改修の混乱期ともいべき時であった。又オノ期は昭和26年以降で仕上げの期という事がいえそうです。

私はオノ期の一巻劇の趣きなオノ期の時代に大半を過ごしてしまいましたので、混乱期であるだけに色々の出来事に遭遇いたしました。

元折尾ノ5年5月に天竜川に張り切ってやって来たわけでしたが、その頃は又那事変も益々拡大してすでに大東亜戦のきざしもあったのでしょうか天竜河口に飛行場が建設されることになって、その年の内に早くも所長以下多数の職員と機械が袖沼に移動しました。つづいて16年本大東亜戦のボツ発です。

この時代にして思えば斜陽景としか見えない河川工事など予算は削減される一方です。

又17年始めには河和飛行場建設、19年3月には清洲飛行場建設、19年11月には知多飛行場建設、三方原飛行場拡張という具合に全く軍工等ばかりで、その度に天竜川の職員と機械は減る一方で、わずかな天竜川改修工事の遂行にも事欠く有様でした。

なお都合の悪いことには、この頃天竜川としても戦時体制に依って食糧増産などのため東濃川締切工事を促進することとなり、18年末特に分予備金が支出されましたが、前述のような状態で、工事の遂行は困難を極めました。

また最も悪いことの一つは、19年12月7日の東濃地震で、このたの中ノ町以南の新堤は天端がほとんど大龜裂を生じ、あるところは1m余りも沈下してしまいました。本頁からは橋本技師が早速査定に見えて、復旧費は、9,935,000円と定まりました。

この復旧のためには人員不足のため、軍隊の応援頼ったほどで、中ノ町引堤の最後の新旧切換えは1ヶ中隊で2週間位かかったように覚えています。

こんな調子でとうとう終戦を迎えてしまいましたが、その直後にもう一つおまけのついたのは20年10月の河輪災害復旧でした。

私はこの不幸にも終始天竜川に止まる事が出来て、始めはもっぱら工務課で河水総制や設計の手伝いなどしておりましたが、逐次幹部の転出に伴って、18年から一応工務主任のようなかっこうとなり、東濃川、西濃川締切などの設計に専念することが出来ました。

しかし19年3月天竜川工場長となってに科所長からほとんど、工事の全責任をまかされてからは、急に難用が多くなってしまっていて、ほとんど机に向

ような事は出来なくなりました。事務所といっても工務室には私の他に人位であり、庶務も3人位ではなかったかと感えます。それでも現場には工夫以上で10人位はおりました。私は東叡川や農興復旧のため、ほとんど毎日のように関係町村や地方事務所其他の官公庁にお参りして、材料、人夫、配給等についてお頼いしたものです。

なおこの間には空襲あり、地震あり、眩暈射事ありで、色々の苦しかった思い出はとて書きつくせるものでなく、当時の天竜川残留者の御苦勞も又並大抵なものではありませんでした。

又楽しかった思い出も数限りありますが、中でも毎日日課のようなテニス、(もっともこれは1年程度)、麻雀、魚取りなど、この中には相当奮闘なものもあつたりして、賢明な皆様の中にも未だ記憶新らたな方があることと推察いたします。

最後にまだ面白い題材としては、終戦直後の閑散期に私買一同で手を2,000貫も作った話、労働組合の話、西叡川の話をありますが、登壇出張のための登壇時刻の時間いよいよ迫って参りました。

残念ながらこの辺で筆をおくことといたします。

懐かしき我が処女航路

鈴木 禎 夫

私が学校を卒業して始めて就職したのが、天竜川改修事務所であった。いわば社会への処女航路を中の町の事務所で滑ぎ出したわけだ。この頃は私も今と違って極めて純情な青年だったようだ。当時の落書帳(時々思い出して記した日誌)をみると、とても懐しい。ところどころに「オタマジャクシ」と自ら号し、時には懐疑し、時には感激した、いつわらざる心算を思いのままに記してある。

「オタマジャクシも蛙の子」という言葉に当時何か一種のプライドさえもっていたようだ。かくの如くようやく足のはえかけた「オタマジャクシ」が始めて眺めた外景であるので、それは名もない一隅の石ころであり、また井の縁であったかも知れない。しかしそれは、天竜川を構成していた一部分であったことは事実である。したがって、当時の落書帳から五つ六つ採本して披露するのも、また一興かと存じあえて筆をとったのである。以下御笑覧願いたい。

○ 月 ○ 日

「オタマジャクシ」今日も水から抜け出でて跳躍を試みられど能わず、未だ経まった仕事も命ぜられぬまゝに机に向い、金原明善翁の伝記を読む。しかれども、いたづらに眠気を催すのみ、八角時計にウインフすること十数度、時々便所に立ちて背のびして帰れども時計の針は一向に進行し得ず。あゝ、先陰まさに「ナメクジラ」の如し。

○ 月 ○ 日

役所に於けるわが仕事のオノ号、それは天竜川流域図の拡大作業なり。これも明日には完成せん、製図板に腹這ってデバイガーを持つ。われはついつい学生時代の如き錯覚に幻惑せられ、不用意に口づさんだ口笛を上司にしかられたり。誠に不謹慎といふべきなり。構性を捨てるべし。コピーといえども、われに与えられたオノ号の作業なり。

とまれ、一つの成果を纏めることは楽しきものなり。そこにはおのずから討真性があり、創意工夫が生れ、成果に対する励みが生ずるべきと思うべし。最近ようやく役所が退屈でなくなれり、大いなる進歩といふべきなり。

○ 月 ○ 日

同じ役所の中といえ、庶務室と工務室では大分雰囲気異なるものと覚えてたり。赴任して3ヶ月になるといへども、未だわれを客人扱いしてゐるは、何かふに落ちぬものあり、先輩にその旨たずねるに君の方が高給者たるためなりといわれたり。この青ニオエと思へどもいわれてみれば、うなずかれぬ節もなし。席夫、工天、常工夫、運転手、小使、給仕、書記補、書記、属、技手補、技手、技師等々何と階級意識の濃厚なるや、実に驚くべき事実なり。出勤、退庁の時間はもちろん、テニス、碁等の娯樂にいたるまで意識してか否かは分らねど、毅然たる組織、系列に順じて行動しているやに感度けたり。とりわけ技師の権威たりや神儀の如し、到底われ人のおよぶところにあらず。あゝ、われ技師になる日は何時の日か、かく思うといさゝか幻滅の悲意を感ぜざるを得ず。

しかし、たゞ黙々としておのが私務にみたむきなる一般役人をみよ。工を見ても限りなし、また下をみても限りなし。車に乗る人、走る人、そのまたわらじをつくる人。これが世の中の実態といふべきか。かく懸念してようやく心の落付きを取り戻したり。

○ 月 ○ 日

新家庭と申せども、亡父のワイフと二人なれども、とにかくわれのサラリーで生活し、すでに無事2ヶ月を過ごしたり。

中川屋に定食せる当時に比すれば、何と「シマリ屋」になりたることを。

往復のバス代でさえ算盤せる上に、新聞の貸立に算をつつみ5料の道を、さ
 っそうとペダルを踏むに決せるわれも、雨天はやはり、バスにまさるものな
 し、しかれども昨今の如き雨多ければ、バス代も馬鹿にならず。毎日毎日
 の山道のすりへる思いはすれども、7時半のバスを待つ下げ腰のメツケエン
 に手練あり、たゞ眺めるだけの楽しさでも、これを試う能わず。たゞたゞ雨
 の日の顔合せでは、いかにもみすばらしきおのが姿をさらすのみ。あゝ！明
 日よりは、本締のスポンと長靴を脱ぎ捨てて、当分背広でメカクシしてバス
 の人たらん。

吾き日、再び来らずかな。

○ 月 ○ 日

妙令の御婦人曰く「みの方は立派ですワネ。背が高く、あゝ！われ身
 長後ノ寸高かりしかばと思えども、今からでは如何にせん。面親をうらみて
 も堪らず。吾、吾、寸足らず何とせん。われこそ立派に工兵に合格。歴とし
 た、帝國軍人たらんものなり。やがて、ダブダブ服にドク靴姿で、練兵場
 におみえするわれを胸にえがくと笑い止るところ知らざるなり。サンショウ
 は小粒でペリッと辛いぞ。健康には、とにかく自信を得たり。寸足らず、何
 等急にするにたらず。明日からは一層張切らん。

○ 月 ○ 日

昨夜来の雨は未だやまず。吾、今朝からは一層激しさを加えけり。われ例
 の如く、出勤せるに、さすがに今日は全費すでに出動しあり。未だわが認識
 の不足を恥じて余りあり。午前10時、工務室に水防本部待候され、われは
 候候係となれり。刻々と入る雨量、水位、電報、通話専用電話は断絶えるこ
 とを知らず、突に目が回るに似たり。なれない、われに何くれと忠告下さ
 れしM氏に、感謝の念、禁じえず。

11時、空はいよいよ暗く、雨はますます、激しくなりぬ。

けた、まして市外電話の音に早速とびつけば、安間川の堤防欠壊との情報
 なり。ひきついで詰所から、同種の紹介電話。その応待は一しきり。乱打
 する半鐘の音は、伝送する時雲にこたましてか、いやに無気味さを、加えけ
 り。現場からも続々はせ参する風々のカッパの中に見えるすどい目、目、ま
 さに戦慄をばらんだ赤坂本部にも勿らざる情景なり。かゝる緊張の激時間を
 経て、雨はしばらくやみ、底島の水位も峠を越せりとの情報に一同呑息し、
 を喘せり。われも堤防に出でれば、あの大天竜があたかも怒れる飛竜にも
 似て、濁水とうとうとして岸を洗い、しかも何処より流れ来るかものすこい
 流不は、互にかみつ、衝かれつ、流れ狂うが如き水を更に工キサイトせるが

如し。あゝ、はじめて目前にする大天竜の怒り、社説無比、表現する言葉を
 知らず。もし堤防決壊し、氾濫せんか、想像するだに身震いを禁じ能わず。
 堤防よ良くぞここまで耐えて立つるかな。

今後、かくの如き水魔との戦を、何度か繰返さん。思うに水魔に抗するに
 は、時に必じて勇猛果敢たる処置はもちろんなれど、それにもまして、不断
 のめだたぬ努力あればこそあのものでい水にも足を洗われることなく堅固
 たり得たり。堅固なる基礎の構築、これこそ、水に対する不断の努力と覚え
 たり。あゝ、人生の荒波に対しても、またしかり。不断の絶えまぬ努力、技
 術はその基礎学の修得こそ肝要なり。いざ、研鑽、研鑽、

天竜川河口で遭難した 本曾川丸の思い出の記

古 郡 哲 爾

昭和15年9月、天竜川河口に陸軍の飛行場建設工事を内務省が委託され
 て、天竜建築工事々務所と称した。大体が天竜川改修事務所の職員で、それ
 に名古屋土木出張所(今の中部地方建設局)管内の職員を大多数応援するこ
 とになった。

わたくしも、この工事に従務することとなり、天竜川東流川附近の土砂を
 ポンプ船で浚せつして機関車運搬する工事で、港務詰所主任となった。ポン
 プ船は、本曾川丸380噸の自走式、バーナ付で、明治18年オランダ国、
 キンドルアイク造船所建造で、当時オランダ国の技師とともに本曾川下流工
 事に就航したのでその船名を附したのであるという。

工事が終って敦賀港修築工事に就航し、昭和5年同港工事が終わったので福
 井県に貸与され三国港に就航していたが、この工事が始まるにつき三国港か
 ら日本海を廻り淡田、下関、神戸の港を経て、三重県鳥羽港に着き諸般の準
 備をなして、天竜川東流川河口から浚せつしつ、土取場に入航させるのであ
 った。

さて、言に聞く運川難、少し荒れても1丈の波で、それで海岸に近づくこ
 とはなかなかであったので、海が荒れると沖合に碇泊する。わたくし達は天
 竜川河口からポンポン船で長時間もかかり本船に行くことが度々あった。船
 員は船長、機関長、運船士、水夫長、火夫長、舵手、油差、水夫、火夫16
 名、それに補助員16名が乗船していた。

工事は早急を要するので1日も早く入航させたい。しかし、波が荒れると

船長はすぐ神倉に逃げる。航海中は船長の権限であるので黙口した。10月になって彼も大分治まったので淡せつしつゝ運行した。

ある夕ぐれである。わたくしは丘に上りたくなり、ハシケで海岸につき宿舎におちついた。というのは潮が切れたからであった。夜更時噴急に海が荒れ始め、船が押上げられて崖崩し。船は傾き浸水し、危険であるとの知らせであった。そこで従務員その他の人に非常召集を行い海岸に行った。ワイヤ、ロープで引っぱり安定しようとしたが径が細いのですぐ切れてしまう。船からは助けてくれとさげが、実に惨憺の状態であった。そんなことをくりかえしつゝ、夜が明けた頃には海も静まって潮も引いた。原因は彼が高くなったので、あわて、逃げようとしたとき、ワイヤ、ロープがスクリュウに巻きついたため機関が動かなくなったのであった。

さて、これを如何にするかと色々協議し、ついに天竜川の水を派川に集中させて船が浮くようにした。そのため、派川の水分点、鉄道橋下に溜子水制を無数に入れて派川に導水し、又河口にも水制を入れて船に当らせるようにしたが結局は失敗に終わった。そこで、こんどは高潮を利用して引きずろうと1吋半のワイヤ、ロープで数ヶ所を結ば、ウインチで引くことにしたが思うようにはならなかった。

11月になってある日、高潮でしかも荒天の日があった。丁度避難したときのような彼が打ちよせてくる。それでこのときと思い、総員500名余り動かし、とうとう引きずり水溜りまで引き入れた。この時ばかり皆歓呼の声が出た。

それから大体安定したので淡せつしつゝ2月下旬に目的地に繋船し、海争部に届け、スクリュウを封印した。封印したのは目的は淡せつだけであるので工争担当者の指揮となり工争の進捗に努めることが出来た。

思うに、「船頭多ければ、船も山に登る」という。人の力というものは大なものかと、今は思い出にすぎない。

とりとめのない思い出

飯 沼 養 保

私は昭和16年正月の松飾11がとれたばかりの日に当時河科村に在った天竜川改修争務所機械工場へ始めて雇ってもらった。

その頃は陸軍が袖浦飛行場を建設中で、その土木機材の滞りも兼ねてやっていたのでとても忙がしい職場だと思った。私は機械工場最寄の河科村や

掛塚町に住んでいたが、食米界の山国から出て来ていろいろ見る風物は珍らしかつた。尤もどの家も積垣を巡らして寒中だというのに燈の木のオレンヂ色も鮮やかに大きな実をつけて垣根の上からのぞいている景色などは気候風土が生んだ特異なものだと思えた。とに角松福なところだと思った。私が郷里でこどもの頃遇した実家の近所に、充分手入のとどいた積垣で囲れた井護士の屋敷があった。お金持で所の有力者だつた。だから私は積垣というものは容易のものではないと思っていた。遠州のこれらの家々が例外なくお大茶かどうかは知らないが平和な暮らしを立てているように思えた。天竜川の改修に抗争している人達も多くはこのような家に住んでいた。

私は毎日こんな寒い環境の中を通り抜けてはせつせと機械工場へ通い、やがてキノ町村の本争務所へ登り、間もなく兵隊に行き終戦の翌年帰って来て、まだ寒い頃河科災害復旧で活気溢る河科工場(今の出張所)へ配属された。ここには茅沢さん松本さんを始め吉谷の工手長さん機関手さんが大勢おられてお世話を受けた。建設省オ一線のふんい気は私のような争務員でもおっとりしてはられず、形だけは地下足袋巻脚絆で仲間に入れてもらった。その頃の出張所は堤防の裏小段に建っていて大変粗末なものだつた。季節風の吹きつさらしで机の上など、はたいてもふいても、すぐ砂埃で真白になった。透開漏る風は冷めたかつた。それでも出張所の内はストーブのお蔭でしのげないことはなかつた。大変なのは寒中の河川工争現場です。完全な防寒着が身るわけもなく、みんな有合せの粗服で厚く身ごしらえして有名な遠州のからつ風が吹き上げる天竜河原の砂つがてを痛い程に鑽へまともに受けて、予定通りの仕事を1歩1歩成し遂げていかなければならなかつた。

当時ぼつぼつディーゼル機関車が採用されてきたが、何といつても蒸気機関車が木トロを引張る時代だつた。朝定まった時刻から機関車を動かすには、蒸気を必要度まで上げて置かねばならないので、機関手さんや火夫さんは冬の夜はまだ明けやらないうちから出勤していた。河原で人火家を指揮する工手長さんの声はびっくりする程大きく、語気も鋭い、風の音、機械の回る騒音の中ではほそぼそ声では通らないからそうなるのだろう。

指待ちないことだが私のような争務員には実際の苦勞はわからない。大規模の河川工争はただ壮観だと思ふのみだつた。

楽しみもあつた。雨のち后など仕事が終わって途中で打ち上げになって今日は「出銭」をやらうと誰かがいい出すとすぐまとまった。「出銭」とはお互いにわずかな費用を出し合つて例えは忘るこの会を催すなどの意である。現場で猿がカラカラになつた人達が何杯となくおかわりを重ね驚く程の売れ行きだつ

をこころを憶えている。やがて工事が終って成功式ともなれば出張所員1人残らず招かれて労苦をねぎらってもらった。苦しかった又楽しかった工事の思い出話に花が咲いて結構な祝宴だったことを憶えている。

そんな思い出の時からでももう10年になる。事務所の名前も磐田工事業務所とあらたまって次々に拡張され今後もさらに発展して行くことだろう。私はここへ雇われてもう17年。OBもいいところになってしまった。時代に取り残されていくことをどうすることもできないがどうか従前の好みを今後とも仲間に加えておいていただきたいと思います。

在職当時の思い出と感謝の言葉

武 田 源 一

大東亜戦争が初って各地に軍事工事の初った昭和16年末当時の天電飛行機設置工事に内務省天電川改修工事業務所の皆さんが総力を挙げて同工事に従事致されました。此の時が私の内務省に籍を置かして戴いた時であり、日々戦争が激しくなるに従い、河川改修工事と同時に軍事工事に重点を置かれ天電飛行機完成後は愛知県豊田市の清洲飛行機新設工事に従事し、終戦に間近き昭和19年には浜松航空隊の軍工事に従事し、終戦と同時に中の町の事務所に移り22年退職迄河川改修工事の手伝いをさせて頂きました。

私が特にここに申述べさせて頂き及ぶ事は私の思い出よりも皆さんの改修工事に尽された結果が今日此の様に変わったかと御遠地に御勤の方々に御報告して御努力に対する御礼を申し上げ度いと思ひます事は東濃川締切工事に依る現況であります。

東濃川尾川敷は竜洋町(旧十栗村、掛塚町、蒲瀬村)全町に跨る500町歩の敷地であります。此の大部分の河原が現在は肥沃なる田、畑に開墾され、本町と何等安らぬ農業畑となり水田となりました。尾川敷地の中野部には町村合併に依る心臓たる町役場を設立致しました。役場の隣地には組合立竜洋中学校を設立し、千有余名の中学生在が大野球場や50メートルを測にした大運動場で喜々として遊び又町営住宅も役場学校を中心として70余戸の設立を第一節路を造成し橋本の竜洋町中心部はこの尾川敷の河原上にある事を飛信して居ります。又交通関係も浜松静岡間2級国道の開通も翌年33年度には町役場南の方400米の位置を横断し、旧掛塚橋に掛替えられたモダンなる有料道路に取付けられることだそうです。

10余年前の流心節や河原が今日此の様な街と取り肥沃なる田、畑と化し町民の福利に尽力して戴いた改修事務所の諸先輩の御努力を現町民の1人として重々深謝致す次第であります。

機 械 と と も に

松 岡 留 之 進

私が東京土木出張所の利根川、江戸川の分岐点、関宿閘門工事が完成し、名古屋土木出張所天電川改修事務所、機械工場勤務として転勤になったのは、30年前昭和2年11月16日寒さ身にしみる時でした。若い元氣はつらつたる頃でしたので、河川工事の重大なる使命を工場長より聞かされ、天電川は利根川に方らぬ大工事、ことに機械を担当する新しい工場が出来、その事分けとして行く嬉しさ、それに遠州は気候もよく住み良い所と聞かされ喜び勇んで赴任した。

掛塚橋の西岸に機械工場が地元豊羽山組にて着業中でした。出来たばかりの中の町村の改修事務所へ時の工夫、砂山房吉氏に案内され所長西田政天氏に面会、転勤報告をした。我々新井恒二氏に機械工場設置工作機械の備付け、河川工事に使用する掘削機、また機関車、土運車等東京土木出張所より送付物の組立等の細い注意を受け、工場長藤田兼吉私反庄司平吉、本宮宗太郎、大石秋太郎(全部逝き)と共に張切って仕事に着きました。次の日は20米位の遠州名物空ッ風(その時知った)が吹きまくった。その時の新築橋は木橋で巾も狭く、手摺は被覆、敷板は所々折れ、あの長い橋も危険この上なく驚かされた。村の人はこんな風は3月頃までは毎日のように吹き、もっと強い時もあり、老人、女、子供は手摺ぐたいに長時間かいて渡る。自転車は強い風には寒れぬとおどかさされ、喜び勇んでいた事などけろりと忘れ、東京へ帰ろうという私及もあった。村の長老がせっかく赤を立て出てきた事、こんな所でも住めば都だ、天電川は金原明善という人が私財をなげうって河川工事に尽された音節などを聞かされ、そうだがやるぞと心に誓い思いどまった。掘削機、機関車等の組立てには同じ東京土木より転勤になった機関手川辺文作、杉崎勝八、関口軍次郎諸氏に応援を受けた。

長い間の工事に、現場機械の移動の特等、河の中の仕事のことで、場所によっては細かに分解、アルマ舟等を使用し、自動車に昇らぬものは牛車等を改造しレール敷設により運搬するなどあった。

その間掛塚橋の流失は幾度か、増水の早いこと、渾身地元、金原先(註)

壕、水害時の壘橋工兵隊の出動、工事に携わる人々と地元民の不眠の協力、河底に埋められし機械の強出し、分解、機械故障時の徹夜修理、昼夜運転による突貫行軍、戦争中飛行場建設のための機材工場分解移転による空白時代、こうして改修工事従業員の皆様方と共に色々な困難を克服して来たため、暑い時もいつか過ぎ、今は出足早く蒸れ回る増水にもびくともせぬ頑丈な堤防護岸工事が完成に近付き、上流には佐久間ダムが完成送電を始め観光地となり、堤防の完成と共にどの道路も改良舗装され、見苦しかった掛懸橋も近代技術の神を誇る鉄橋となり国道の天竜川橋と共に笑顔をそえ、地元の人金原昭善翁も草葉の蔭から微笑まれていることでしょう。こうした意義ある地に根をおろし、永住する事になり、自分は幸福だと思うようになった。「会うは別れのはじめ」ということがあるが、30年前より改修工事の単分けとして働いて来た友もあるいは逝去、退職、住所不明者等もあって、起工より完成近き今日まで会い見る人々は少なくなった。先日松竹映画「喜びも悲しみも幾歳月」を見て、移り変わり行く人の世を思い浮かべ思い合せ、たゞたゞ驚くばかりだ。30年の年月は流れて頭に霜を軟く年となり、今では息子と親子二代国土建設に励む事の出来る喜び、内務省および建設省と名は変われども、長い間河川工事に従事した事は感懐無量だ。進歩する科学、建設機械の発達、トレーラートラック、ブルドーザー、ドラグライン、ドラグショベル、グレーダー、バッシャープラント等、こうした機械の整備にたずさわる意義を思えば、年をいたりといえども、心を覆い打ち覆っている。おわりに河川工事従業員の皆々様方と共に、天竜川30年記念を心よりお喜び申し上げると共に絵で昭善翁の遺に黙祷を捧げ、天竜川改修30年を振り返って思い出の記の筆をおく。

敗戦から定員法まで

脇 洵

私が在職したのは、20年10月から24年9月までの短い間で、それも河輪工場と工務室の2ヶ所しか知りません。このわずかな経験が、私にとっては今もなお決定的な影響をもっています。といいますのは、この期間に、私は技術者としてのつよい自覚と、労働者としてのあたらしい出発をとげることが出来たからです。

河輪工場時代、私はあまり仕事らしい仕事をした記憶がないので、今これを書きながら、若干恥しい気がします。しかし、現場を只ウロツキまわって

いただけのようでも、その間に、あの大規模な河川工事のスケールが何とはなしに馴染みになって、いわば「技術」がオボロゲン肌についたような気がします。茅茨さん、松本さん、武田さん、土屋さん、市川さん、永田さん、その他沢山の方々に、斯にふれては天竜川改修の歴史、先輩のエピソード、仕事の苦心談など聞かされて、学校出たての私には、新しい経験の連続で、みのりの多い毎日でした。

5噸機関車ヤイツ号のナンマリした姿、其水で飯橋が流れるときの、橋脚を水面から逆様に突立てた凄まじい状景、徹夜で出水を警戒した晩、カンテラを下げて雨の中で照してみた増水標の標尺、今も眼の底に浮かびます。こうした生活の中で、私も少しづつ字生気分がぬけて、技術者のハシくれとして、いわば一歩を踏み出したといえましょうか。定員法による不当な首切りのために、その後の進歩は中絶させられていますが、やはり今でも、私は技術者であることに変わりはありません。

在職期間の後半を、私は組合役員として送りました。激しいことは今でも嫌いな性分ですが、選挙されたからには、真面目につとめようと努力したつもりです。文化部長の頃、皆でこしらえた機関誌「天竜」の発行者が手許にあります。その1頁ごとに懐かしい思い出と、仲間のたれかれの姿が浮かびます。しあわせなことに、私は在職中すべての人に親切にしていたできました。皆さんとの暖かい結びつきが、私をたもたうことなしに労働者としての道へ進ませてくれたのです。

現場にいたとき、つよく感じたのは、所謂坂手種、定工夫などの下級技術者に、深い経験が蓄積されており、それが建設者の技術を下から支えているのだということです。こういう人達が是れよく働ける条件をつくらなければならぬ。私は大学出身者として、特別の将来が約束されていたわけですが、この人達を裏切ってはならないと、心に誓ったのです。日本共産党に入党したのも、私にとっては、労働者としての道をまっすぐに進んだ必然的な結果でした。

定員法は河川工事の場合、共産党員をねらいうちに、其後の工事の滞りな進行にも差支える程に苛酷に行われ、最も大切な中堅的取組を大量に犠牲にしまいました。この故に私は、あの首切りを未だに不当無法なものと非難しています。

天竜川改修30年の歴史の中でも、私が在職した敗戦直後から定員法までの間は、嵐の時代ではなかったでしょうか。所長をさえ盛り切りのスイートンを食べていた頃です。予算ひとつがいろいろアメリカのいいなりになってい

たときです。私の初任給9000円が右から左へ下着料になって、あとに1文も残らなかつた位です。せ帯持の人達の生活がどんなに苦しかったか思い出して下さい。組合は、こうした構勢の中から生れたのです。あれからすでに1年、役所の中も随分整ってきました。現場にも、私のいた頃より近代的な機械がふえています。人の心にも落着きが生まれています。今更に変化のはげしさに驚かされるではありませんか。けれども、現在の状態こそあの苦難の日に、組合に面詰した皆さんの力によって準備されたのではないのでしょうか。

敗戦後のゴツゴツ返している中を、北海道から重いリュックをかついで天竜川にゆって来たときから、私の人生はこんな工合に遠州の地と結びついてしまいました。建設者の皆さんのおかげで、私は現在迄、迷わず悔いのない道をせっせと歩いてまいりました。私を育てて下さった皆さんに感謝します。そして、目立たない程にさくやかではありましたが、天竜川改修事業に私の力も加えられていることを、誇りに思うことをお許し下さい。

思い出すまゝに

早川 茂

私が浜松工争々務所勤務を命ぜられたのは、21年2月内務省に入ってから1年もたない全年10月であった。

10月初旬のある日、甲ノ町でバスを降りて聞いて来た通りに天竜川の堤防へまず上って初めて天竜川の流れを見た(もっとも汽車に乗って通過した事は数回あるが)あの大きな川の中を右岸堤に沿って流れる一筋の外はすべて砂利が堆積しているのを見、又統出水制に当る水の激しそうな流れ方を見て大河川だな。これからこの川と何年かの闘争組むのだと思うと何か感無量であった。

空はあくまでも青く澄み、如何にも長閑な風景と、今までいた庄内川西岸のゴミごみした狭苦しさとはあまりにも対照的で何か錯覚を起しそうであったのを感じている。

争務所を見付けるのには苦勞した。堤防を行ったり来たりして、丸正の工場の方まで行ったりしたが、最後に木村の山の間の空地にうすよごれた争務所を見つけて入って行って又驚いた。今までいた争務所の感じや、今見て来たばかりの明るく美しい景色とはあまりにも対照的だったからだ。

畑中前長、新井さん、本間さんを初の争務所の皆さん方に衫の如く挨拶してから宿舎を見せて貰ってこれも又驚いた。倉庫の半分を宿舎にしたもので

縄、逆その他と同居するわけである。

とにかく驚く事ばかりで、難に何と云って諾をしたのか、自分が何を考えているのが目わからない位だった様だが、皆さんから受けた印象は親切そうなの、そして名古屋とは違った敷かさを感ぜられたのはせめてでもある。

こうした私の浜松工争での生活が初まったわけである。

勝さん、豊島さんと3人での自炊生活も、逆や嵐巖との同居生活にもなれて、日々三好日といったもので楽しく送る事が出来た。

22年正月も無事に過ぎた頃から、労組結成の機運が起きて(それも例のストを前提としているので)何か緊張した空気が流れ始めた。これからこの浜松工争闘争以来30年の間における持異な1時期が始まったわけである。

組合は発足以来日を送るに従って今までの考え方も段々変えられて何事も組合中心的になり、全員の歩調が揃って来て急激に強化され、中部総又部内でも、1、2をうたわれる様になるに従い左傾して行ったのも無理からぬ事であろう。とはいうものの斗争に負け、斗争にくれるという様な緊張した日の連続の中にも楽しい思い出もたくさん残っている。(もっとも人間は時間の経過に従って過去は浄化される"といわれるのであるが)

機関誌"天竜"の編集、印刷、製本、配布をすべて私達の手で行った事もその一つである。

こんな事はやって見るとよくわかる様に、骨のおれる仕事だが、それだけに面白味もある。

原稿の校正、かり切り、印刷等、印刷は1色に初まり、段々欲が出て2色にして3色にと段々手のこんだものをやる様になった。

こんなに苦勞をして作ったものの山を見ながら又その中の1冊を手にして見る時の楽しさ、そんな時のタバコの甘さは何ともいえないものである。

弁天島、鐘出寺への沢る瀬一周や、治木浴、又は鳳来寺へのハイキング等々、若い人も年をとった人達も皆一体となって愉快な1日を過したりした事や、室内では歌謡曲、浪花曲からフラッシュものまで何でも取入れたレコードコンサートを聞いたりして本当に愉快に過したものだ。

こんな事ばかり書いていると、平常の勤務はそっちのけで、組合の教宣活動、団体交渉やレクリエーションばかりしていた様に思われるかも知れないが、工争の事も、負けず劣らずの馬力をかけてやっていたのである。組合関係に出た人の分を残った人が全部で争分けて仕上げていったのである。勿論、終戦後の占領行政でその時々々の政府の考え方も悪く様にならず、毎年天

ただけの予算が来るわけではなく、又機械類は5Tスタームロコ、鉄製土運車、3~5Tディーゼルロコ等のもので、今の様な、ダンプ、ブル、ショベル等々という様な近代的建設機械は海の向う側の話で、従って工法も昔ながらの工法で、極くいえばノンビリとしたものではあったが、又それだけに苦勞もした次第である。

私等も超動拒否斗争の間を縫って徹夜で仕事を続けた事もしばしばであった。

この様な日々の連戦で23年度末も終り、4月1日付で又、再開される庄内川の火宮復旧工事のために名古屋へ転勤を命ぜられて、満2年数ヶ月に亘る茨松工事での生活に終止符が打たれる事になった。

開戦以来30年間において、類のない、如何にも混乱に満ちたこの時期も私の去った後、半年足らずで終止符を打って、本来の建設事業一本やりの体制にもどったのであるが、組合員の受けた打撃、そして当然生じたであろう反動と斗って、強力な機械力と組織をもって工事を日夜進進せられているこの大工事々務所に立て直された堂々様の御努力に敬服すると共に、今度の御発展を祈りつつ、このつまらない思い出の巻を終る事とします。

== 想いであれこれ ==

谷 崎 実

私が盛岡工事々務所の前身である天竜川改修工事々務所に御厄介になったのは終戦直後で、当時の陸軍航空本郷三ヶヶ原工事本部長の仁科さんが無難しておられた天竜川改修事務所を引き上げて来たのが初めてで、其の後名称も茨松工事々務所と改り25年に再度現在の盛岡工事々務所と改称されたものであります。今年の6月迄の足掛ノ3午御世辞になったわけですが、過ぎ去ってみれば非常に短い年月でありました。この間所長もに科、解中、金子、英甲、早田、持さんと代り現在の渡辺所長となったのでありまして、これら歴代の所長さんから色々と御指導を仰いだのでありますが、いつも変わらないのは天竜川の清い水の疵れと同じく代々の所長さん始め所員の皆さん方の御厚情であると常々思っておる者であります。

私が最初工事を監督させられたのは甲ノ町地内の直営施工の中ノ町築堤工事でありました。其の頃は御承知の様に敗戦後の世相の混乱時というか至って社会の無秩序の時で食糧赤情も大受窮極で出役労働者も非常に少く、また出役する者も完全な工工工事の出来る者はなく戦争前までは1粒積の錫トロ

に30杯以上「コマワリ」で誰でも積込をやったものですが、当時は誰も嫌がってやる者はなく2人で15杯積込むのが精一杯の様でした。

こんな事では将来直轄工事が出来るものかと心配させられました。しかし当時は暗物資を動かせば相対の金になり、現場のすぐ近くで左岸の岩田堤より右岸の豊田堤へ平切干をリュックに1杯背負って天竜川を越せばトタンに100円になり労働者の1日の労働よりも良い金になったものですから少しでも山気のある者は1人として仕事のをらい改修工事に出役する者はなく、却って毎日出役する労働者は仕事出来ないが悪い事もしない善良な人達だといえたわけでありました。

戦後民主主義の音が澎湃として起り、建設省でも昭和22年に労働組合が結成され、わが茨松工事も支部が誕生したのでありますが、指導者があまり熱心になり過ぎて組合は次第に尖鋭化し、中部地連でも茨松支部は最も強力な組合と自負しておったもので当時の事務所長の金子さん、奥田さん等は大変御苦勞なされたものであります。私共出張所長は非組合員で組合幹部の所長欠汚の時はずに所長の補佐役として立会ったのであります。金子所長の時組合の要求を入れるわけにゆかず組合よりは親戚に迫られて遂にその翌日金子所長に促って出張所長等が揃って辞意をふところにして名古屋の局長へ組合の要求を持って陳情に行った事がありました。伊藤局長よりは予算を返上して茨松工事々務所は閉鎖し、職員は全部首にするといわれ首になったら明日からどうして喰って行かれるかというような事など汚える余裕さえ起らず、やれやれという気持ちで一特に海の家が軽くなった様な気持ちで帰って来た事がありました。

奥田所長のときでありました。レッドパージで茨松支部からも12-3名の解雇者が出ましたが、其の解雇の理由を問かんとするために、夕方から所長室に組合員が押しかけ及遠団体の労組や茨松近隣の共産党の連中も必後に来て交渉を持った事がありました。この時も所長室に入れないで所長室の外に一歩にあふれて翌日晩まで吊上げをくわされた時は一時はどうなる事かと心配したものであります。

また見返資金による道路改良工事并通、見付地区を担当して施工した事もありましたが、当時は今日と異って突貫工事でもあり、事務の整理方法も至って杜撰であったので、寧ろ会討検査を心配しつつ工事を急いでやってきたのでありましたが、案の定其の翌年会計検査を受ける事になって借り上げトラップで引掛り3日3晩も徹夜で調書を書いて、伊豆の長岡の旅館まで追い掛けて行って謝った事がありました。大苦勞をしてお小言をいわれ、こん

な馬鹿な争はないとつくづく感じた争がありました。以上の争は私の永い勤めの内で生涯忘れえない出来事のノとして思い出の種となる争でしょう。

思 / い / 出 / の / 記

小 栗 良 知

私が天竜川工事々務所に御厄介になったのは、昭和24年5月から9月までのごくわずかな期間でした。それまでは、運輸省建設部静岡支所におり、金子菊川工事々務所長および木原静岡工事々務所長の御世話で、ちようど桜井町に実家と母が健在だった關係上本務招聘を由けて天竜川の工事々務所に希望したわけでありませう。

赴任した時には奥田さんが所長で、所長室に挨拶に伺うと、「此所は労組のはげしいところだから君を引受けられるかどうか解らないぞ」との挨拶、これは一寸意外に思ったが後刻労組の委員長をしていた松本技官に会うと、こちらは本局が何といおうと引受けると太鼓判をおしてくれました。

当時の工務課長は人格者の吉田吉秋技官で、この方の下でその頃ぼつぼつ話題の中心になりかけていた総合開発を天竜川に如何にあてはめるか、というこゝを互い資料を参考にして始め、その時始めて金原明善翁の偉大なる遺産、用水計画を知ったわけでありませう。

その頃、浜松市内に名前だけの工事々務所建物があり、組合活動が余りにも華やかに過ぎましたので、奥田所長の親心かと思ひますが、その留守事務所に必だけ通うことになりました。私はそこでノ人で天竜川流域の5万分の1図を大机一ぱいに掲げて思案にふけたわけでありませう。その間、時たま病氣療養中の前所長畑中氏が色々助言をして下さった。

工事々務所での労組の会議は突に度々開かれました。その度に私は赤塗りの新式自転車で行先から中ノ町まで通ったものでありませう。会議はよく堤防の草場で行われました。労組の誌は当時在私の人達が一番印象に残った事件であり、私よりも詳述してくれる人がありませうから借畧致します。

労組も橋内工務所長(当時)の事務所兼り込みと共に、その牙城はくずれ、そのとばっちりを受けて私は遂に本局企画課に転勤を命ぜられてしまったのでありませう。

その橋内氏にはこの7月ビルマに出張中現地でノ週刊御世話になり、車で走り廻っている間に、一寸のきっかけから当時の誌が出て、官側の内幕や中ノ町労組退治の誌を聞きました。まさかラングーンで聞こうとは、人間と

は誠に奇しき宿命を持ったものです。

星移り、人も変わりましたが、当時の人達はみんな実に親切に、突然入ってきた私の如き君を待遇してくれました。

たまたま私は現在関西旅行の「つばめ」の車中におります。ちようど出張の前に感想文を書けとの御手紙でしたので、車中で原稿を纏めているわけで、ちようどこの附近で天竜川の堤防。流れが見え始めました。この流れを見る度に私の環境も私場も変わって行きますが、天竜川から出発した私の建設省での人生は、この大河を見る度に気分をよみがえらせてくれます。

思 / い / 出 / の / 記

早 田 英 夫

私が天竜川改修へたずさわることになったのは、今より7年前の昭和25年8月であつた。そしてその翌年7月北海道開発局へ転出するまで、約1年間はあつたが非常に変化に富んだ月日であつた。つたない筆ながらその思い出をたどつて見よう。当時中ノ町事務所は、新たに見返資金の予算がついて年度内に新居町地内道路、磐田市井通村地内道路および三ヶ野橋架設の工事を実施施行することになつたので、職員は全員その準備でござつた返つていた。こんなことで古い歴史を誇る中ノ町事務所は、狭隘だし不便だったので磐田市に新築し、従来の事務所は中ノ町出張所となつた。(当時浜松市の協力が乏しく磐田市の熱意が盛かつたことと、磐田市内の工事が多忙であつたため磐田へ事務所が決つたが、機械工場のある浜松市へ移ることが望ましかつた。)

事務所には原務に本間事務官、工務に吉田技官がおられ、天竜川には飯田に芦沢技官、中ノ町に板橋技官、国道改修には磐田に谷崎技官、新居に寺崎技官、国道補修に石川技官がそれぞれ出張所長として決ぐましい努力を続けられ、少い職員で大きな実績を残された。天竜川下流は又漲にわかれて流れ年々水害が多かつたので、本川を掘り出した後いずれも締切の計画であつて、東派川は戦時中に完成を見たが西派川は未着手であつた。これを25年度に実施することとなり、芦沢出張所^所担当のもとにノ数万立方メートルの締切堤防と護岸水制工事がきわめて短期間のうち何の事故もなくめでたく成功したこと、また従来沿岸民がそれぞれ治水期成同盟会をつくつて改修促進を計つていたが、これは工事施工上種々の障害をともなつていた。政松島岸站さんが奔走されて両岸を打つて一丸とした強力な期成同盟会が出来たことも忘れ

えない思い出である。

天竜川改修は立派な堤防が延々20数軒にわたり出来ていたが、上流からの流出土砂で河床は上り、計画流量1,000立方メートル毎秒を流下させるには河床掘削を徹底的にやって河積を増す必要があったが、その後天竜川総合開発計画が実施に移されて佐久間ダムは完成し、秋葉沖1.5メートルも目下建設中であり、これにより約60万キロの電力が創り出されると同時に洪水調節されることになったので、掘削の問題も軽減したことと思う。私が去った後ではあるが、上流事務所が中部地選管轄に一元化され、洪水予報等に至便となったことは喜ばしい。天竜川改修事務所は25年以來磐田工事事務所と名前は変えたが、今は渡辺所長のもとに技術の研鑽に余念なく、天竜の水と共に年々発展している。私もその栄ある事務所を存続したことを心より喜んでいる。

磐田工事時代の思い出

柿 徳 市

私が磐田の所長として宮崎県から赴任したのは昭和26年10月1日付けで、また六甲の所長として神戸へ転立ったのが全28年3月末であったから、磐田の所長として在任期間は僅かに1ヶ年半の短いものであった。

磐田工事では天竜川下流改修工事と国道1号線改良工事とを担当するのだと聞いたときは、どちらもわが国土木事業のうち最重点工事であるだけに、これは張り切れるとヤリガイを感じた。そして事実在任1ヶ年半を文字通り充実した日々を送ったことを今でも有難く感謝している。

天竜川は学生の頃より東海道線を上下するたびに、河床がググッと広く網状に乱流している特殊の要観に驚きの目を向けたものである。内務省に勤めるようになって長く砂防工事を専門とし、終戦後は爾九州の河川工事に従事した私にとって、天竜川のような土砂の動きの激しい河川の工事に取り組むことに異常な興味と関心を抱いたのも無理のない話であろう。

砂防工事によって山地に於ける土砂の生産流出をできるだけ防止又は調節して、なお河川区域までに流出した土砂はなるべく河床に堆積させずに、遠く海まで流送すべきだとするのが私のかねての持論である。

この私の主張をどうして天竜川の改修計画に生かしたらよいかと日夜頭を痛めたものである。だが、幸いに天竜川の明治初期に施行されたケレップ水制を研究するにおよんで、これが常水路の確保に非常な効果をあげている事

実をまのあたりに見て、私としては大いに悟る処があったのである。

この水制の構造は下部数層の粗礫礫床を重ね、これに表面を粗石張りしたものであるが、いろいろの欠点が見えるので、私はこれをコンクリート、ブロック張りにあらため、その中心にコンクリート、パイルを打ち込んで近代的な構造として、石岸飯田村地先に施工した。

天竜川のような環状的な扇状地河川の常水路固定方式について、当時私の考え方を取纏めたものが、27年版の中部地方建設局直轄技術研究報告に載っている。はなはだprimitiveな雑文であるが、この方面に関心のある諸君の御批判を願えればさいわいである。

また私は屢々時間の許す限り上流水源山地を歩いたのであるが、その結果次にのべる2つの調査報告を作成して、本局企画部に提出した。

「天竜川下流水系砂防調査報告」

「天竜川下流諸支川の多目的ダム建設計画について」

前者は右支気多川、全水窪川、および左支大千瀬川の各水系にたいして防災砂防計画を樹立したものであって、土石の調節を主目的とする。元来この砂防計画は予算的に独立したものでなく、既成立の天竜川上流水系の直轄砂防計画に追加せんとしたものであるが、本意のいれる処とならず、未だに実現を見ないことは、下流河床の堆積状況とてらし合わせまことに遺憾のいたりで、いつの日かこれが実現を願ってやまぬものである。

後者は下流改修区域の洪水流量にたいしてもっとも影響の大きな下流区域（すなわち佐久間ダムを境界としてこれより下流の区域）約1,000平方キロにおよぶ流域面積の洪水流量を調節するため、気多川、水窪川および大千瀬川等の下流大支川にたいして、それぞれ多目的ダムを計画し、あわせて発電に利用せんとするものである。

いわゆる既定の天竜川総合開発計画は本川筋のダムを主としており、これにたいしてこの計画はこれまで全く等閑に付されていた下流地区大支川の治水利水をネライとしたものである。なおこの多目的ダム計画についてはいろいろと議論の余地が多いこと勿論で、今後大いに調査研究せらるべきものと確信する。私はこれによって識者の関心を喚起できればと考へて投じた一石に外ならぬ積りである。

以上の両報告ともに踏査に止まったことはまことに遺憾至極で、後任の方が喉を見てこれらの企画を太くかつ強く推進して載せ、これが実現に努力して下さるならば、このうれいことではない。なおこの外にも太田川改修区域の延長や既設工事の改良計画について、いろいろと調査を進めたので

あるが、これは中小河川改良工事として採り上げられ28年度から発足した
こと、思う。

天竜川改修工事のうち、私が直接関係した工事は、左岸で岩田築堤、掛塚
下流築堤と護岸水制、右岸で竜池築堤、中野町築堤と護岸水制、西派川締切
の築工事（水門）、和田築堤と護岸水制、飯田水制、芳川築堤等である。中
野町地先では、用地問題で長年モメていた醤油工場を曲りなりにも解決した
ことが思い出の1つとなっている。

最後に、私の在任期間中はこれという洪水もなかったのも、上述した新型
水閘についてその効果を測定する機会がなかったことが心残りとなっている。

以上、求められるまいに、拙い筆を綴ったのがこのような雑文となりました。

最後に天竜川改修工事のすみやかな完成と現職員御一同の健康を祈ってや
みません。

中ノ町へ来た頃のこと

板橋 武雄

昭和23年7月10日運輸省が設置されてから1年後の昭和24年6月1
日に運輸省名古屋地方工事部が廃止され、同時に中部地方建設局に合併され
た。当時私達は建設省名古屋地方工事部の出先機関である静岡支部掛塚工事区
に勤務していた関係から浜松を希望した14名が現在の磐田工事々務所の前
身である浜松工事々務所に勤務管えになり、他の人達は合併を機会にそれを
れ郷里に近い勤務地に希望が入れられて静岡、豊橋、名古屋等に転勤したの
であった。私が来た当時の浜松工事々務所は中ノ町にあって明治時代の分教
場さながらの建物で古松木にバラ線めぐらした柵や門の入口いっぱいにし
たれ柳が垂れていて藤棚が特に目を引き、古色蒼然たるものだった。正面玄
關の廊下には「靖観化物賣押売一切断」と書いた板切れが掲示してあり、左
壁の中程には小さな古びた度付窓があったりして、天竜川の古い歴史を想わ
せるのに十分な面影を感じさせた。当時の事務所長は現任企画部長の奥田秋
次氏で事務主任に本間茂氏、技術主任に吉田吉秋氏がおられた。事務室と工
務室に別れていて工務は工務主任といわないで技術主任と呼んでいた。

其の当時は芳竹組合運動が特別に盛んで、工務室は組合事務所かと思われる
程で合併先総組の中でも佐久間君、柴田君、寺島君の3君は既に幹部活動に
参加していて、組合の集会には必ず参加して下さい。人を呼ぶのに呼捨てや

〇〇君はいけない、必ず〇〇さんと呼んで下さい。という具合でまずこの
組合のおきてを教えられ上司の命令や天竜川の勉強よりも組合からの注文の
方が多く、たちまち彼所の生活は牧場の羊のようにおとなしくなって仕事が
手につかなかった。

掛塚工事区から当所へ転勤して来た人達は私の外に大石実、水塚賢三、佐
原由平、井柳光明、大塚昭司、三宅実、西岡武雄、村田新吉、高橋義雄、寺
島房男、柴田実、佐久間克己、大石悦子の諸君であった。浜松工事区から来
た人達は平岡三郎、森田友吉、小泉きみ、新野留吉、杉浦忍司、宮地伸三郎、
浅川正夫、徳田定子の諸君でこの人達は名古屋工事部の廃止と同時に別の官
舎部浜松官舎出張所と改称され、それから後に当所へ転勤して来たので私達
より遅れて来た筈だった。外に、小泉良知、石川鉦一、山崎尊、伊藤可一、
大木和一の諸氏は元海軍施設部元運輸建設本部等において、当所で再会した
人達であった。

終戦後の世帯の最も悪かった頃から時は流れて磐田工事々務所に勤務する
様になった当時の推移を簡単に記録したい。終戦直後の昭和20年8月28
日に運輸省内に運輸建設本部が設けられ旧海軍施設部隊のわれわれがそれに
充員され戦争復旧工事に従事することになった。そして浜松工務部の戦争復
旧工事に参加した部隊は岡崎206部隊（坂橋、柴田）、湯谷306部隊（
大石、村田）、原ノ谷5013部隊（伊藤、高橋）、大井部隊（三宅、西岡）、
新居部隊の5つでそのうちでも湯谷組の306部隊が一番作業員を多く連れて
来た。浜松市中が未だ街路に電線が散乱していて、爆弾の大穴が方々にあ
り焼野ヶ原のまゝであった。9月1日に私と加藤春男君の2人が焼死時撃の
跡の生々しい浜松工務部に着き、焼け残った施設所の1室を借りてまず人夫
の募集から始めた。浅川正夫君が浜松出身者であったので地理に限るく大い
に助けられた事を思い出す。其のうち各隊から集って来て20名の犬世帯と
なった。

われわれ土木屋の仕事は工務部構内の焼跡の片付け作業でドラム缶の野天
風呂に浴しながら礫城のこわれや鉄屑、コンクリート、レンガ等の屑を自動
車で搬出して爆弾の穴埋めから始まり、敷地が片づくに従って建築屋の仕事
に移ってゆき、やがて土木屋が不用になった。丁度その頃運輸省建設本部は
当時の食糧増産の目的から農地開発工事に主力が向けられ昭和21年8月1
日に私達土木屋は掛塚工事場に移動して再び設営を始めた。

この仕事は農林省の外郭団体である農地開発官団の委託工事で天竜川東派
川の締切後の河原に置工して耕地化する農地開発工事であった。此の時の先

私も私と加藤春男君で続いて、村田新吉君、三宅実君、永塚三吾君等が到着し、今とは比較にならないがこの頃には珍しいドラクェンベルやブルトナー、ダンプトラックそれに機関車等を動員した機械化施工で鬼に角簀を張り切ったものだった。其の間にも西浜川、芳川村金折地先の築堤（昭和20/5）後の農地復旧工事が昭和22年10月頃に始まり、村田新吉君、井柳九朗君、大場昭司君、大橋保天君等がキャリオール、ブルトナーを動かして良く頑張ったものだった。

思えば今から10年前の若さである。昭和24年6月に建設省統一合併が行なわれ浜松工事々務所への合流は全員仕事の意欲に燃えて参集したものであった。中ノ町へ来てみたら組合運動が事務所の全貌であるかの様に見えて一部組合幹部の中には宗教的、否病的にも思える人達がいて布教するので先発の若い連中は純情で教えられるまゝに、やらねばならぬ仕事の様に心得て奮闘したのも無理からぬ若さだった。血の気の多い若者達はじっと見つめておれなかったのだろう。彼等は流れに乗って大海に出て見ようと思ったに違いない。

事務所の仕事は閉塞状態にまで麻痺してしまっていた。奥田所長が所長室に差詰にされたのもこの時で初めはどうなることかと心配したが良く長時間急ぎの行を続けられたものだと感服した。それから終日も経ずして行政整理が行なわれ過激派の連中が退散し、やがて始まる見込資金の道路の設計に移って行った。そして奥田所長自身徹夜で仕事をしている姿を所長室に見受けられなくなり、その頃には皆んな仕事に向き直って暗い工務室で残業する日が終日も続いた。

昭和25年9月飯田工事々務所と改称され急に忙しくなって三ヶ野と磐田一宮地先に改良工事が始まり、河川工事も西浜川の隣切工事を筆頭に汚泥を望み全所員は明るく立ち直り仕事に奮励する様になった。

— 天竜の思い出

平 鳳 岳

昭和26年3月15日付総令にて芦沢さんのあとをうけて、岡崎工事から飯田出張所長として赴任した。

私は昭和13年、中瀬災害の応援に2ヶ月位従事し、また昭和15年6月から全17年4月まで、天竜飛行場の建設に従事していた関係で、河口附近の深淺測量から東浜川の調査で、天竜川とは前々から深く因縁づけられてい

た。とくに中瀬の災害応急復旧工事で、初め1週間ばかりは雨のシボ降る中を文字通りの徹夜作業だった。やがて設計もたてられ、はじめて工事らしい製造にのって、私は夜間勤務となり、全員が並々ならぬ苦勞したものだ。人夫を点検して作業位置につかせ、1時間ばかりたつて行ってみると、あちらの隅から、こちらの隅まで油を売る人夫が多くて工程のあがらないこと甚だしい。照明装置の配線の一部が昼間いつの間にか切断されている。定工夫の1人—この方は戦争直前比呂に派遣され、不帰の人となった—が見当たらない。よくさがすと地元の人夫に1日獲土運車の下を被せられて身動きの出来ない有様等々常識はずれの悪戯が各所に起った。これも災害と時を同じくして、この出張所に起った利害問題から地元民の反感が大きかった事を物語り、したかつて、工事もことのほかやりにくかった。

こうした悪い出を持つ私が飯田出張所に着任してみると中瀬の災害で、飛行場で、一箱に苦勞を重ねた面々が大ぜいいたので心強かった。

「子供さんは大きくなったろうな—」

「もう、嫁もらいまして—」

「この、現場で働いています。」

あ、そうだ、あれからもう13年たつかと頭に手をやって、しわの深いのに気付いた。私が赴任した時は、西浜川の隣切工事も終り、おもな工事は隣切箇所の溝上工事、それより上流の半場地先国鉄までの築堤工事と、この築堤によって生じる附帯工事、すなわち半場水門、半場陸閘、半場用水樋管継尾、飯田樋管、砂利採取施設撤去と飯田地先の護岸、掘固、水制、それに河崎村地先の掛塚橋から上流芳川村地先まで約2kmの築堤工事だった。河崎地先の築堤工事はラダーエキスカの堀削掘込スクリン機関車運搬による単なる築堤工事だったが、半場地先の築堤は数多くの附帯工事が介在し、野水場、木材会社が用地いっぱい立ちふさがり、物件をさけるためのコンフリート擁壁があり、工事の施工には悪条件の連続で、こんな工事は前後を通じてはじめてのことだった。その上界坊基準監督署、職業安定所の要求、浜松の新聞記者のユスリ、古鉄泥棒の侵入と悩みは多かった。

時々仕事が終わってから、定人夫まで集って会食を催した。仕事の話から世間話、家庭の話に花を咲かせ、黒田節の迷調子も飛び出す愉快さ、この会食には必ず出る手料理の鳥めしの味も忘れ得ぬ一つである。

私は赴任早々の思い出の中瀬に行った。瀟々たる堤防、大きなアロップ水制で改修され、昔の面影はなかった。たゞ対岸の山々と、その麓に白線を引いて走る堤道が昔そのままの姿で私の目に映じた。

少くも、3.4年は天竜の荒川と取組んでよい仕事をと意気込んでいたのに、その年の11月、板橋さんに引継いで元の岡崎工事に帰ることになり多くの工事を、未完にして、天竜と別れた私の心は寂しかった。

天竜川築堤工事に活躍した機械

山崎 章

天竜川は昭和2年に国の直轄河川となり改修工事が始められたのであるが、改修工事の中築堤の大部分は40噸蒸気掘削機と20噸蒸気機関車は共に大正年代の初期に購入された機械で、関東の利根川支流渡良瀬川の改修工事に使用し、同所の築堤工事に於いても画期的な成果を上げたものと想像されるのである。昭和3年、天竜川改修工事が着手されると共にこの両機械がはるばると渡良瀬川から天竜川に運ばれ、磐田郡二俣町西殿島より河口に至る天竜川改修地区の築堤工事にすばらしい偉力を発揮して、今日まで多大の成果を収めたのである。この両機械の運転、整備に当った人達は今でも健在で当時を懐古しては、楽しかった事、苦しかった事の思い出が語り草となっている。したがって両機械は年令的には30才を越え、昭和29年をもって運転を終了するまで40才になんなんとしているのであるが、建設機械の寿命としても正に驚異的といわざるを得まい。天竜川のあるかぎりカー益の切当者といえるであろう。とはいえ原子力を平和的エネルギーに使用する時代とあっては、蒸気機関を原動力とするこの両機械は、いかにも古い機械の中に入らざるを得ない。天竜川の築堤も昭和29年掛塚地区の河口延長をもってほぼ終了した今日では、その任務を解き近代的なディーゼルショベルに河床掘削の仕事ゆずり、遊休機械として運転を休止する状態となった。その間天竜川においても遂次取扱の簡便なディーゼル機関を原動力とする建設機械が多数使用されるようになり、今日ではドラッグショベル、ブルドーザー、ガンプロラックが天竜川改修工事の主要な機械となっている。蒸気機関のこの両機械は作業開始前2時間も石炭を炊きボイラーの蒸気圧力を100~120ポンドに上げる苦勞が大変であった。機関手、全助手が昼い朝を早出して、天竜川の河風に鼻水をす、りながら石炭粉にまみれて黙々と作業に励んだ事が昨日の様に思い出されて来る。夏の蒸気機関室も正に鋭人的な暑さであった。一方燃料費は戦後の石炭価格が戦前の約300倍に比べてディーゼル油である軽油は約1000倍で、燃料費の経済的観点からも蒸気機関の機械が姿を消して行くのは自然の成行きであろう。

天竜川改修工事を振り返って、この両機械の思い出を語るとなれば色々あるが、昭和2年7月の出水をオノにあげなければならぬ。その時の気象状況はくわしくは判らないが、夏の入梅季節における長雨のように想像される。夜来の風雨で増水した天竜川は、深名町中瀬上島附近で堤防をまさに破らんとして、堤防の2/3を削り取られる惨状であった。この時掘削築堤工事中の両機械は、堤内の高所に退避したとはいえ役に立たず、一夜にして水没横倒しとなり、減水後もその姿、見えず、わずかに煙突の先が出てこの下に掘削機および機関車ありと敬えられるほどだった。現場の工事、工作の私工手達により懸命に掘出し泥を落して錆をはらい動かすまでに大変な手入れをしたが、機械が天竜の河原で再びホーツと気筒を鳴らしてガツゴトと動き出した時には、関係者一同は大いに感激したものであったという。掘削機を土の中から人間が掘り出したというのだから大変な災害だった事だろう。天竜川治水史の思い出としてこの掘削機および機関車の実際の能力を参考のために昭和28年の実績からひらってみることにしよう。

昭和28年後における計画は、天竜川左岸磐田郡掛塚町(現在竜洋町)の堤防を河口に向かって786米延長し、土量75,600m³の築堤工事であって設計金額17,000,000円であった。

昭和28年後は暫定予算のため新規工事であった。この工事も、承認が遅れてなかなか思うようにならず、それまで右岸にあった両機械の移動、修理の困難な仕事から始めて大変苦勞したように思っている。

月別	計画土量 m ³	実出土量 m ³	其 他
8月	15,000	0	27年度護岸床掘 5,680 m ³
9月	15,000	5,750	28年度掛塚地先護水制
10月	15,000	13,004	人力運搬 1,047 m ³
11月	15,000	14,320	28年度全上
12月	15,600	17,165	ブルドーザー運搬 1,220 m ³
1月		12,650	28年度築堤工事
2月		4,538	運搬路 1,775 m ³
計	75,600	67,427	
最終計	75,600	73,599	67,427 m ³ + 5,680 m ³ + 1,047 m ³ + 1,220 m ³ - 1,775 m ³

9月7日運搬開始以来の稼働実態は次の通りである。

40本掘削機及20台機関車実績 (昭和28年度)

月	日数	工量 m ³	掘削機	
			掘削機	機関車
9	13	5,750	39-20	40-25
10	20	13,004	73-50	67-40
11	25	14,320	78-0	76-00
12	26	17,165	102-50	100-40
1	21	12,650	85-40	86-20
2	10	4,538	29-00	33-20
計	115	67,427		

使用燃料 t		使用油類 t		時価当工量 m ³
掘削機	機関車	掘削機	機関車	
9.8	9.0	63	77	146
19.4	18.2	100	108	176
25.1	28.5	89	96	183
35.7	32.6	99	128	166
24.5	22.2	92	109	147
8.0	14	45	64	156
122.6	117.8	438	582	

240.3 107.0

油類はマシン油/ミリンター油

() 内数字は設計単価

/ m ³ 当 単 価 円		合 計 単 価
掘削機	機関車	
20.82	30.31	51.13
13.14	20.61	33.75
16.90	27.15	44.05
23.04	28.12	51.16
24.00	27.87	51.87
25.47	33.03	58.50
(29.00)	(36.00)	(65.00)
19.98	26.44	46.42

右岸浜る郎飯田村(現在浜松市)地先の築堤工事を昭和27年度に終了した西機を左岸に移動して、修理整備を実施する仕事もなかほか大なる仕事で工作出張所の8噸吊シャーレフ2番が大いに活躍したのもこの時である。暫定予算のため新掘工事の承認が遅れて4、5、6月は設計が出ず、準備工としての取壊、資材の運搬が全く出来な状態であった。工事の行われる事を知りながら手をつける事が出来ず、だからといってたゞ黙っているわけにもいかず、天竜川改修費の運搬船取壊費をもって稼働を開始したのであるが、掘削機および機関車のボイラーは修理のため工作出張所へ運び車台その他は直接現場へ持込んだのである。ボイラーの修理には約2ヶ月を要し、最後の水压試験も200ポンドで完全な状態になるまでチューブの補付

を数回やり、6月の炎天下に苦勞をなめたものであった。一切の修理を完了して試運転を行い稼働の態勢をとったのが掘削機6月16日機関車9月7日、分解稼働から組立運転までの費用は407,000円、機関車25%, 800円である。

28年度中の本取壊の稼働後の修理は特に大きなものはなかった。移動組立の間も完全に整備を実施したので、蒸気機関の有難いことには相白期間は大丈夫と自信を持って工事にかかったわけである。たゞ摩耗しやすいブレーキプロップの取換、シャッフルピンの取換、バケット土砂流の帯状修理程度である。土運車土砂箱は、木敷のため次から次へと修理を実施しなければならなかった。土砂箱修理用木材の購入だけで500,000円を越えている。土運車は25台運送2列車構成予備6台計31台であった。

28年度の築堤工事をこのように検討してみると、この西機は施工単価もさして悪くなく、修理整備費も莫大というほどの事でもない。たゞ土量3万立方メートル以下の工事には準備工的設備その他がやゝ大がかりとなり、不経済となる事は争えぬ事である。工事の性質内容により掘削機土量大ならば大なるほど、その性能を大に發揮したといえるであろう。

28年の工事を終了して29年度もさらに堤防延長工事にこの西機が石炭の黒煙をあげながらポーと響の様な気笛を吹鳴して天竜の清流を見ながら働いたのである。奇る年取とはいえず大した衰えも見せずに働いたのである。しかし時代の流れはもはやこの機を必要とせず、最新型の高性能なものがどしどし運出してようやくその存在を忘れられたのである。昭和31年にはこの西機最後の飾るにふさわしく、中部地方建設局長より奨励の機械表彰を受け、熊田工事事務所のこの西機と共に天竜川改修に苦勞した人々にとって喜びを新たにし永し方を振り返ったのであった。

昭和32年3月この掘削機はすでに腐蝕として処理者となり、機関車のみが遊休機械として今は工作出張所の一角に佇んでいる。やがて姿を消してわれわれの目から永遠に忘れられるのも何時の日かであろうか。今あらためてその足跡を此処に載せて思いを新にしてみよう。

功 記

建設省中部地方建設局長 立神太郎

昭和三十一年三月

よってここにその功を記録する

(一)四拾陸蒸気機関車(天力五五機)
(二)拾陸蒸気機関車(天力五五機)
五高機は我國治水工事の新しい時代を築き上げてより以上今日に至るまで四十有五年の長きに亘り取壊整備のたゆまざる努力と犠牲により河川工事の至宝として豊後川及天竜川西改修工事に活躍しその偉大なる機動力を以て工事に完成に貢献したところ誠に大なるものがある

わたくしと天竜川

石川 敏 夫

わたくしはじめて天竜川とつながりをもったのは、本局工務課にいた昭和3年11月、石野さんと一緒に太田川、辰野谷川の視察出張事務所（現中ノ町出張所の寮）に泊まった時である。翌朝事務所運物を見て大河川の工事事務所にしては玄めかしく思い、入口右手に藤棚とワプラの太木が特に目につき、玄關を入ると室に別れ、左側の白壁の少し高いところに受付の小窓があった。左が庶務室が工務の室で庶務主任は本間さん工務主任は吉田さんでした。

所長室は別棟で事務所の一しろにあり、当時河中所長は病氣静養中で金子所長が菊川と新藤との争で、所長室に入ると室の右側に南向きにテーブルが置かれ縁のラシャ張りの穴で日本地図（中部地方とおもう）がうしろに掛けられ、私用の名を朱書した黒塗りの小さな几が掲示されていたのを憶えている。

その翌4年5月本局の歸りに事務所立寄り、吉田さんの案内で主として国道1流部の右岸大平川の締切ヶ所、13年6月の中瀬災害ヶ所、天竜川でのコンクリートブロッフ水制（オノ予）を見、左岸で旧野村地先の磐田用水の取入口敷岸ケレツ水制を見て、旧野村地先の磐田原の各地沿いの道路を南下し、竹藪の道においかばさってトンネルの横になっていた、旧野村地先でドシャブリの雨にふい、生憎自動車のパンクで中野さんに大へん迷惑をかけた。

昭和5年見返資金で国道の改良工事がはじまり、三ヶ野、磐田、新居の現場を見、天竜川右岸西沢川締切工事を担当の飯田出張所で戸沢さん、永田さんに現場を案内していただき、出張所の壁に締切の構造図が何枚も張られ色塗されていたのが特に印象に残っている。

昭和5年3月下旬に工務部長より磐田へ転勤の命令があった時に前に多少でも川を見る機会もあり全然未知のところとちがい、沼澤でお世話になった水谷さん、庶務課に本局でテニスの相手を小沢さんがおられたので非常に心強かった。当時の本局の工務課は天竜川と特に関係のある方が多く、石野さん、鈴木(清)さん、小栗(忠)さん、戸沢さん、吉田さんの名をあげる事が出来る。書籍を持ちしても逆に教えていただく事の方が多かった。

昭和5年4月8日に松本さんのあとの池田村に引越してはじめて大河川のほとりに住み今までの都会生活と変わった生活環境に戸きどいました。日に一度は天竜川の堤防に出たもので、今年7月の出水には家族が不安がるので苦労しました。平時の天竜とうって反りぬかない天竜も濁水濁々対岸まで無数の流木が流下するのを見たのもはじめてのことでした。

今年9月の台風13号の来襲の際はラジオは停電で気象状況は入手不能、幸うじて無用車のラジオで刻々の状況を聞きつゝ警戒解除となり、森本さんの自動車で所長とともに掛塚、中ノ町出張所へと暗やみの中を出発し着工間もない掛塚堤の現場を見、掛塚橋を渡って中ノ町出張所へ廻って帰宅したが、翌日わたくしたちの自動車が来るとすぐ左岸寄りの橋脚が沈下し翌日より通行止になったが、一瞬の差で九死に一生を得たと聞き冷汗を流した。

昭和9年2月に愛知海岸工事部の応募で半田出張所にゆき、発熱、胃の手術を受けるため（現地では入院不能）帰郷しその上半を取りさることになったが、これはわたくしにとって天竜川とともに終生忘れ得ぬことである。

当時所長から終戦後まよめられていない昔の工務報告の新版をまよめてはとのお話で、改修当初からの工務報告にも目をおす機会にめぐまれ終戦後のオノ号としてささやかではあるが昭和年度の「実績」をまよめ、次いで天竜川の治水史に關係してオノ次改修当初より最近までを出来るだけまよめることになりましたが、未見のまま茨城出張所に転出しました。

この度30周年記念の思い出集をだすことになり、諸先輩よりの原稿をまよめることになったが、これまたわたくしにとっては思い出が1つ増えたことになる。

天竜川は昔々のおもかげを日々に受けている。わたくしの知っているだけでも昭和5年を境に工事の面では護岸に水制にコンクリートブロッフをとり入れた新工法の採用、昭和9年には建設機械（ドラブショベル2台、クセダンプ台）による沿岸民待望の河床掘削に着工、30年には竹山建設局を迎えて中ノ町地先で建設機械自衛隊機出動しての総合水防講習、31年には総合関係事業の一環として東洋一を誇る佐久間ダム completion の完成、32年11月6日下流秋葉ダム野水開始など。

すべての人々に愛される天竜川とするのが、わたくしたちの使命である。このために目立たぬ乍らも工事関係者のうちに加えられていることを誇りと思っている。

今日も天竜川は秋の結りをたたくて平穏なせせらぎを奏でている。

現場や大いに語る

(とき) 昭和32年11月2日 (ところ) 中ノ町出張所兼

出席者 現場や 永田金太郎、関口肇次郎、成瀬 清重、渡瀬 弁一、
 小栗 定吉、鈴木 政吉、立石 幸平、栗田 徳治、
 香山 重雄、小林 政吉、岡安 善蔵、伊藤桂次郎、
 良知 一夫、大庭幸太郎、新藤 良一、
 元現場や 市川代次郎、杉崎 藏八、甘政 権吉、
 司 会 石川 敏夫、藤田 平司、 (敬称略、順不同)

石川「本日はごくろうさまでした。さて天竜川改修工事は起工以来30周年を迎えることになりました。つきましては現場のカー線で活躍された皆様には是非この機会に思い出を語りあい、これを記念にのこしたいと思えますからよろしく御願ひ致します。」

藤田「それでは私が話の端出し役となって皆様にお聞きいたします。さて起工当初の河輪見張所はどこに建てられましたか」

永田「たしか昭和2年秋も深かった頃と思います。新井さんと永山さんが立寄って掛塚橋から200m程下流旧堤の上に乗りました。それで四隅に丸太を打ってかわれこれに土台をボルト締めとしました。その頃の旧堤は松の木(80~100年)がうっそうと湧りさびしいところで流がおりました。鉄釘で撃ちとめたのを見ましたが石にかついたら尾を引きずるような大物でした」

藤田「その頃機械工場はできておったのですか」

小林「私は昭和2年10月頃岐阜の機械工場から掘削機、機関車の組立に派遣された内の1人ですが旧掛塚橋の北側にも機械工場は地内し中でありました」

藤田「よく話にききましたがお林さんたちがこられたのですが大へん当時は盛大のようにききましたか」

伊藤「工場の前に雑貨屋で三件という商店があり、ここに岐阜の取工さんが泊り早気がよかったですね。夜ともなれば酒をのんではさわぎ、けんかなどもあって地元ではかって見られなかった盛況でした」

藤田「成瀬さんはいつ頃から出られましたか」

市川「岡安「清重さんは、河輪村の樵童青年で、起工のときから出られ、たしか19才であったと思います」

成瀬永田「私等はよく執系かつぎをやったが、当時30kg執系は女人をかついだものでした。なかなかこたえましたね」

成瀬「ある時出役しておった人夫が、家で急死したらあまり改修で執系をかつぎすぎて過労で死んだというような話を後から聞いたことがありました」

永田「地元の百姓さんや掛塚、五島方面からでました。常人夫が1円10分、1円20分、人夫が平均の30分でした」

岡安永田「運転がはじまると、見物人が毎日浜松、中ノ町、笠井、中泉方面から弁当持で大勢集ってききましたね」

藤田「河輪機械掘削機ほどの辺から仕事にかかりました」

市川「旧埋々内の買収地の掘削から始め松土は新堤敷に土捨し昭和3年2月より翌4年8月まで運転をしました」

藤田「河輪地先の買収地跡に聖地があったように聞いたが」

市川「それは地元関係者が出て全部処置したから、別に支障はありませんで

永田「河輪地先の移転で、たしか弥助地先と思ったが1軒移転をこぼみ最後まで「がんばり掘削が家の近くまで進んでから移転した人があって、新堤が出来てしまひ引越にそれを登ったり降りたり馬鹿な人もありました」

市川「昭和4年8月一まず河輪を終り対岸掛塚に工事が始められそのとき機械類の移動を甲工業船2艘をもって運搬し附属共500円で運搬されたようにききました」

永田「その時の甲工業船は県池田工場所から借りたもので、七蔵工の池にあったものです」

永田「掛塚町の工事は、河川敷機械掘削機1600号より上流へ土運搬し新堤または旧堤松葉で堤防をつくったが、下流土取附近河川敷に橋永飛行場(民間)があって飛行機がよく墜落したものでした」

小栗「掛塚の海岸で松竹だったか天草四郎という活動写真?のロケーションがありました」

藤田「小栗さんはこの頃出られたときいたが、掛塚の現場では何を担当されました」

小栗「私は牛蔵(人力掘削機)を貸持ちました袖系掘削機に牛蔵組合ができて朝鮮牛が6頭くらい出役して6分種工運車2両連結を牽引しました」

藤田「森五郎くんという方がおりましたね、仕手が終って中車に乗り途中
 片まっておっても半は逆々の軒でびたりととまる積込酒のみの人だとき
 いたが力もありましたね。満載の6分トロを1人でデコ棒をかつき捨土
 したのをよく見つけたが又人カいやさ人カぐらいあった人でしたね」
 岡安「その種の人夫は又食弁当を持ってきましたよ、それも大きなものでし
 た」

永田「人夫がよくいってました。自分が仕事をするのではなくこの弁当が仕
 事をするんだと」

藤田「祝祭時間が早朝から夕刻まで永かったですね」
 鈴木(次)「冬は朝6時30分〜夕方4時30分、夏は朝5時30分〜夕方5時
 00分まで仕事をやりました。休憩は今と変わらず午前、午後10分昼休み
 40分で時間は厳格に実施しました」

岡安「早出の点火は大変でした。朝3時に家を出て、暗やみで点火し各
 部の手入れお茶沸し等いとがしく、運転中^{おま}お水などで炭がらなどが床
 に少しでもこぼれておれば機関手にどやされたもので、ほんとうに休む
 なまもありませんでした」

藤田「掛塚堤防延長工事を終りとして表彰され、産品となった機関機、機関
 車は下流で奇から活躍した機軸で、岡口さんなど最後まで乗りきったの
 で思い出されることでしょう、あの機軸で運転回数ほどのくらいでまし
 た」

鈴木「改修では回成歩増の小間割をやったとき最高25回ぐらいいました、
 私種取場で差違水あったが、1回増す毎に10変〜12変が加算された
 ものです」

岡口「掛塚で機関車の煙突から出る炭がら^{おま}争(火争にいたらず消止めた)
 が又回あったが担当者から堤防上に担桶に水を入れ、ハンドポンプを用
 意し、なお人取付近では石炭補給はやめろと注意されたことがあります」

市川「やはり掛塚で機関車が見えないのでおかしいなあと悪たら転覆して
 いたことがありました。天竜川で運転中の転覆ははじめてでした」

藤田「掛塚はそれくらいにして、次に志間にとびます。芳川橋副についてな
 にか話がありますか」

液瀬「私がおりました土取場は湿地帯でありました。3m³土運車に人力で積
 込みをなし20も機関車で運搬しました。1人で1日12〜15箱積込
 んだ人夫がおりました。土置は粘土で円匙を用いました。たうじな人
 夫は始業前夜中から出て5箱ぐらい盛ってしまっただもりました」

市川「私は志間で掛塚車に乗りましたが、早出は家(河野村)を2時頃出て
 志間に橋がぶかったので鶴見をまわり志間まで歩いたものです」

藤田「志間といえば私が来た年(昭和9年)だと思いましたが池があり相葉
 さんが大将で魚取りをやり大収穫があったことがありますね」

永田「あのときは河川敷(買取跡)の池を仕事の間にかいぼりをやってほ
 しあげ、うなぎが釣れ^{おま}外に雑魚が同じぐらい取れたと思います」

藤田「また池は対岸にとびますが、ディーゼル機関車がはじめて掛塚で運転
 され、最初の乗組員は岡安さんと聞いたが」

岡安「私と高橋さんと乗組員となったが、これは日本に4台輸入された1つ
 で三井物産名古屋支店から納められたものです。2.5tありまして最初
 はよくわからず(修理もいらない)修理部品を入手するまで約1ヶ月か
 かった。6分トロを40〜45台(勾配で差がある)牽引しましたが、
 1m³積込製土運車となって20〜25両牽引しました。1m³積込土運車
 1両125円で買ったようにききました」

藤田「このディーゼル機関車が掛塚で運転され、そのあと西橋地先の東派川
 解切当初の土運搬に用いられたのですね」

大庭「私はその西橋地先の仕事をやりました。主に掛塚におりましたが、1
 m³積込製土運車に人力で積込み、このときたしか1箱4変でありました。
 1人で25箱〜30箱積込んだ人夫が腕の達者な人でありました」

藤田「昭和9年頃ストップされました昇給は1変〜3変で3変の人を人
 送するのに工場主任が事務所に集まりねりあったものです。今でやる出
 張新長会議ですね」

立石「その頃私等がはく地下足袋は1円〜1.20円でありました」

市川「あの当時は事務所主任が現場へ視察にくるといえば現場の整とん違な
 おし軍刈りで大へんなものでしたね」

岡安「しかし主任が大名ゆれば定工夫、機関手は殿様ぐらいに人夫に思われ
 たものです。冬の寒い時でも、ほおかばりをすれば厚値引すると警告さ
 れたもので、それはそれはたいしたものでしたよ」

藤田「さて護岸についての話をうかがいたいと思います。下流で働いた皆さ
 んは大へん杭打音頭がうまいものですね。あの歌は天竜川にもとからあ
 ったものですか、

一同「どこにもある歌ですよ、柳網にも人づつ根取に1〜2人真矢持が1人
 で計15人ぐらいで杭打をやりました。志間地先で70本余も1日に打
 ったこともあります(2.70m形丸太)」

永田成親「網敷市設のときペンチを水中に落とし、いくらさがしてもないので目撃を食って来たこともありましたが、警察は一番だいにさせられました」

辻石「水中作業が多かったがゴム長靴が高くて置えないので水虫になったのにはなやみました。足先がまるでにんじんのようになって赤くふくれあがってしまったこともありますね」

藤田「あまり下流方面ばかりの話になりましたが、上流にどなたかおられますか」

杉崎「私と種さんがおりましたが、あまり話もありませんね。中瀬の災害ぐらいなものですよ」

永田「あの災害で機関車のすがたがなくなりさがすのにこまりましたが、そのとき種さんが二俣方面の見通しをおぼえておったので、その位置ですぐ発見されました。河原の砂利面からさ米下に車面が横より少し上向きかげんに横倒しとなっていました」

岡安関口「実際洪水ともなれば機械は川原にあるから突はおちおち壊れなかった。雨降りの模様で途中で起きて現場に行き点火し、出水までに待避できるよう蒸気を上げねばならないので洪水が一番苦手でしたね」

藤田「河輪地先で水出となり堤削撤の待避に現場も見張も全員で作業したことがありましたね」

関口「あのときラダーを上げる蒸気が足りなくて、目の前まで崩壊してやっとならうにげたらその筋がすぐ崩れ危機一発でした」

藤田「鈴木政吉さんは正しく壘西の現場へ行かれたこともありましたがね」

鈴木「私は14~15年頃行きました。ぶちをやりましたがあの頃は人夫が少く乗人はおらさず機関車に乗りました。石炭が悪く古松木をこまかくして燃料としたことがあります」

岡安「あのとき私も壘西を知っておりますが、あの仮橋は桁がほそく高さもあって、橋にふれ縫にふれ、おまけに落下するし、橋の上でカーブがあって橋桁がさすくらいでしたかね、あれは人トコの仮橋で鈴木さんは茶人だから平気で乗りまわしましたが、自分等ではとてもこわくて乗れないですね。それで天竜の仮橋はよく流されたものです。洪水ともなればトコ箱や杭木が上流の現場よりふわり、ふわりと流れてきたものです」

石川「どなたか厂代主任さんについて話していただけますか」

香山「私は天竜川の最初のトラップ（シボレーノオ履）を運転しておりましたが、西尾主任の移転のときノ3回車運搬しました。そのうち番番が何

回だったかわずれましたが多かったのには驚きました」

永田「私も西尾主任の宅に大掃除に行つたとき、古い新聞（何年も前のもの）が一目でわかるように整理されてあったのには驚きました」

大庭「永山さんはよく鉄砲撃をやりました」あるとき舟を私がこいで河口で入きな水鳥を撃ったことがあり、それで工場全員がうどんを喰べたことがあります。技師も好きでした」

市川「永山さんは人を使うに上手でしたね。金井さんは御酒がすきで、よい酔いの量はもたないような人でした」

関口「中瀬の鈴木さんは現場へ出られても決して後を向かへなかった人です」

坂本「私は14年5月蒲川から天竜川にきましたが大代から3代の乗用車（ダッチ）に乗り西尾さんを少しと仁科さんを乗せました。別にこれという話もありませんが天竜が火不金めとは蒲川、右岸国道でありましたのでなかなかいいぞがしいものでした」

石川「なにかほかに面白い話でもありませんか」

一同「現場ではよくおかうなぎを喰べました。旧堤強削で冬ともなればまじし、しまへび等たくさんとれたものです」

藤田「昭和19~20年頃の話をだれがお頼み致します」

関口「天竜川の下流新堤々端附近に陸軍の監視所が左右岸にあつて河中へワイヤーを張り、これに丸太を取付け敵の潜水艇の手致にそなえておりました」

成瀬「東派川堤切工事のとき松木がないので、松の三角枕木をつかったり、1本の枕木に大釘が二本ぐらいしめきいていないときもあつて、ほんとうに苦労しました」

市川「東派川堤切も19年度末に終りまして、残工事をやっておりましたが空襲の被害は恐ろしかった。それきたというと人夫は壘西堤防にふせ、どかん、どかん、と附丘に落ち、また仕事を始めるとまたきてどかん、どかん、女人夫は泣き出すやら仕事もできないような状態、その時懇話の見張が2尺ぐらいうごきました」

藤田「東派川堤切が完成して19年の手に地震となり河輪災害となったのですね」

市川「20年10月河輪災害のときは西派川金坑池池が破壊したので、西派の飯田中ノ町方面で400人ぐらい勢ぞろいし東派川をおち切りに行くということがわかり、東岸の役場へ連絡しましたところ役場7半鐘を喰べし人を集め警戒についたようなことがありませんでした」

栗田「市川さんと私と掛塚や十束の役場にその二を急募するのに、どしゃ
降りの時の中か行ったらかみどかっただすね」
小塚「そのときです。旧機械工場裏の旧堀（川表がゴミ捨て場になっておった
）がくずれはじめ、地元で入さわぎをしたことがあります」
森川「ではこのへんで、どうも有難うございました」

（この後集について割愛した話もありますから御了承下さい）

三十周年に寄せて

鈴木正一

「水を治むは天下を治む」とは神皇以来の至言である。

信州諏訪湖に発して迂々る余里遠州灘に注ぐ天竜川は両岸近き平野の
の町歩、東に磐田平野のの町歩の穀倉地を擁して、米作りの母乳とな
っている。然れども一旦豪雨に見舞われれば、大水満々として堤上にあふれ
濁流の暴威は堤防を破壊し、田圃を流し、人畜を呑むこと故々、されば沿岸
の住民は水に対する処置には平常細心の用意を怠らず、昔の民家の倉は背さ
尺高の基礎工事がなされている。谷戸には「上げハッツイ」（浸水の時次第
をする道具）が作られ、用心深い民家には小舟並が準備されている。如何に
洪水に処する心配がなされていたことであろうか。

冬、西風が吹く頃になると、丈夫築（堤防を補強する工事）の役に出るのが
年々の定めで、どの村からもその石高に依りて人夫が出役した。冬は「モ
ッコ」をかついで、堤防の補強工事に奉仕するのが沿岸農民の務のであった。

池田の北七畝新田の堤防がその対照たること多く、数百人の人々が「モ
ッコ」で土を運ぶ跡やかな先業は、恰も鎌口に似て冬季川筋に見られた持
存の農村風景であった。これは遠い昔のことではなく、私の幼少時に見た光
景である。又池田橋を中心した上流下流には、茨山の米橋舟が河中に並んで
この水車舟で揚かれた木は、舟で坑道に運ばれ、築地に住する人々の糧とな
った。味噌や醬油やその他の生活物資は壺池田に集った。南風をばらんだ故
「の帆掛舟が、これ等の物資を満載して水と風の力を得て、川をのぼる光景
は一幅の雨景となった。下り舟の櫂の音を春の晩に夏の夜に寝ながらに聞いた
のは幼少時の楽しい思い出である。

これが自然川天竜川の姿であった。今日では鎌口の農民姿はもう見られ
ない。水車も何時の間にか消えた。帆掛舟も見られない。櫂の音も聞く時は。

天竜川の堤防を守る治水工事は明治初年に至るまでの丈夫築時代から明治
年代、渠管に移管され、月に各堤防地先は年々改築を見、大正12年から政
府直轄の河川として工を進められることになったので、各堤防の修理は昔日
の比でない強固な姿となった。従って水害の被害も甚らいた。私は14年よ
り終戦の昭和20年迄現職水防組合長として水の護りに任じたので特に感概
に感えない。

近時に至り上流に佐久間ダム、秋葉ダム等の工が成り、往時の自然川天竜

川は一変して近代のお化粧の天竜娘と生まれ変わった。

これ等の変化に応じて建設省にては、低水式治水法工事を実施されている。民間としても天竜川治水治山同盟会を結成して、東岸、西岸全流一体となつて、水害を防ぎ水の功用を伸すことに協力をする事になった。天竜川に深い因縁をもつ竹山祐太郎代議士は水害を無くする改修工事に、水の功德を伸す農業用水の潤沢に挺身努力されていることは天竜川に關係する遠州住民の信賴し支拂する處である。

将来天竜川本流は船期より川口に至る送込水式治水工に依り、兩岸には数千町歩の耕地が生れ永入に堤防の決壊及び洪水の害なき樂土となる。一方浜る平野磐田平野ノ万町歩の米作に支障なき木を潤す心願となるであらう。

かくして水の功罪両面を全うする政治が実現を見ることであらう。

かくて沿岸光祖の明意した「上へツツイ」も無用化し、高い基礎工事の必要はなく、リヤカーは足易くスラット作業室に入ることが出来る。舟等は最兎きに処分さるべき骨董品となる。

建設省に対し今日迄永き期間に亘る御心勞を感謝し今後近代のお化粧娘としての天竜川の育成に万全の指圖を賜り、その香灰を笑々に分ちたいと思ふ。

沿岸住民の一人として

河 台 多 三

私はいつも幼き頃大雨が降ると必ず蓑笠、草鞋はきで、石油の雁燈を持って出て行った今は亡き父の姿が眼に浮かんで消えない。母の語によるとそれは堤防へ行くのだと聞かされた。大きくなって始めてそれとわかったのですが、父が長い間旧中瀬村の水防組頭をしていたので、その責任と堤防の巡視に出動したのだということがわかったのです。

追憶をたどると、昭和ノ3年6月下旬はよく雨が降って、28日から30日にかけて大雨となった。私は当時沼津市にいたのですが、沼津市でも床上げ水は千産といったほどで、附近の農村の農作物は数日かん水という大洪水であった。

この時天竜川も当然その通り大雨で大洪水とびった。6月30日頃の新聞のように覚えているが、天竜川の中瀬上島地先の堤防が危殆に瀕して、沼松の高射砲隊や軍需の工兵隊まで出動して大活動をして水防に協力、地元水防組はもちろん不眠不休の水防作業を続けたという水防組頭河台多三の談が出ていた。私は全く眼が熱くなるのを感じたのです。いつも大雨が降ると必ずみの笠で出動した父の姿がまのあたりに浮かんで来るのでした。

しかし、この危機も水防組の活動と、幸にして軍隊の協力により、ようやく危機を脱したことは、天竜川の水防史に特筆するに値するものがありました。

しからば何故にこの時の水防がこれほど重要なものであったか、それは昭和2年よりノ2年にかけて、時の内務省の天竜川の大改修において、今まで旧中瀬村の上島部落を島にして、天竜川の中瀬地先は西派川と東派川に別れていたのでありますが、上島の半分に近い土地と家屋を削り取って、東派川を広の西派川をせきとめる大工事をしたので、ところが前記の決壊に瀕したのは西派川せきとの箇所なので、もしここが決壊すると旧中瀬村は申すに及ばず、遙く沼松まで大被害を及ぼすという重大なる箇所であったのです。

この様な大變災に遭遇したので、地元民としてはこの箇所は危険でなくては到底安心して作業にいそしむことは出来ないもので、時の内務省、吾儕内務大臣に陳情したので、

当時地元送出の代議士坂下仙一郎氏は、この地元民の熱望に感ずるために、この実現方を政府当局へ強く切かけられたのです。

このようにして地元の熱望は遂にいれられて、現在の護岸工事とコンクリートブロック水防が急速に完成されたのです。かくしてそのセキ止堤防下には数百アがあり、そして中瀬地帯にはそのほか6の余町歩の耕地が重積となっており、その下方には数万人の人口と数千町歩の沃野がある治水工重要な個所となっているのです。

もともと天竜川は、この部位までが往年の天竜川で、その下方は画は三方原、東は駿河原、南は不干洋という東西三里、南北五里の老田の海と称する内海になっていたようである。(細ヶ瀬干水記による) その幾千数百年を経過して、順次天竜川は東面より決められて今日の如き天竜川となったようである。

このように天竜川もひどく決められたので、往年の争を思うと随分窮乏な思いをしているため、時々暴れるのでこの守りばケしも途断がならない。

旧中瀬村は昔は甲すまでもなく附治に入ってからまたたび水害を破っているので、水防となると全く真刺になるのです。そんなわけで古くより水防組があつて、村民皆水防組員で消防組より熱心なものでした。

私が郷里へ帰ってきて間もなく昭和22年選ばれて村長に就任してからは私自身が水防団奉例を制定して水防団長となり水の護りに任じ、大雨の降る時は必ず天竜川堤防を巡視するのが仕事の一つになって今日まで承っております。

一方私は村長在任中天竜川を中にして右岸、左岸の市町村をもって組織されている天竜川治水同盟会に加盟して、組織力の強化により一層治水の實を挙げんとしたのであります。特に天竜川はその上流に佐久間ダム建設があつて今後治水の上で重要な關係をもたすおりから、天竜川流域の水の護りは目下の急務であることを詭叫して活躍したこの同盟会の事務局長故松島邦治先生の功績は大なるものがあるといわねばなりません。

松島先生は清業篤念の人で、この重要な任務を果すために多岐な異議は議員の要託にありながら果敢西走したのでした。特に佐久間ダム建設工事起す時に、天竜川の治水の究極を話し置く必要を各關係市町村長等に説いて先遣地の視察を發行し、殊に今日天竜川の常水路固定のため、掘削機施設の導入は、松島先生が中心となつて渡辺益田工事事務所長の指導の下に北陸方面の各河川を視察した結果、天竜川にもどうしてもタワーエキスカレーターの如きものの絶対必要ある事を痛感して建設省關係方面に陳情して今日設置を見た事を思えば松島先生の功績は蓋し大なるものといふべく、これはその一端であるが、氏の天竜川に奉じたものは全く大きいのであつたが、残念な

から昭和31年病を得て遂に永眠せられた事は全く痛恨事であります。

思うに私達は天竜川のあるかぎり治水の事は片時も怠れることの出来ないことを常に銘記しておらなければならないのです。

天竜川の水の守りは沿岸住民にとっては生命的なものであります。この意味において私達は今後一層治水の思想の昇揚と実現に努力し、所謂「治にいて乱を忘れず」の覚悟が必要であらうと思ひます。

西派川締切のころ

鈴木 勇

私はこの記事を書くに当って、すでに世評されたの芳道元芳川村長足立興美氏、県議松島舜彦氏他先輩各誌堂に対し敬意と感謝を捧ぐ。

恐えば承徳年間(河川図(鈴木所有)にても明らかであるが)此侯以前(天竜川は小支流する所に流れ洪水の都度河川は災化しておった。西派川も御多摩にもれず細流であり明治4/2年頃現流に決定づけられた。私有地は河川となり国有と認定された(認定地が大半)この事は本川についてもいい得る。飯田旧地籍は十束堤に接しており此処を耕作しておった人は未だ現存している。斯くの如く急激なる河川の災化は住民に極度の不安をいだかせた。この時にこれが防衛対策として置かれたのが飯田村地ノケ村組合(法的根拠を有す)であり堤防の保護と未防の推進力となり組合費を個人より徴集し村費の補助を得て飯田村長が管理者となり各戸より1名の議員を出しこれが機能の万全を期した。耕移り、時代の進歩は洪水の恐怖も民生の安寧と産業の発展策のため国策として天竜川改修工事が開始されて緩和された。時は大正12年であり同14年には用地買収にとりかかり工事は昭和2年であった。ノケ村組合は勿論これに協力した。地元は60町歩の窪地の買上げ戸の強制移転にも内務省の計画を信じ将来の発展を望み大荷にしたがって円満に完了し同14年最窮部地区尾瀬より開始された。当時総代をしていた親父の語によると溝工に至るまでの日時は相当に要した。名古屋にも度々「オソル」「オソル」出掛けて行った。「困った」「困った」で帰った事は度々であった(時代が今とは大変異う)

新堤防の線は3線でありノケ内側の線に決した(外側の線の場合は島250町歩は大半河川)以承徳年を経て堤防工事は進歩し東麓見地域迄完了しいよいよ締切線決定にて沿岸上流郡和田中野町の材木業社の関係で相当永い年月を要したが其の訪合も決してよいよ派川の締切工事は終となるや、激突で待望の締切も一時中止の止むなきに至った。不幸は其の時に起った。昭和21年8月戦争は終った。9月末より降雨あり10月に至って激しかった。9月8日より増水し始め10日に至って水位は今迄の記録を突破した。島の中は5ヶ所より溢水。水は堤防を越した必意の処置もこれ以上は困難だった。島の中、上流下流の連絡を断にし対水処置をした。日悪しし前であった。対岸西金折地先100米の堤防決壊はこの時であった。更に悲惨そのものであ

た。収穫期を前にし1500町歩の田畑の流出、10戸の流失で2名の人命は奪われた。

夜に入って激浪の音の間に「助けてくれ」と呼ぶ少年の声が聞えた。それも数分の後に消えた。後日それは木に登って難を避けた少年が水没寸前の声であることが判った。この時島中は1週間水没してあった。一体これでいいのか。この責は誰か、戦争か、凶務省か、食田政治か、住民の熱気か、改修工事中途にしてこの犠牲は誠に残念至極であった。私達は此の時立場と強力組織を持つ必要を身にしみて感じた。我等の祖先は身を以ってこの地を開拓した。堤防も私費を以って構築した。しかし自然の偉力は一舜にしてこれを潰滅もする。要は飯田、芳川共々に島の中より首長を出すことであり、併せて締切完成の早期実現をはかることである。結果は案の如く芳川は足立、飯田は鈴木が並べられ人地財力目的達成に邁進した。両派両村並に飯田村地ノケ村組合は一丸となって西派川締切の猛進動を開始した。東京、名古屋にも陳情をした。情勢は好転した。この時これに対処する和向以北の同盟会の諸氏が持上り両部の我々にも加盟の請あり東岸の町村とも合同の合意もあって先ず両岸の一丸を組織する事を先にした。天竜川全域に渉る建設省工事に協力し地元の要望とも具申する合を強力化した。

この時和田村を中心とする締切反対の運動が西岸の一部と東岸全部の請印をまとめ中央並にG.H.Oの天然資源局あたり迄も反対運動が上って行ったが佐久間ダムの関係や天竜の総合的発展の将来を考え、大荷を見る明ある人達と、知事小林武二氏の断に依りこの運動も終りをとげた。

次の来たものは建設省内現場における思想的行動に依る工事は進歩であった。しかしこれも伊東局長の英断で解決された事であった。地元は立神局長のもと、柿原松工事々務所長、戸田政官の終始交らぬ計画並に意見とは絶対の尊敬と信頼をおしまなかつた。直接川の野直の締切も準備と計画の宜しきを得て順調に進捗したのは幸であった。この間竹山代議士の御尽力は筆舌では尽せない。私の母は日夜神様の如く尊敬している。斯くして取柄の多かつた西派川も昭和26年12月完了した。恐えば後継者継承の締切完成。完成の竣工式も感激の喜びと泪の裡に終り、諸先輩の室に感謝し村内挙げて3日間の祝を致したことはいう迄もない。

天竜川改修期成同盟会は東部と合同して、天竜川治水期成同盟会に飛躍強化されたことは真に天竜の為目出度き事である。我々は現職現所長のもとに合同の30周年記念に当り益々強力活潑の誓を捧ぐる。

私達ここに竹山代議士、県議松島舜彦氏、当局4代の局長、3代の所長

技術の芦沢校長他関係各諸君、並に我々定立、大場、鈴木の3代表を常に叱咤激励下さった。組合会議長袴田辰次氏、元副の元志鈴木茂兵衛氏及各地区民各位の御理解、応援を賜った対策各町村長各位に深甚の感謝申しつつ競争を終る。

工 事 年 表

年月日	記 事	社会のうごき
明 3.10	工部省設けらる(土木をふくむ10寮と測量司の取制あり)	
明 7.2.17	中ノ町に船橋かかる	
明 7.6	金原明善天竜川通堤防会社をおこす	
明 7.11	掛塚橋設けらる	
明 8.6	リンドー天竜川の調査指導に来る(9月まで)	
明 8.7	鹿島壘水堰設けらる	
明 9.4	金原明善改修工事にかかる(ケレップ水制をおこなう)	
明 9.11	中ノ町橋設けらる	
明 10.1	土木寮は土木司となる	
明 12	東縁8ヶ村聯合堤防組合結成さる	
明 12	西縁11ヶ村聯合水防組合結成さる	
明 14.11	治河協力社解散す	
明 15.1	中ノ町壘水堰設けらる	
明 15.11.16	浜松製糖所開所す	
明 16.2	池田橋設けらる	
明 16.12.9	テレーケ工法選定のため天竜川へ実地検分に来る	
明 17.5	掛塚壘水堰設けらる	
明 18 /	道前山院木は神田陸運より買収され竣工、寺谷用水(使用す)	
明 18	オノ次改修工事着工さる	
明 20.4	水利立功会組織さる	
明 22.7	東海運開通す	
明 26	木工地天竜川にて考察す(小西重之助)	
明 29.4	河川法施行さる(33年適用となる)	
明 33.3.31	オノ次改修竣工す	
明 41.4	水害予防組合法施行さる	
明 44.2	大橋預備案27回帝國議会において治水政策について奮闘す	
明 44.8.5	大出氷あり度區の水位クマクマ	
明 44.10.31	馬島橋設けらる	
大 9.6	天竜川改修実測調査にかかる	
大 12.1.14	金原明善死去	
大 13.9.3	天竜川改修事務所の位置を決定す(中ノ町村)	
大 14.11.1	掛塚、河輪、飯田、芳川の丈堰はじまる。	
大 15.12.1	用地交渉はじまる。	
昭 2.1.16	河輪機械堰削工事にかかる	
昭 2.7.1	天竜川改修事務所主任匹田敏夫となる	
昭 4.1.16	はじめて築堰工事に着手する(河輪築堰工事)	
昭 4.2.16	ドラブラインを使用する(芳川堰削工事)	
昭 4.5.10	主任西尾辰吉となる	
昭 4.12.1	牛トロを使用する(運搬に牛力を用いる)	
昭 5	先祖代々の自費請おわる	
昭 5.10.10	ディーゼル機関車を使用す 7.5t 14HP (12.11はじめて運転)	
昭 6.3.31	浜松市上水道水源地川畔に設けらる	
昭 7.2.28	馬トロを使用する(運搬に馬力を用いる)	
昭 7.3.10	はじめて護岸工事に着手す(掛塚築岸工事)	
昭 7.3.31	掛塚壘管設けらる(着手昭 6.11)	
昭 8.7.1	天竜川大橋竣工す	
		パナマ運河起工(1881)
		日清戦争(1894~95)
		ライト兄弟飛行機発明(1903)
		日露戦争(1904~05)
		パナマ運河開通(1914)
		オノ次世界大戦(1914~18)
		國際運團成立(1920)
		ヒンバーフ大西清橋新す(1927)
		世界經濟恐慌おこる(1929~32)
		蕨州事変(1931)
		5.15事件(1932)
		ニューデール改修(1933)

年月日	記	事	社会のうごき
昭9.11.7	改良土床を使用する		
昭10.4.16	東派川締切工事に着手する(十束築堤工事)		
昭11.3.18	森早ダム竣工		2.26事件(1936)
昭12.3.22	大平川締切工事着手する(二俣築堤工事)		日中戦争(1937)
昭13.6.16	鹿島量水標自記となる		
昭12.7	二俣堤橋架設される		
昭13.7.4	出水あり、鹿島の水位5米48 災害をうく		
昭13.7.19	主任塚本積となる(工務部長)		
昭13.10.1	主任千田正重となる(工務部長)		
昭14.2.26	はじめて水側工事に着手す(中瀬水側工事)		オ又次世界大戦(1939~45)
昭14.5.15	大平川締切工事竣工		
昭14.6.6	所長松久正次となる		
昭14.12.14	所長仁森太郎となる		
昭19.3.25	所長畑中次雄となる		太平洋戦争(1941~45)
昭19.3.31	東派川締切工事竣工		ソビエトがソ連完成 V1号V2号(1944)
昭19.12.7	大地震あり災害をうく		
昭20.10.5	鹿島の水位7米12 災害をうく		原子爆弾長崎に落とす、国連誕生(1945)
昭21.1.16	所長畑中次雄となる		
昭21.6.10	決名用水通水開始す		
昭22.1.24	労協組合結成される		2.1スト中止(1949)
昭22.3.31	磐田用水頭首工完成通水開始す		
昭22.6.1	天竜上流改修工事着手す		
昭23.4.1	磐田市うる		
昭23.11.1	所長金子收事となる		
昭24.4.30	所長奥田秋夫となる		下山、三鷹、松川事件おこる(1949)
昭24.6.4	水防法施行される		
昭24.8.16	大量の行政整理おこなわる		
昭25.4.1	西派川締切工事に着手す(西派川締切築堤工事)		レッドパージはじまる(1950)
昭25.5.26	国土総合開発法施行される		
昭25.6.12	出水あり鹿島の水位6米34		
昭25.8.29	所長早田英夫となる		
昭26.3.31	西派川締切工事竣工		
昭26.6	天竜川治水促進期成同盟結成される		カンフアンゴ対日講和会議(1951)
昭26.7.1	所長秋草敏となる		
昭26.10.10	所長村瀬雨となる		
昭27.3.31	半場、飯芳植造、平岡ダム竣工		
昭28.4.1	所長渡辺豊となる		英登山隊エヴェレスト征服(1953)
昭28.6.1	掛塚堤防延長工事に着手す		
昭28.7.20	出水あり 鹿島の水位6米00		
昭29.6.11	コンクリートブロック工法をとり入れる(八咫築岸工事)		原子力発電開始(1954)
昭29.10.8	磐田に50W無線局開設される		
昭29.10.22	所長に "		
昭29.11	天竜川茨水予報連絡会結成される		
昭30.3.3	掛塚有料橋、永久橋となり道路公園管理す		国連十周年記念式典(1955)
昭30.7.11	水防法改正される		
昭30.7.18	竹山建設相をむかえ総合水防演習に建設機参加す		
昭30.9.1	鹿島量水標に透晴水位計をとりつける。		
昭31.4.26	半場、飯芳植造改築される		
昭31.9.1	軽短波パトロールカーを置く		
昭31.11.15	佐久間ダム竣工		

年月日	記	事	社会のうごき
昭32.11.6	秋葉ダム貯水開始		
昭32.11.30	天竜川改修30周年記念行事おこなわる		人工衛星あがる(1957)

動 静 一 覧

氏 名	動 務 先	住 所
松波 秀一		岐阜市千手堂七町2)15
・西田 敏夫		
・東 豊		
・立川 勇		
品崎 道雄		
宇佐美 賢一		
生井 健秀		
藤井 顕輔	三重県四日市市埋管工業用水工争事務所	四日市市大字浜田字橋木(勤務先)
川登 次郎		
新井 恒二		
佐藤 正四郎	建設省中部地運部田工争事務所	横浜市港北区日吉町中1東545 越田市見付加茂川通り(勤務先)
・香越 栄		
・永山 三石門		
・江田 幸之助		
・鈴木 義雄		
・藤田 無吉		
・金井 弥七		
・沼田 金平		
・高橋 真一		
・西尾 辰吉	法政大学工学部	松川市和川清水 岐阜市関屋町又丁目15 瀬和市中町4,114
・高塚 忠夫		
・辰谷川 忠一	運川不動産社不動産部工務部	浜松市元目町67
・青田 政一		
・相原 忠	株式会社建設式会社名古屋営業所	江南市小坂寺屋敷
・井野口 基太郎		
・橋本 昭明	名古屋工業大学工学部土木工学科	名古屋市中区和区御器所町(勤務先)
・荒金 香夫		
・鈴木 米太郎		
・高橋 善太郎	建設省中部地運不審川下流工争事務所	桑名市桑太一丸(勤務先)
・岩城 忠雄		
・高田 孝男		
・天田 泰吉		
・河合 敬介	建設省中部地運不審川上流工争事務所	岐阜市思節町又丁目(勤務先)
・北島 宗一		
・中込 博	建設省関東地運部工争事務所	辰岡市早生津町4丁目908(勤務先)
・石野 正男	〃 中部地運三重 〃	津市上井町津興(勤務先)
・長田 清七	〃 〃 辰岡部厚生課	名古屋船和区狭間町30(勤務先)
・狩田 幸七		
・石井 三千恵	建設省中部地運掛川工争事務所	東京都国立区長田町347 掛川市掛川1065(勤務先)
・土屋 健	〃 〃 磐田 〃	磐田市見付加茂川通り(〃)
・山口 鹿之助		
・牛丸 要男	建設省中部地運掛川工争事務所	掛川市掛川1065(勤務先)
・伊藤 晃		
・長屋 世一		
・市川 博通		
・鈴木 信吉	建設省中部地運掛川工争事務所	掛川市掛川1065(勤務先)
・橋本 次雄	〃 近畿 〃 〃 〃	大政市西區土佐屋又丁目(〃)
・吉田 吾次	〃 中部 〃 不審川下流工争事務所	桑名市桑太一丸(〃)

氏 名	動 務 先	住 所
・村松 次	建設省中部地運掛川工争事務所	高岡市赤根又553(勤務先)
・藤田 平司	〃 〃 磐田 〃	磐田市見付加茂川通り(〃)
・後藤 宗大	三重県土不審川上流	津市栄町(〃)
・松本 七之助	建設省中部地運掛川工争事務所	羽崎市坂屋町(〃)
・安永 正善	〃 〃 磐田 〃	磐田市見付加茂川通り(〃)
・前田 正司		
・吉原 兼吉		
・三好 次郎	建設省土不審川上流工争事務所	沼津市東上高倉山下(勤務先)
・石原 太郎		
・吹田 秀		
・河 信治		
・坂本 福		
・松久 正次	名大入理工学部	津島市沢島町36
・畑谷 正興	建設省河川局防火課	東京都千代田区麹町八段人争院ビル(勤務先)
・寺崎 清吉	〃 中部地運掛川工争事務所	磐田市見付加茂川通り(〃)
・陶山 義生		
・石井 三郎		
・矢口 武		
・稻村 今吉		
・工藤 底平	静岡県太田川改修事務所	静岡県掛川市高尾(勤務先)
・本間 辰	建設省中部地運掛川工争事務所	豊橋市三ノ相町(〃)
・山田 紀八郎		
・立見 政一	建設省中部地運及務部東務課	名古屋市中区和区扶間町30(勤務先)
・深田 正次		
・仁科 太郎	浜松市役所建設部	浜松市神奈川区反町26(勤務先)
・金子 收平	建設省中部地運不審川上流工争事務所	岐阜市思節町又丁目(〃)
・市川 次郎		
・藤原 次郎		
・新村 田崎子	建設省中部地運掛川工争事務所	磐田市見付加茂川通り(〃)
・石松 正太郎		
・戸田 兵夫	建設省河川局防火課	東京都千代田区麹町八段人争院ビル(勤務先)
・鈴木 善夫	〃 中部地運掛川工争事務所	豊橋市三ノ相町(〃)
・古部 哲郎	〃 〃 磐田 〃	磐田市(〃)
・浅田 三	〃 〃 磐田 〃	磐田市見付加茂川通り(〃)
・鈴木 正元		
・飯沼 登保	建設省中部地運掛川工争事務所	沼津市河崎町 磐田市見付加茂川通り(勤務先)
・村松 隆		
・武田 源一		
・鈴木 隆二		
・松岡 健之進	建設省中部地運名古屋機械整備事務所	天徳市西郷江 静岡県掛川市津町 浜松市和町町 名古屋市中区和区大町(勤務先)
・河中 照一		
・名倉 正政		
・脇 河		
(旧式)早川 辰	建設省中部地運掛川工争事務所	静岡県磐田郡津島町松波井 津松市名残町市役所住宅25ノ2 浜松市(勤務先)
・高橋 五子		
・柳原 秀明		
・谷崎 実	建設省中部地運掛川工争事務所	静岡県磐田郡津島町 掛川市掛川1065(勤務先)
・加納 淳	〃 〃 磐田 〃	磐田市見付加茂川通り(〃)
・高木 吾士夫		
・永田 金太郎	建設省中部地運掛川工争事務所	磐田市見付加茂川通り(勤務先)

氏名	勤務先	住所
小栗 直知	建設省道路局高速道路課	東京都千代田区愛人垂院ビル(勤務先)
興田 秋夫	東京都立大学工学部土木工学科	" 品川区大井敷洲町237 (")
早田 英天	三井建設株式会社	" 中央区日本橋区(")
柿 徳市	建設省関東地区利根川水系砂防工事事務所	群馬県北群馬郡澁川町 (勤務先)
板橋 武雄	" 中部 磐田工事事務所	磐田市見付加茂川通り (")
栗田 政一	" " 掛川 "	掛川市掛川1065 (")
平 鳳岳	" " 岡崎 "	岡崎市板屋町 (")
山崎 章	" " 豊田 "	磐田市見付加茂川通り (")
水谷 一夫	" " " "	" " (")
石川 敏夫	" " " "	" " (")
香山 士		磐田市中泉御殿
山内 善平	磐田市役所事務課	磐田市中央町 (勤務先)
鈴木 正一		静岡県磐田郡聖田村中野戸
河合 多		" 須名郡甲斐村
鈴木 三勇		愛知県大塚町

※ 勤務先にお集村の方はお知らせ下さい。
 ・印は故人